

宮城県文化財調査報告書第 159 集

# 北原遺跡

平成 5 年 12 月

宮城県教育委員会  
仙台土木事業所

## 序 文

宮城県には、数十万年を遡る時代から各時代にわたって数多くの埋蔵文化財が存在することが知られており、これらは豊かな自然と長い伝統の中で培われ、育まれてきた貴重な遺産であります。このような、かけがえのない先人の文化遺産を保存し活用するとともに、将来に伝えていくことは現代に生きる私たちの大きな責務と考えられます。

したがって、近年各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷上にある文化財を再認識し、保護・保存するにとどまらずそれを特色ある地域づくりの拠点として整備し活用していこうとするところが多くなっていることは、まことに有意義なことと存じます。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を、具体的な物質的資料に即して解明することができる貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々にとって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものでもあります。

しかし、埋蔵文化財は土地と深く結び付いてこれまで保存されてきたという特質をもっており、そのため各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき、平成4年度に当教育委員会が実施した発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。

最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘調査にあられた皆様に深く感謝申し上げます次第であります。

平成5年12月

宮城県教育委員会教育長 鈴 鴨 清 美

## 例 言

1. 本書は県道仙台・岩沼線の改良工事に先立つ、宮城県岩沼市北原遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本書における土色の記述は『新版標準土色帳』（小山・竹原 1973）に基づく。
3. 本書の第 1 図は国土地理院発行の 1/25,000「岩沼」、「仙台空港」を複製して使用した。
4. 報告書における遺構、遺物の縮尺は以下のとおりである。  
遺構（第 3、72、73 図を除く）・・・1/60 遺構（第 3 図）・・・1/600  
遺構（第 72、73 図）・・・1/240 土器（第 39 図を除く）・・・1/3  
土器（第 39 図）・・・2/9 石器・・・1/3 土製品、石製品...1/3
5. 住居跡平面図の表記については以下のとおりである。  
外形の表記・・・床面が残存している場合にはその範囲と壁面の形状を示し、残存していない場合には掘り方の形状を示した。  
住居跡内の遺構の表記・・・掘り方をもつ遺構の場合にはその上面と底面の形状を示した。柱痕跡や黒褐色土帯が検出された場合には、併せてその上面での平面形をスクリーントーンで示した。炉や貼床の範囲は、スクリーントーンでそれぞれ示した。
6. 出土遺物の表記については以下のとおりである。  
土器の表記・・・器面に炭化物が付着している場合、器面に赤彩が施されている場合には、スクリーントーンでそれぞれ示した。
7. 報告書の作成にあたっては、調査員全員の協議を経て下記のもので執筆した。  
第 1 章、第 2 章・・・小村田達也 第 3 章・・・木皿直幸、三好秀樹  
第 4 章 1・・・小村田達也 第 4 章 2・・・三好秀樹
8. 発掘調査及び資料の整理に際し、次の方々から多大なご指導、ご協力を賜った。この場を借りて感謝申し上げたい。（敬称略、順不同）  
岩沼市教育委員会、須藤隆、阿子島香、辻秀人、佐々木博、藤沢敦、次山淳、渡辺清子、斎ナオ子、岩沼市長岡・三色吉地区の方々
9. 北原遺跡に関する実測図、写真などの記録や出土遺物は、宮城県教育庁文化財保護課が保管しており、求めに応じて公開している。

## 目 次

第1章 遺跡の立地と周辺の環境	1
第2章 調査区の設定と調査の方法	4
第3章 発見された遺構と出土遺物	9
1. 竪穴住居跡と出土遺物	9
2. 土壙と出土遺物	72
3. 円形周溝と出土遺物	87
4. その他の出土遺物	89
第4章 考察	93
1. 竪穴住居跡出土の土師器	93
2. 竪穴住居跡	97
引用参考文献	107

## 調 査 要 項

遺跡名 : 北原遺跡(きたはらいせき) 宮城県遺跡地名表登録番号 15007  
遺跡記号 : ON  
遺跡所在地 : 岩沼市長岡字北原、同市三色吉字杉の内ほか  
発掘面積 : 約 7000 m<sup>2</sup>  
調査期間 : (1991年9月30日~10月7日.....確認調査)  
            1992年4月6日~9月11日  
調査主体 : 宮城県教育委員会  
調査担当 : 宮城県教育庁文化財保護課  
調査員 : 佐藤則之、菊地逸夫、古川一明、木皿直幸、小村田達也、千葉正康、三好秀樹、  
            伊藤博道(丸森町教育委員会)

## 第1章 遺跡の立地と周辺の環境

北原遺跡は岩沼市長岡字北原、及び同市三色吉字杉の内周辺に存在する。

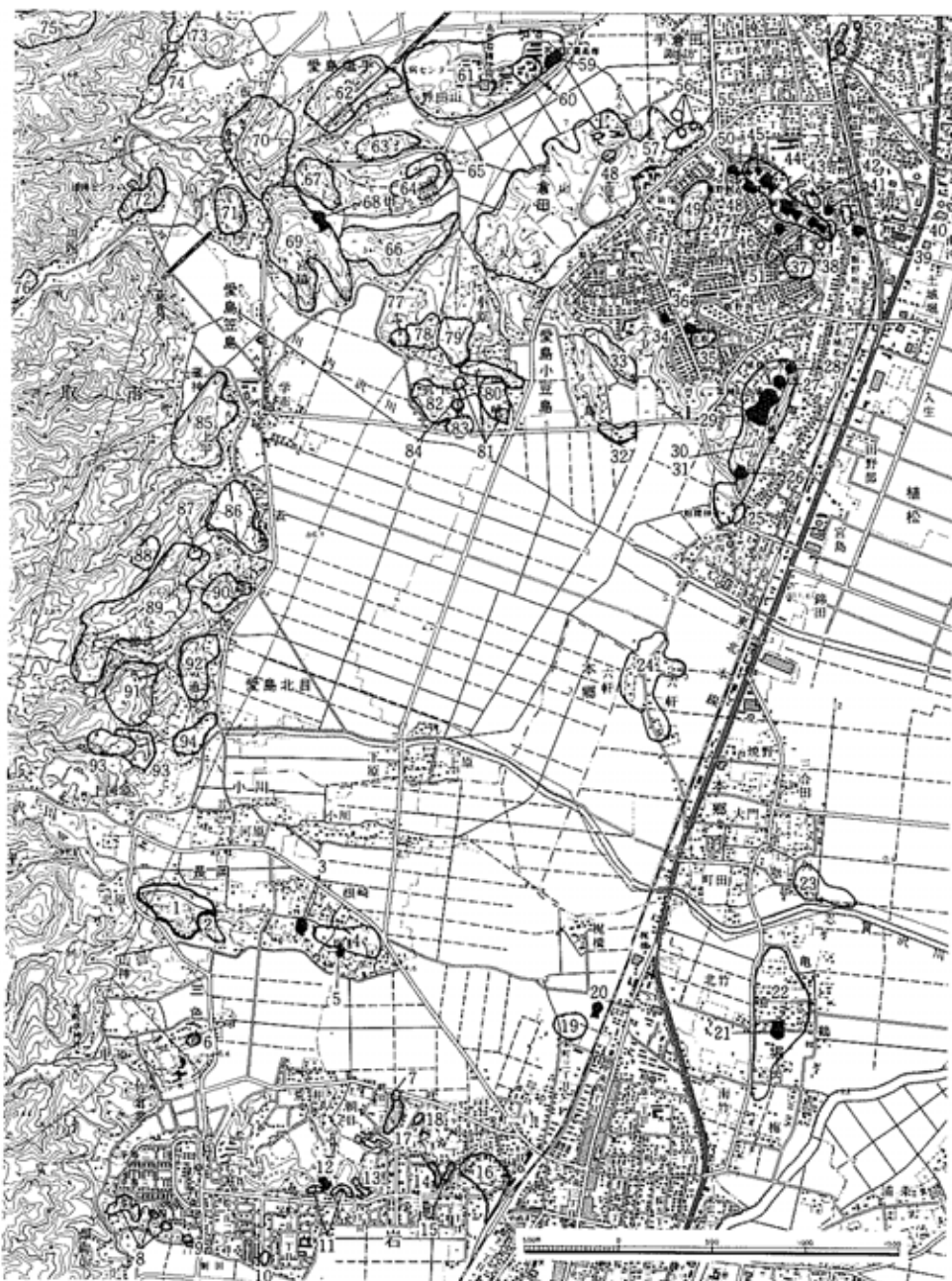
遺跡の周辺に広がる仙台平野は東西の幅が10kmほどで、数列の浜堤と、名取川、阿武隈川その他の小河川の形成した自然堤防、及びこれらの後背湿地から成り立っており、標高はおおむね5m以下である。この平野に向かって西方の山地から幾つかの小さな丘陵が突き出している。遺跡はこのような丘陵の内の一に立地している。遺跡周辺では丘陵の標高は約30m、周囲の低地との比高は約25mである。丘陵の南斜面には小さな支谷が幾つかあり、北斜面に比べて複雑な地形となっている。

岩沼市から名取市にかけての地域は遺跡の宝庫であり、特に古墳時代の遺跡には見るべきものが多い。北原遺跡北方約7kmの愛島丘陵上には、東北地方最大の前方後円墳である雷神山古墳(国史跡、古墳時代前期)を初め、5基の前方後方墳からなる飯野坂古墳群(国史跡、古墳時代前期)、名取大塚山古墳(古墳時代中期)などの大小の古墳が数多く存在する。また十三塚遺跡や、西野田遺跡(古墳時代前期)、野田山遺跡(古墳時代前期)などの集落遺跡も広く分布し、当時この愛島丘陵が仙台平野の古墳文化の中心地であったことをうかがわせる。

一方北原遺跡東方約2~3kmの微高地上には亀塚古墳(県史跡)、温南山古墳がある。また山の神遺跡では古墳時代前期と考えられる集落遺跡が調査され、またそれに隣接して前方後円墳の存在が推定されている(古川1993)。

このほかにも周辺の地域の丘陵斜面には、長谷寺横穴古墳群、小豆島横穴古墳群などの古墳時代後期あるいはそれ以降の横穴古墳群が数多く存在している。

なお今回の北原遺跡の調査対象区内においては、当時国学院大学の樋口清之氏が昭和26年に発掘を行い、竪穴住居跡4軒を検出している(樋口1951)。その報告によると竪穴住居跡は『いずれも角丸湾曲辺のほゞ正方形に近い浅い竪穴で、一辺五米三 糎内外、深さ二〇一四 糎。中心に炉跡を持ち、周辺に添って柱孔があり、そのうち二個までは貯蔵穴と想われるピットを床面縁寄りに持って居つて、その中にはほぼ完形に近い土器(主として埴形)が一個内至数個発見せられた。竪穴は比較的離れて存在するが、床高を別にして重複したものもあった』という。今回の北原遺跡の調査では、この時調査された住居跡も検出されている。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	北原遺跡	旧石器、縄文早～後、弥生、古墳前	48	山居古墳	古墳
2	杉の内遺跡	縄文早・前、弥生、古墳	49	飯野坂西遺跡	弥生、古墳、古代
3	長塚古墳	古墳中	50	山居北古墳	古墳
4	上根崎遺跡	縄文、古墳中	51	薬師堂古墳	古墳
5	新明塚古墳	古墳中	52	名取郡南方核断層敷跡	近世
6	熊野遺跡	古代	53	宝鏡院跡	近世
7	鷺崎横穴古墳	古墳	54	町裏遺跡	古代
8	長谷寺横穴古墳群	古墳後	55	稲塚館跡	中世
9	平等山横穴古墳群	古墳後	56	稲塚古墳群	古墳中
10	新田遺跡	縄文、古墳、古代	57	十三塚遺跡	縄文、弥生、古墳前・中
11	白山横穴古墳群	古墳後	58	中沢家敷跡	近世
12	白山古墳	古墳	59	野田山古墳	古墳後
13	引込横穴古墳群	古墳後	60	野田山貝塚	縄文
14	石垣山横穴古墳群	古墳後	61	野田山遺跡	弥生、古墳～古代
15	土ヶ崎横穴古墳群	古墳後	62	西野田遺跡	旧石器、縄文前・後、弥生、古墳、古代
16	崎ヶ崎城跡	近世	63	前野田西遺跡	弥生後
17	朝日古墳群	弥生、古墳	64	前野田東遺跡	弥生後、古代
18	朝日城跡	古墳、古代	65	前野田館跡	中世
19	かめ塚西遺跡	弥生、古墳	66	泉遺跡	縄文、弥生、古墳、古代
20	かめ塚古墳	古墳中	67	北台遺跡	縄文、弥生、古代
21	温南山古墳	古墳	68	大塚山古墳	古墳中
22	越内遺跡	古墳	69	南台遺跡	縄文～古代
23	山の神遺跡	古墳前	70	寶ノ窪古墳群	古墳中
24	西六軒遺跡	古墳、古代	71	笠島橋寺跡	奈良、平安
25	館腰横穴古墳群	古墳後	72	東南沢遺跡	縄文、古代
26	切通上古墳	古墳後	73	西端沢遺跡	縄文
27	小塚古墳	古墳中	74	岩沢遺跡	古代
28	北小塚古墳	古墳中	75	岩沢館跡	中世
29	雷神山古墳	古墳	76	西南沢遺跡	古墳、古代
30	館腰遺跡	弥生、古墳	77	北東宮下古墳	古墳後
31	横松遺跡	中世	78	北東宮下遺跡	縄文、弥生、古代
32	小豆島横穴古墳群	古墳後、奈良	79	五郎市遺跡	縄文、弥生、古墳前、平安
33	山の前横穴古墳群	古墳後、奈良	80	松崎遺跡	弥生、古墳、古代
34	一本杉古墳	古墳中	81	宇賀崎古墳群	古墳中・後
35	大木戸貝塚	縄文早	82	宮下遺跡	縄文、弥生、古代
36	天文塚古墳	古墳	83	宇賀崎貝塚	縄文早・前
37	淡路山館跡	中世	84	山の前横穴古墳群	古墳後、奈良
38	飯野坂横穴墓	古墳、奈良、平安	85	南小袋石遺跡	縄文、古代
39	宇町古墳	古墳後	86	表前遺跡	縄文中、弥生後、古代
40	山下遺跡	古墳、古代	87	窪古墳	古墳
41	雲南古墳	古墳後	88	東高森遺跡	平安
42	飯野坂東遺跡	縄文、弥生、古代	89	柳沢遺跡	縄文、古墳、古代
43	飯野坂遺跡	弥生中、古墳中・後	90	宿前遺跡	弥生、古墳、古代
44	観音塚古墳	古墳	91	北目城跡	中世
45	観音塚北古墳	古墳	92	竹の花遺跡	縄文、古代
46	カラト塚古墳	古墳後	93	山崎南貝塚	縄文中・後、古代
47	宮山古墳	古墳	94	石沢遺跡	縄文、弥生、古墳、古代

## 第2章 調査区の設定と調査の方法

今回の北原遺跡の調査対象区は、東西に延びる丘陵を南北に横断する形で設定されており、その面積は約 12,000 m<sup>2</sup>である。対象区北半(1~3 トレンチ周辺)では丘陵はなだらかな斜面となっている。また対象区中央部は丘陵の頂部で標高は約 29m、比較的平坦な面が広がっているが、対象区東隣の支谷に向かってわずかに斜面となっている。対象区南半(4~7 トレンチ周辺)には小さな支谷があり、それに向かって急斜面となっている。

本遺跡の基本層序は主に9 トレンチの層序に基づいている(第3図)。

層(現耕作土、調査区全域に分布)・・・暗褐色のシルト層

層(旧表土、2号円形周溝周辺にのみ残存)・・・黒褐色のシルト層

層(第3図1、2層、ほぼ調査区全域に分布)・・・褐色~黄褐色のローム層

層(同図3~7層)・・・愛島パミス層

層(同図8層)・・・粘土層

平成3年9月30日から調査対象区域内にトレンチを22本設定し、確認調査を行った。その結果、丘陵の頂部周辺から竪穴住居跡16軒、円形周溝2基を検出した。この結果を踏まえて平成4年4月6日から事前調査に入った。

まず丘陵の北側斜面にトレンチを設定したが、削平がひどく遺構、遺物ともに検出されなかった。次に南側斜面及び斜面下の支谷底にトレンチを設定した。南側斜面では6 トレンチの表土から須恵器環が1点出土したが削平が行われており、遺構は検出されなかった。また支谷底の7 トレンチからは縄文土器の小破片が若干出土したが、遺構や包含層は検出されなかった。

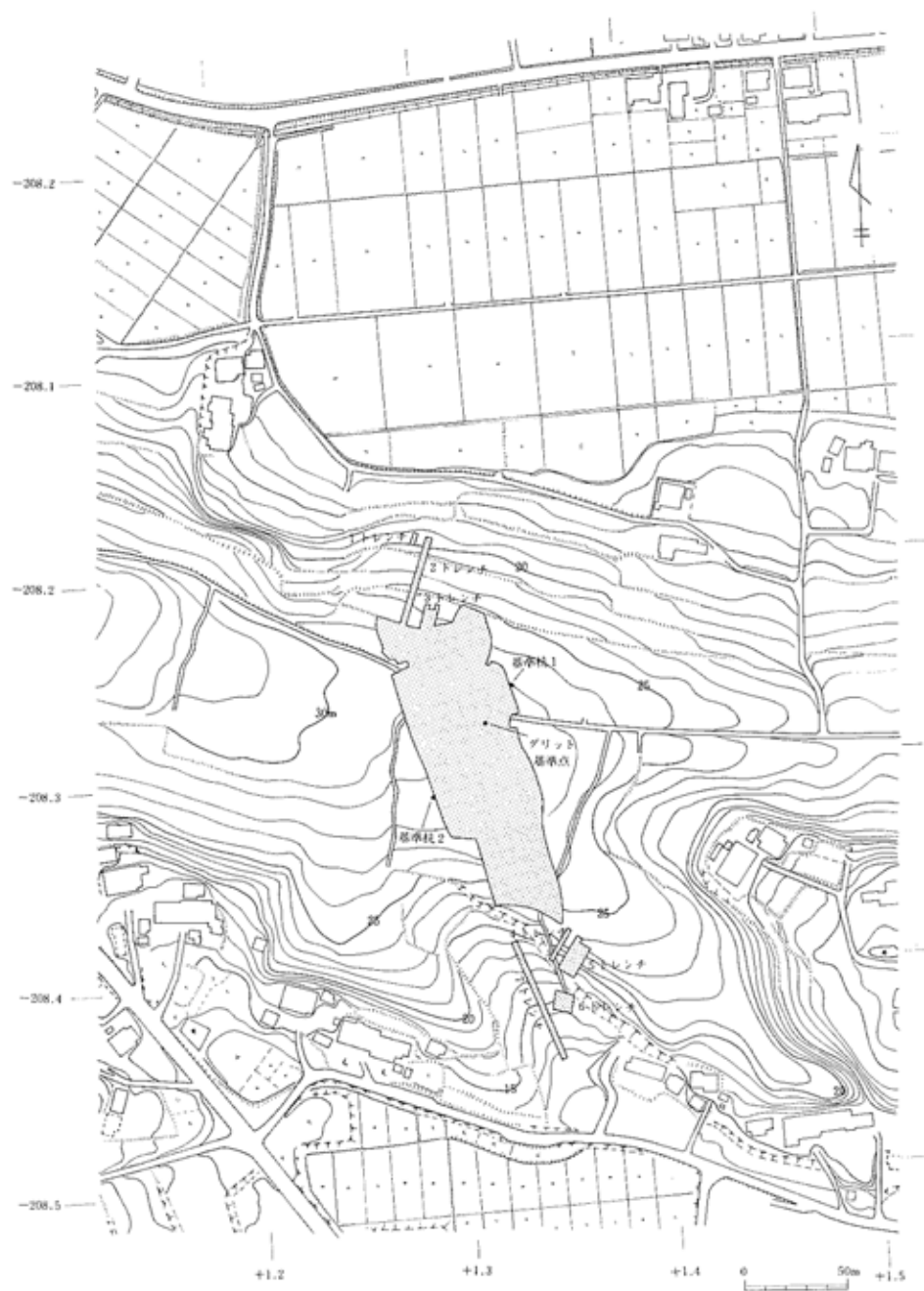
次に丘陵の頂部の、層を除去して住居跡、土壇、円形周溝などを層上面で確認し、これらを精査した。遺構の実測に際しては基準杭1と基準杭2を結ぶ線分を基準線とし、基準杭1から基準杭2方向に22mの地点を起点としてグリッドを設定した。なお基準杭1、2の国家座標は次の通りである。

基準杭1 X = -208260.334 Y = 1344.179

基準杭2 X = -208312.412 Y = 1303.891

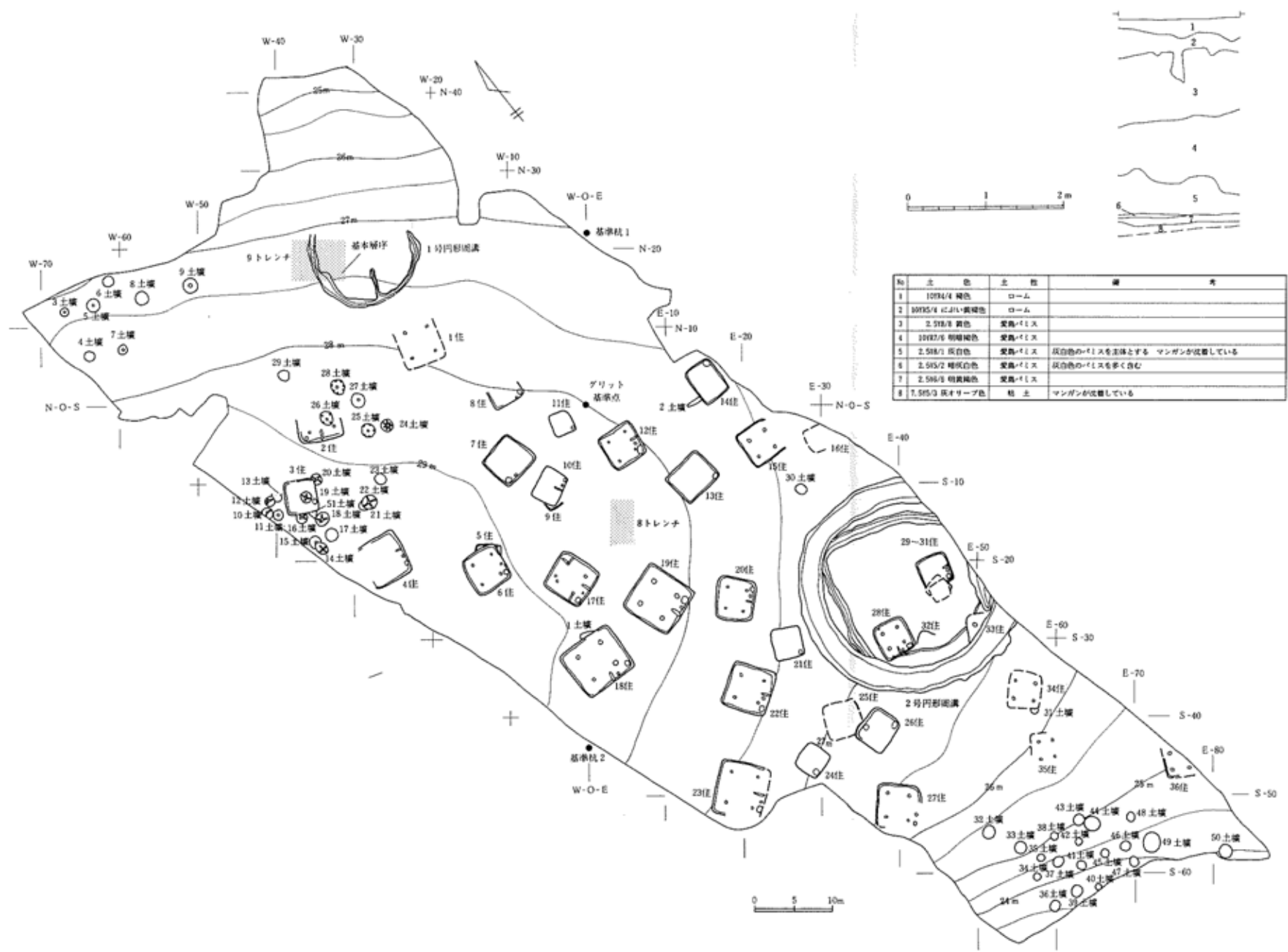
住居跡などの調査終了後、丘陵頂部(S-18、E-5付近)に8 トレンチ、北斜面(N-18、W-36付近)に9 トレンチを設定し、深掘を行った。8 トレンチでは約3m×約9mの範囲を層の上面まで約1.2m掘り下げたが遺物は検出されなかった。9 トレンチでは、約5m×約4mの範囲で層上面を精査したが、遺物は検出されなかった。





第2図 調査区の周辺の地形

8月31日に空中写真撮影を行ない、9月11日に調査を終了した。なお7月11日には現地説明会を行い、地元の方々を中心に約250名の参加を得た。また6月11日には岩沼西小学校の5年生が来跡し、体験発掘を行なった。



第3図 遺構配図・基本層序

## 第3章 発見された遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構には竪穴住居跡 36 軒、円形周溝 2 基、土壇 51 基などがあり、それらの遺構や遺構外から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石器などが出土している。

### 1. 竪穴住居跡と出土遺物

#### 【1号住居跡】（第4図）

[位置・確認面] 2号円形周溝の南、N5～11・W18～24区付近で検出した。確認面は層上面である。

[平面形・規模] 削平を受けているため全体の規模は不明であるが、掘り方の範囲から5.8m以上×5.5m以上の方形を基調とするものと思われる。

[堆積土] 掘り方埋土のみ残存する。深さは約10cmである。

[壁・床] 削平を受け、堆積土が残存していないため不明である。

[柱穴] 検出されたP1～P4は、その位置・形状・規模から支柱穴であると考えられる。現状での深さはP1が57cm、P2が47cm、P3が56cm、P4が59cmである。いずれの柱穴からも長径約15cm、短径約10cmほどの楕円形の柱痕跡が確認された。

[遺物] 出土していない。

#### 【2号住居跡】（第5・6図）

[位置・確認面] S2～5・W32～37区付近で検出した。確認面は層上面である。

[重複] 2号土壇と重複し、これより新しい。

[平面形・規模] 削平を受けているため全体の規模は不明であるが、現状から5.7m×3.4m以上の方形を基調とするものと思われる。

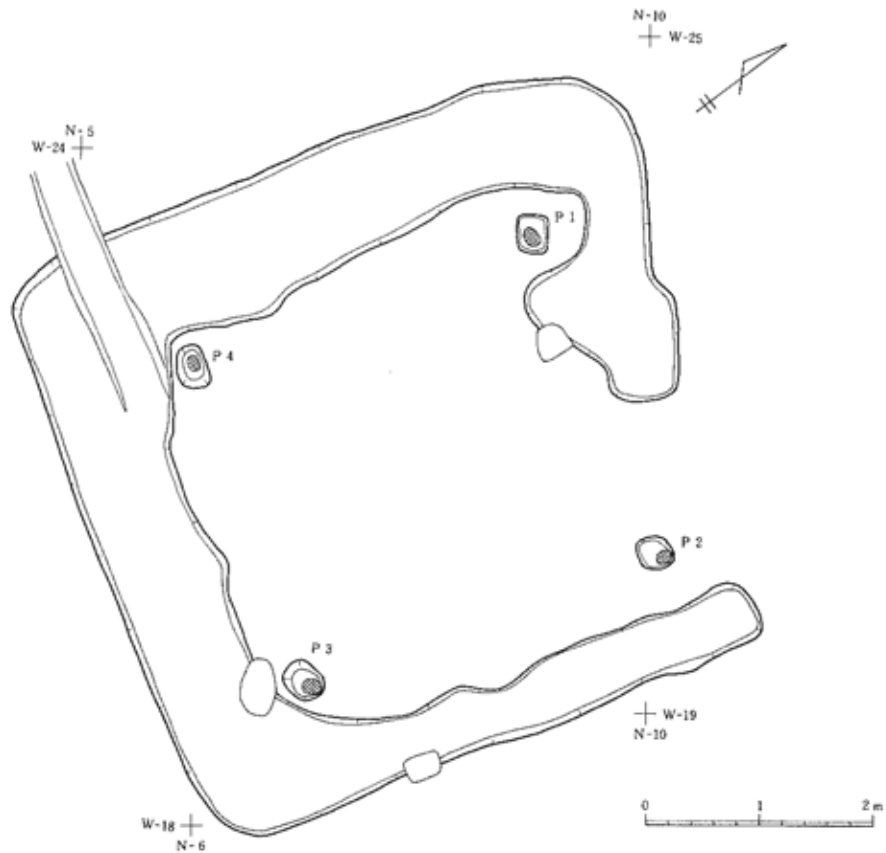
[堆積土] 6枚認められ、いずれも自然流入土である。

[壁] 地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から18cmである。

[床] 掘り方埋土を床としており、ほぼ平坦である。貯蔵穴付近には長さ90cm、幅5cm、高さ5cmの細長い粘土ブロックで盛り上げられた部分がある。

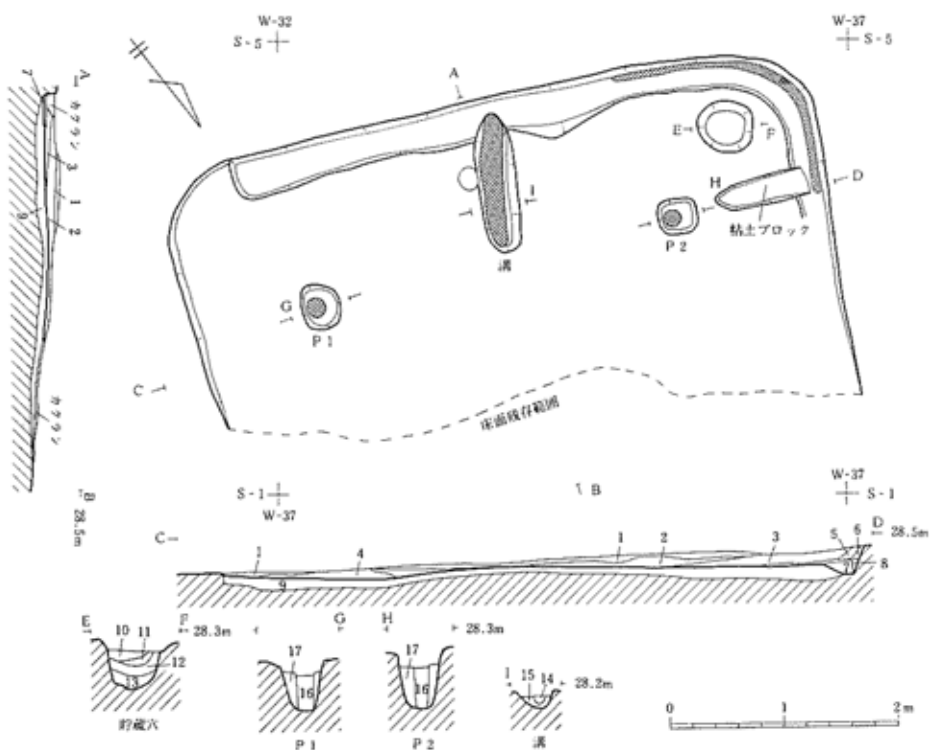
[柱穴] 検出されたP1・2は、その位置・形状・規模から支柱穴であると考えられる。いずれの柱穴からも直径約15cmの円形の柱痕跡が確認された。

[周溝] 西壁の一部および南壁で検出された。幅約35cm、深さ約10cmである。また、南西コーナー付近で周溝内の壁側に沿って、幅5～10cmのしまりのない黒褐色土部分が帯



第4図 1号住居跡

状に検出されている(以下、黒褐色土帯と仮称する。平面図のスクリーントーン部分)。  
 [貯蔵穴]住居跡の西隅で検出された。平面形は一辺約 50cm の隅丸方形で深さは約 45cm である。堆積土は 4 枚認められ、すべて自然流入土である。  
 [その他の施設]住居跡の南西辺中央で壁に直交する方向の溝が検出された。長さ 1.3m、幅 30cm、深さ 15cm である。また、この溝の中央では長さ 1.2m、幅 1.2m、深さ 8cm の黒褐色土帯が検出されている。なお、この溝は周溝と重複し、これよりも新しい。  
 [遺物]床面から土師器甕が出土している(第6図)。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。



No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	新しい土 地山ブロックを多く含む
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	自然成土 地山ブロックを多く含む
3	10YR3/3 暗褐色	シルト	自然成土
4	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	自然成土 地山ブロックを多く含む
5	10YR2/2 黒褐色	シルト	自然成土
6	10YR3/4 暗褐色	シルト	自然成土
7	10YR5/4 濃い黄褐色	シルト	堆積層り方埋土 地山ブロックを多く含む
8	10YR5/4 濃い黄褐色	シルト	黄褐色土層
9	10YR5/4 濃い黄褐色	シルト	在位層り方埋土 地山ブロック・黄褐色土ブロックを多く含む
10	10YR3/1 黒褐色	シルト	貯蔵穴埋積土 在位埋積土2種と同一
11	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	貯蔵穴埋積土
12	10YR3/4 暗褐色	シルト	貯蔵穴埋積土
13	10YR4/4 褐色	シルト	貯蔵穴埋積土 地山粒を多く含む
14	10YR3/3 暗褐色	シルト	材積跡
15	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	黄理土 地山ブロックを多く含む
16	10YR2/2 黒褐色	シルト	主貯蔵穴埋積土
17	10YR5/3 濃い黄褐色	シルト	主貯蔵層り方埋土

第5図 2号住居跡



第6図 2号住居跡出土遺物

【3号住居跡】（第7・8図）

[位置・確認面] S9～14・W35～39区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[重複] 16・19・20・51号土壇と重複し、これらよりも新しい。

[平面形・規模] 4.2m×4.1mの隅丸正方形を呈する。

[堆積土] 1枚のみで、自然流入土である。

[壁]地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から10cmである。

[床]掘り方埋土を床としているが削平を受けており、西辺付近及び南東隅付近のみ残存している。

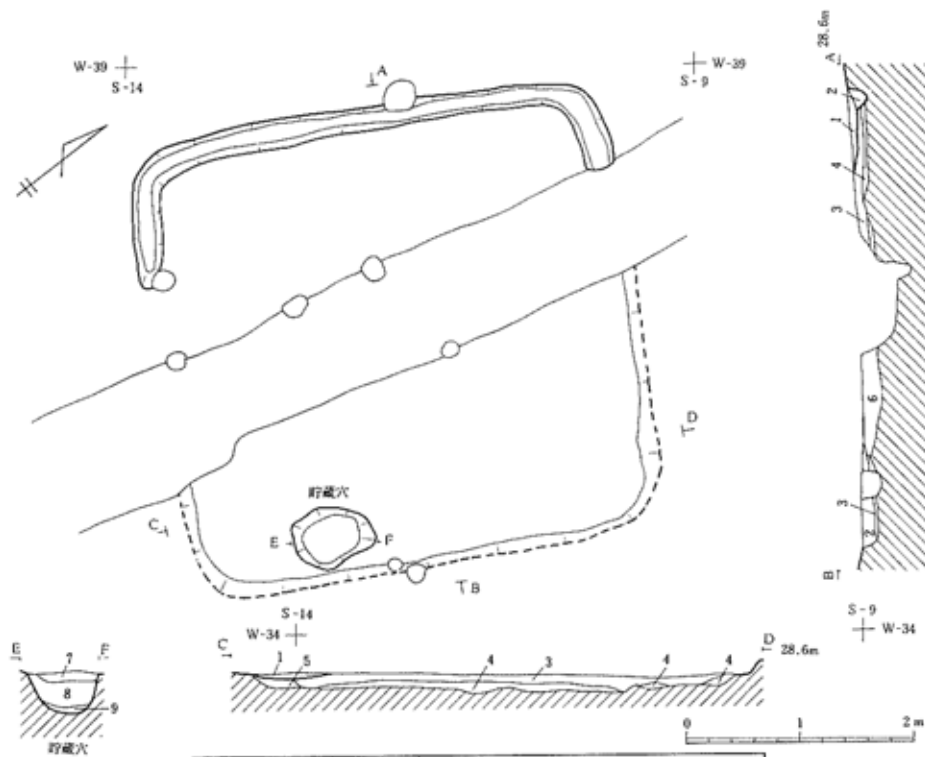
[柱穴] 検出されなかった。

[周溝]住居跡の北西壁と北東壁、南西壁の一部で確認された。幅約25cm、深さ約10cmである。

[貯蔵穴]住居跡東南辺やや南寄りで検出された。70cm×55cmの不整な円形を呈し、深さは約45cmである。堆積土は3枚認められ、すべて自然流入土である。

[遺物]床面から土師器高坏・器台・甕などが出土している（第8図1・3～5）。これらの土器は住居跡南東隅付近から集中して出土しており、一括して廃棄されたものと考えられる。また、確認面出土とした器台（第8図2）もこの一括遺物に含まれる可能性がある。

その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。



No	土色	土性	備考
1	1092/2 黒褐色	シルト	自然流入土
2	1094/3 灰白・黄褐色	シルト	掘埋土
3	1092/3 黒褐色	シルト	住居廻り方埋土 地山ブロックを多く含む
4	1094/4 褐色	シルト	住居廻り方埋土 地山ブロックを多く含む
5	1093/3 暗褐色	シルト	住居廻り方埋土 炭化物・地山小ブロックを含む
6	1093/2 黒褐色	シルト	住居廻り方埋土 炭化物・地山粒を多く含む
7	1092/3 黒褐色	シルト	貯蔵穴埋積土
8	1094/4 褐色	シルト	貯蔵穴埋積土
9	1093/3 暗褐色	シルト	貯蔵穴埋積土

第7図 3号住居跡

【4号住居跡】(第9・10図)

[位置・確認面] S16~23・W23~30付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 溝によって壊されているため全体の規模は不明だが、6.0m×5.6m以上の方形を基調とするものと思われる。

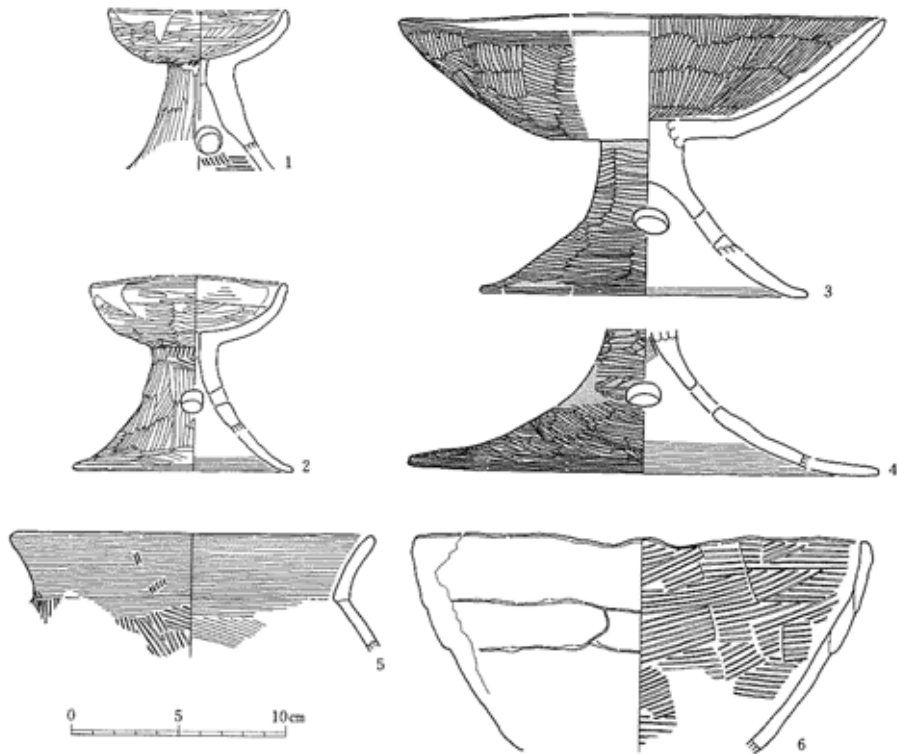
[堆積土] 5枚認められ、いずれも自然流入土である。

[壁] 地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から10cmである。

[床] 住居跡の縁辺は掘り方埋土を、中央付近は地山を床としており、ほぼ平坦である。局部的に地山土で貼床されて硬化している部分がある。

[柱穴] 住居跡の東壁際、貯蔵穴の北側の床面でピットが検出された(P1)。平面形は50

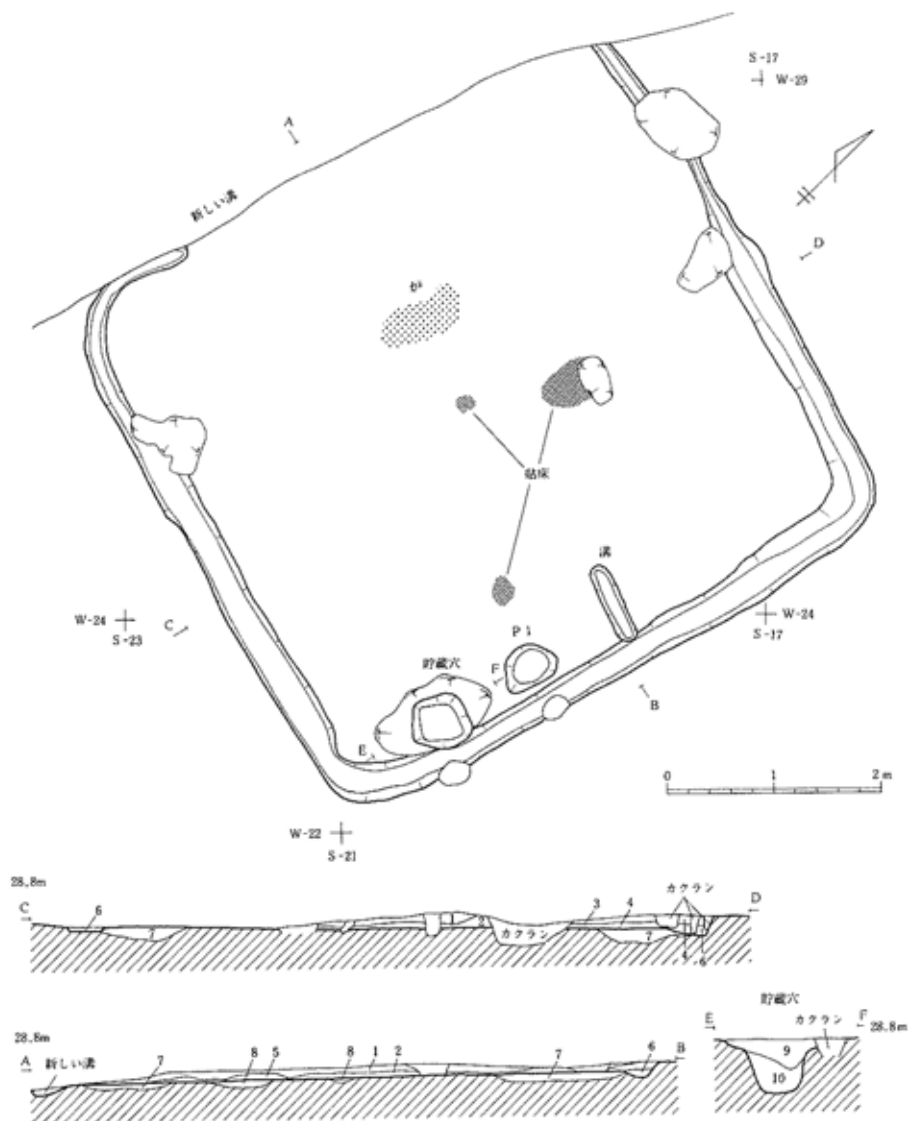




No.	器種別	分類	部位	内面	外面	内面	口径	底径	高さ	残存率	図例
1	土師器高杯	A	胴	(ハケメ) →ヘラシガキ全面	(刷毛内塗)類	受部ヘラシガキ、胴部ナデ、ハケメ	8.3	∕	11.51	5/3	21-5
2	土師器高杯	A	縁部底	受部ヨコナデ→ヘラシガキ、胴部ハケメ→ヘラシガキ	(刷毛内塗)類	受部ヘラシガキ、胴部ナデ	8.3	10.3	9.2	3/4	21-4
3	土師器高杯	A	胴	縁部ヨコナデ→ヘラシガキ、胴部ヘラシガキ、赤彩	(刷毛内塗)類	縁部ヘラシガキ、赤彩、胴部ナデ→ヨコナデ	22.7	15.3	13.1	3/3	21-2
4	土師器高杯	A	底	ヘラシガキ、赤彩	(刷毛内塗)類	ヘラシガキ、ヨコナデ	∕	20.1	16.75	胴部のみ	21-3
5	土師器甕	深	口縁	(ハケメ)→ヨコナデ、胴部ハケメ	∕	口縁(ハケメ)→ヨコナデ、体部ヘラシガキ→ナデ	15.6	∕	15.80	口縁部の1/3	
6	土師器不明	縁部底	ナデ	縁部底の段が残る	∕	ハケメ	26.2	∕	112.13	1/5	21-6

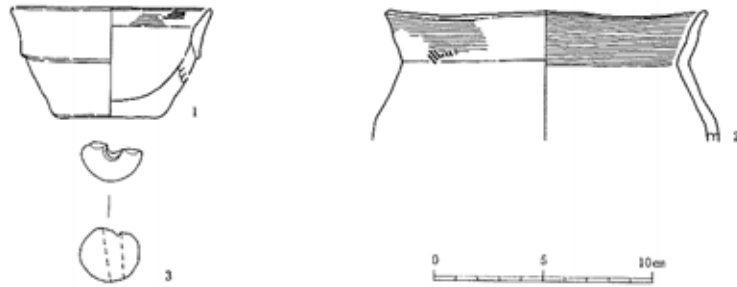
第8図 3号住居跡出土遺物

cm × 30cm の不整形を呈し、深さは 20cm で、堆積土はしまりのない暗褐色土である。このピットは、その位置・形状からみて野田山遺跡(須田・吾妻他:1992)で報告されている「壁際ピット」(以下、壁際ピットと称する)の抜き取り痕と考えられる。[周溝] 残存する壁の直下で確認された。幅 12~40cm、深さ約 10cm である。[炉] 住居跡中央やや西寄り、床面が焼けて赤変した部分が検出された。90cm × 40cm の不整形を呈する。



No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黄褐色	シルト	自然成入土
2	10YR6/3 灰褐色	シルト	自然成入土 地山ブロックを含む
3	10YR4/4 緑色	シルト	自然成入土
4	10YR4/4 緑褐色	シルト	自然成入土 地山ブロックを多く含む
5	10YR4/2 灰褐色	シルト	自然成入土 礫土を多く含む
6	10YR1/0 棕色	シルト	築造土 地山ブロックを多く含む
7	10YR3/1 暗褐色	シルト	住居層下方埋土
8	10YR5/1 灰褐色	シルト	焼け面下の礫の混入が顕著
9	10YR2/2 黄褐色	シルト	カタランホ
10	10YR3/3 暗褐色	シルト	貯蔵穴埋積土

第9図 4号住居跡



No.	器種別	分類	部位	外 面	底 面	内 面	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径	口径
1	土師器	杯	口縁	縞合紙、ユビナデ	ナデ	口縁ヨコナデ、縁部内ナデ	9.2	5.1	4.9	2.7								22-1
2	土師器	鉢	口縁	口縁ヨコナデ、縁部（ハケメ）ナデ	ナデ	口縁ヨコナデ、縁部ヘラケズリナデ	14.8	7	16.0	口縁部ヨコナデ								2
3	土玉		貯蔵穴	ナデ														

第10図 4号住居跡出土遺物

[貯蔵穴]住居跡東辺南隅で検出された。攪乱により上部は壊されているが、一辺約55cmの隅丸方形を呈するものと考えられる。深さは50cmで堆積土は自然流入土である。

[その他の施設]住居跡の東辺中央で壁と直交する方向の溝が検出された。周溝と重複しているが、その前後関係は不明である。長さ80cm、幅20cm、深さ5cmである。

[遺物]床面から土師器杯(第10図1)、貯蔵穴堆積土から土玉(同3)が出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

### 【5号住居跡】(第11図)

[位置・確認面] S18~21・W11~14付近で検出した。確認面は 層上面である。

[重複] 6号住居跡と重複し、これより古い。

[平面形・規模] 3.4m×3.4mの隅丸正方形を呈する。

[堆積土] 1枚のみで、自然流入土である。

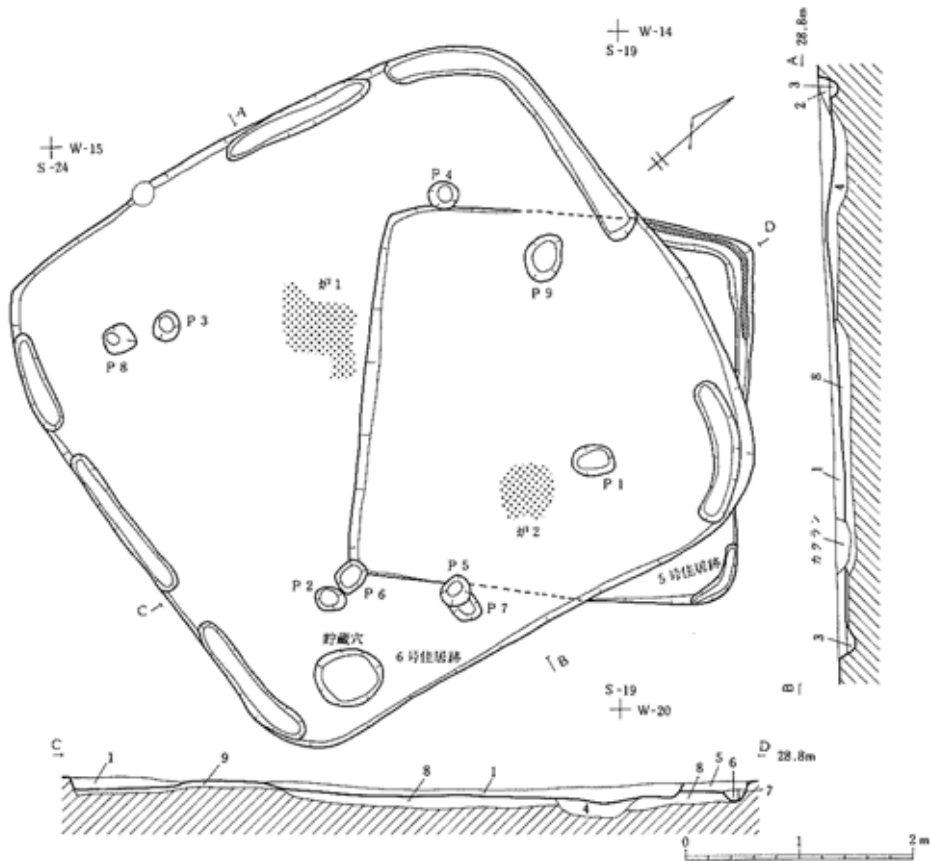
[壁]地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から10cmである。

[床] 掘り方埋土を床としている。

[柱穴] 検出されなかった。

[周溝] 残存する西壁および北壁の一部で検出された。幅10~20cm、深さ約10cmである。また、北西コーナーで周溝内の壁側に沿って幅5~10cmの黒褐色土帯が検出されている。

[遺物] 出土していない。



No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	6号住居層土 自然流入土 炭化物を少量含む
2	10YR4/3 紅褐色	シルト	6号住居層土 自然流入土 地山ブロックを多く含む
3	10YR4/4 褐色	シルト	6号住居層土 地山ブロック・地山粒を含む
4	10YR3/4 暗褐色	シルト	6号住居層土 地山ブロック・地山粒を含む 炭化物を若干含む
5	10YR4/3 紅褐色	シルト	5号住居層土 自然流入土 炭化物を少量含む
6	10YR4/6 褐色	シルト	5号住居層土 地山ブロックを含む
7	10YR3/2 暗褐色	シルト	5号住居層土 炭化物を少量含む
8	10YR5/4 紅褐色	シルト	5号住居層土 地山粒を含む

第11図 5・6号住居跡

【6号住居跡】(第11・12図)

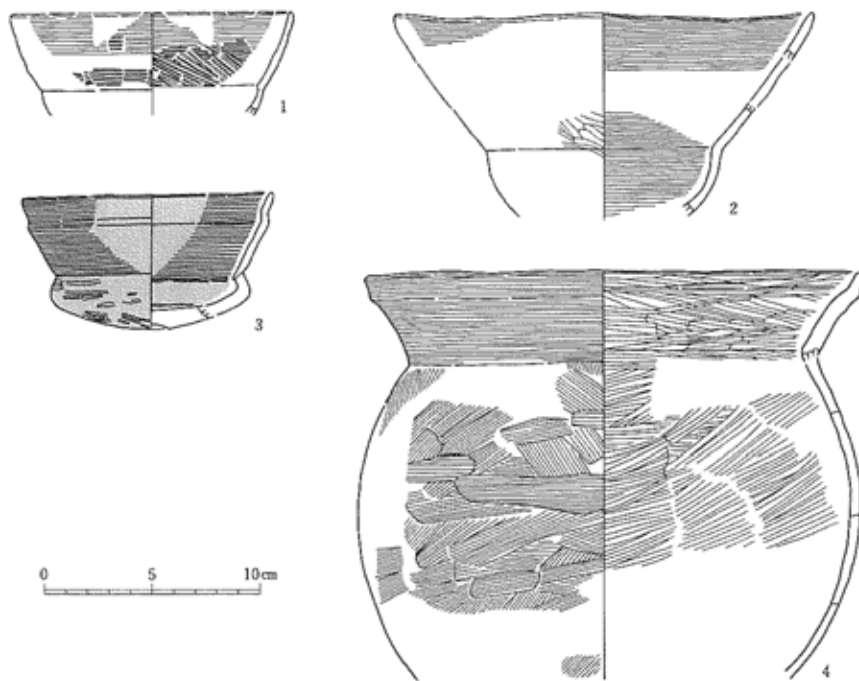
[位置・確認面] S18~24・W10~16区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[重複] 5号住居跡と重複し、これより新しい。

[平面形・規模] 5.4m×5.2mの隅丸正方形を呈する。

[堆積土] 1枚のみで、自然流入土である。

[壁]地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよ



No.	遺物名	形状	部位	内面	外面	内面	口径	底径	高さ	残存率	図例
1	土師器鉢	CⅠ	床	口縁(ハタメ)ヘラコナデ、條節ナデ	✓	口縁(ハタメ)ヘラコナデ、條節ナデ	13.2	✓	13.8	1/8	
2	土師器鉢	A	床	口縁コナデ、ヘラコナデ、條節加飾	✓	コナデ、ナデ	21.6	✓	13.4	1/6	
3	土師器鉢	CⅡ	溝切面	口縁コナデ、條節ヘラコナデ、全面赤彩	不明	ヘラコナデ口縁コナデ、條節ナデ、全面赤彩	11.5	1.9	6.2	2/3	22-2
4	土師器壺	BⅠⅠ	床	口縁コナデ、條節ヘラコナデ、下半部加飾	✓	ヘラコナデ	23.2	✓	33.0	1/3	22-3

第12図 6号住居跡出土遺物

い部分で床面から12cmである。

[床] 5号住居跡及び本住居跡の掘り方埋土を床としている。

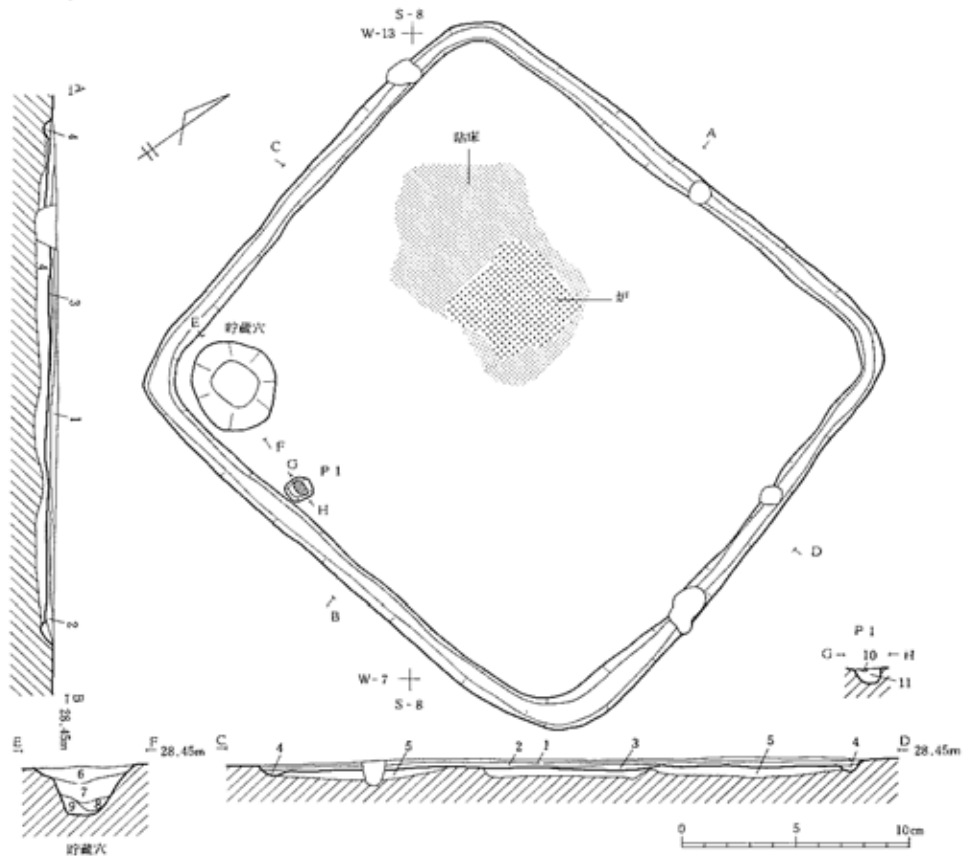
[柱穴] 合計9個のピットが検出された。P1～P4は、その位置・形状・規模から支柱穴であると考えられる。しかし、柱痕跡は確認されなかった。また、P5はその位置から壁際ピットの抜き取り痕と考えられる。平面形は20cm×25cmの不整形を呈し、深さは25cmである。

[周溝] 住居跡の縁辺で断続的に確認された。幅は約20cm、深さ約10cmである。

[炉] 住居跡中央やや西寄りと東寄りの2カ所で、床面が焼けて赤変した部分が検出された。西寄りの炉1は1.0m×0.8mの不整形、東寄りの炉2は直径0.5mの円形を呈する。東寄りの炉2は5号住居跡に伴うものである可能性もある。

[貯蔵穴] 住居跡南東隅で検出された。60cm×50cm の隅丸長方形を呈し、深さは不明である。堆積土は1枚のみで、黒褐色の自然流入土である。

[遺物] 床面から土師器杯(第12図1・2)・甕(同4)が出土している。また、確認面から土師器杯が出土している(同3)。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。



No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	自然流入土 炭化物を含む
2	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	自然流入土 地山ブロックを含む 炭化物を含む
3	10YR3/4 暗褐色	シルト	4号内埋積土 炭化物・機土を含む
4	10Y4/2 暗褐色	シルト	埋積土 地山ブロックを含む
5	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	住居掘り方埋土 地山ブロック・黒褐色土ブロックを多く含む
6	10YR2/3 黒褐色	シルト	貯蔵穴埋積土 住居埋積土1層と同一
7	10YR2/3 暗褐色	シルト	貯蔵穴埋積土 自然流入土 炭化物・機土を含む
8	2.5Y4/2 暗灰青色	シルト	貯蔵穴埋積土 住居掘削時の埋積
9	2.5Y4/4 オリーブ褐色	シルト	貯蔵穴埋積土 住居掘削時の埋積 地山ブロックを含む
10	10YR2/3 暗褐色	シルト	P1住居跡?
11	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	P1掘り方埋土 地山ブロックを含む

第13図 7号住居跡



No.	器種別	分類	部位	内面	外面	底面	内面	口径	口径	高さ	残存率	図版
1	土師器杯	CⅡ	貯蔵穴器	ヘラミダキ全面、加飾線全面		加飾線	加飾線	12.4	3.8	4.3	3/4	図2-4
2	土師器杯	CⅡ	2層	口縁ヘラミダキコナダ、縁部ヘラミダキリレー横ミダキ			口縁コナダ、縁部コナダ	11.6		18.0	1/4	

第14図 7号住居跡出土遺物

### 【7号住居跡】（第13・14図）

[位置・確認面] S4～10・W7～13区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 5.3m×5.0mの隅丸正方形を呈する。

[堆積土] 2枚認められ、いずれも自然流入土である。

[壁] 地山を壁としており、周溝底面からやや緩やかに立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から5cmである。

[床] 掘り方埋土を床としている。住居跡中央やや北西寄りに、床面が周辺よりもやや硬化した部分が確認された。

[柱穴] P1は貯蔵穴の東側で検出されており、壁際ピットと考えられる。掘り方は一辺25cmの隅丸方形を呈し、深さは約20cmである。中から16cm×8cmの隅丸長方形の材の痕跡が確認されている。なお、支柱穴と思われるピットは検出されなかった。

[周溝] 壁の直下で検出され、全周する。幅は最大35cm、深さ約5cmである。

[炉] 住居跡中央やや北西寄りで、床面が焼けて弱く赤変している浅い皿状の窪みが検出された。1.2m×1.2mの不整形を呈し深さは5cm、焼土が多く含まれる土が堆積している。

[貯蔵穴] 住居跡南西隅で検出された。平面形は上面では90cm×70cmの楕円形を呈するが、底面では45cm×35cmの長方形を呈する。深さは45cmで堆積土は4枚認められた。6・7層が住居跡の自然流入土、8・9層が住居機能時に埋め戻された層であると考えられる。

[遺物] 貯蔵穴から土師器杯（第14図1）が出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

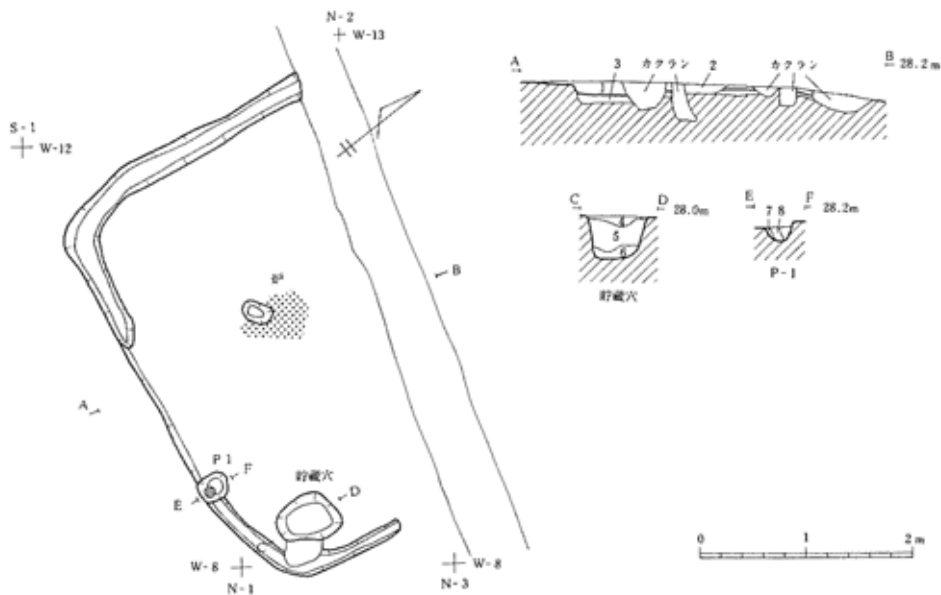
### 【8号住居跡】（第15・16図）

[位置・確認面] S1～N3・W8～12区付近で検出された。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 削平および攪乱を受けているため全体の規模は不明であるが、現状から4.3m×2.7m以上の方形を基調とするものと思われる。

[堆積土] 1枚のみで、自然流入土である。

[壁] 地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から10cmである。



No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 暗褐色	シルト	自然流入土 地山砂を含む 炭化物を含む
2	10YR2/3 に近い黄褐色	シルト	焼土を含む カタラン
3	10YR2/4 暗褐色	シルト	掘り廻り方埋土 地山ブロックを多く含む
4	10YR2/3 暗褐色	シルト	貯蔵穴埋積土 炭化物を多く含む
5	10YR2/4 暗褐色	シルト	貯蔵穴埋積土 地山小ブロックを多く含む
6	10YR2/3 に近い黄褐色	シルト	貯蔵穴埋積土 地山砂を多く含む
7	10YR2/3 暗褐色	シルト	P1住居跡
8	10YR2/4 暗褐色	シルト	P1掘り方埋土 地山小ブロックを含む

第15図 8号住居跡

[床] 掘り方埋土を床としている。

[柱穴] P1 は住居跡両壁際東寄りの床面で検出されており、壁際ピットと考えられる。掘り方は 32cm×25cm の楕円形を呈する。材の痕跡は直径 10cm、円形で壁の方向に向かって傾斜している。なお、支柱穴と思われるピットは検出されなかった。

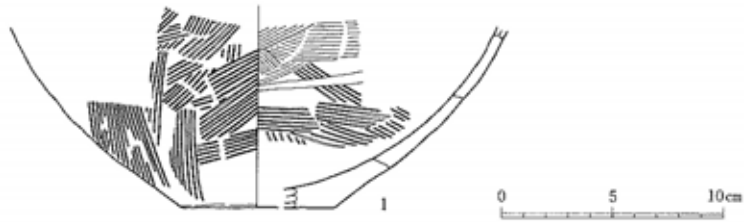
[周溝] 残存する壁の直下で検出された。幅は最大 30cm、深さ 4cm である。

[炉] 床面中央部やや南寄り、床面が焼けて弱く赤変している部分が検出された。範囲は 65cm×45cm の不整形である。隣接して深さ 18cm のピットがあり、これにも炭化物や焼土が混じる土が堆積している。

[貯蔵穴] 住居跡南東隅で検出された。平面形は 60cm×45cm の不整形を呈し、深さは 40cm である。堆積土は 3 枚認められ、いずれも自然流入土である。

[遺物] 床面から土師器甕が出土している（第 16 図 1）。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。





No	部類別	分類	層位	名	位置	内	部	口徑	底径	器高	残存率	図説
1	土器器壁	漆	ハケメ、灰層	ヘラケズリ	ハケメーヘラケズリ、灰層			6.8	(5.1)		縁部～底層のみ	

第16図 8号住居跡出土遺物

【9号住居跡】（第17図）

[位置・確認面] S8～13・W2～7区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[重複] 10号住居跡と重複し、これより古い。

[平面形・規模] 10号住居跡と重複し、さらに削平を受けているため全体の規模は不明であるが、現状から2.0m以上×1.5m以上の方形を基調とするものと思われる。

[堆積土] 掘り方埋土と周溝堆積土のみ残存している。

[壁] 残存していない。

[床] 残存していない。

[柱穴] 検出されなかった。

[周溝] 幅は最大25cm、深さ約8cmである。

[遺物] 出土していない。

【10号住居跡】（第17・18図）

[位置・確認面] S8～13・W2～7区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[重複] 9号住居跡と重複し、これより新しい。

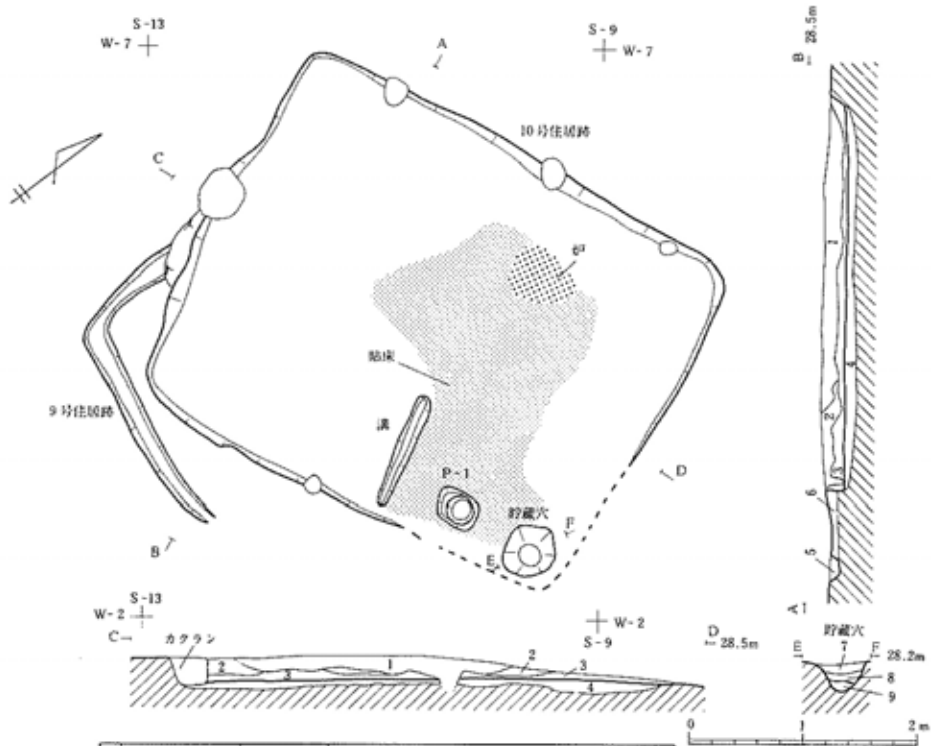
[平面形・規模] 4.3m×3.5mの隅丸長方形を呈する。

[堆積土] 3枚認められ、いずれも自然流入土である。

[壁] 地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁面はもっとも残りのよい部分で床面から20cmである。

[床] 掘り方埋土を床としているが、住居跡の縁辺には帯状に地山を床としている部分がある。住居跡中央から貯蔵穴、P1、溝跡周辺にかけて貼床されて硬化した部分がある。

[柱穴] P1 は住居跡南辺東寄りで検出されており、壁際ピットと考えられる。平面形は



No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 暗褐色	シルト	10号住居層土 自然流入土
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	10号住居層土 自然流入土 地山砂を含む
3	10YR3/3 暗褐色	シルト	10号住居層土 自然流入土 地山砂・ブロックを多く含む
4	10YR4/3 灰色・黄褐色	シルト	10号住居層方埋土 地山ブロック・黒褐色土ブロックを多く含む
5	10YR4/4 灰色・黄褐色	シルト	9号住居層埋土
6	10YR5/3 灰色・黄褐色	シルト	9号住居層方埋土 地山ブロックを多く含む
7	10YR2/2 黒褐色	シルト	10号住居貯蔵穴埋土 自然流入土
8	10YR2/3 黒褐色	シルト	10号住居貯蔵穴埋土 自然流入土
9	10YR3/3 暗褐色	シルト	10号住居貯蔵穴埋土 住居機能時の堆積

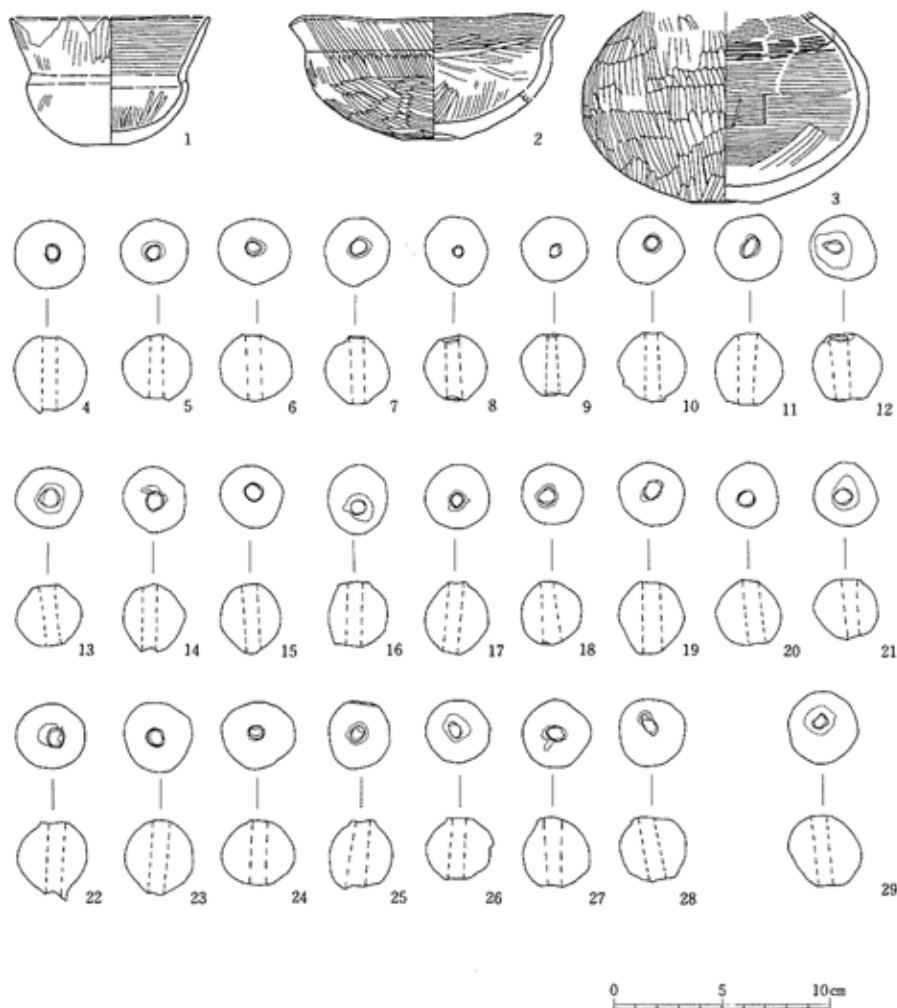
第17図 9・10号住居跡

cm × 30cm の長方形を呈し、深さは 35cm である。なお、主柱穴と思われるピットは検出されなかった。

[炉]床面中央やや北東寄りで、床面が強く焼けて赤変している部分が検出された。範囲は 60cm × 50cm で、不整形である。

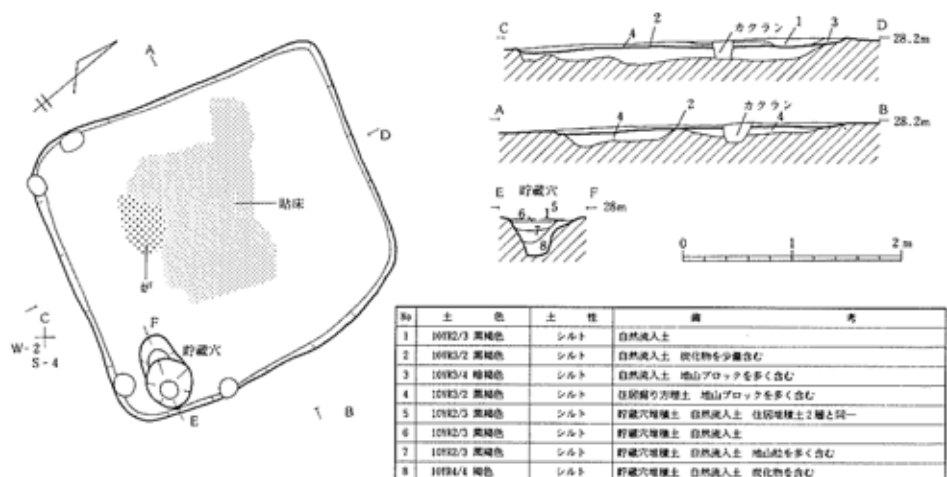
[貯蔵穴]住居跡南東隅で検出された。平面形は直径 50cm の不整な円形を呈し、深さは 30cm である。堆積土は 3 枚認められ、7・8 層は自然流入土、9 層は住居機能時に埋め戻されたものであると考えられる。

[その他の施設]住居跡南辺中央付近で壁と直交する方向の溝が検出された。長さ 1.1m、幅 15cm、深さ 6cm である。

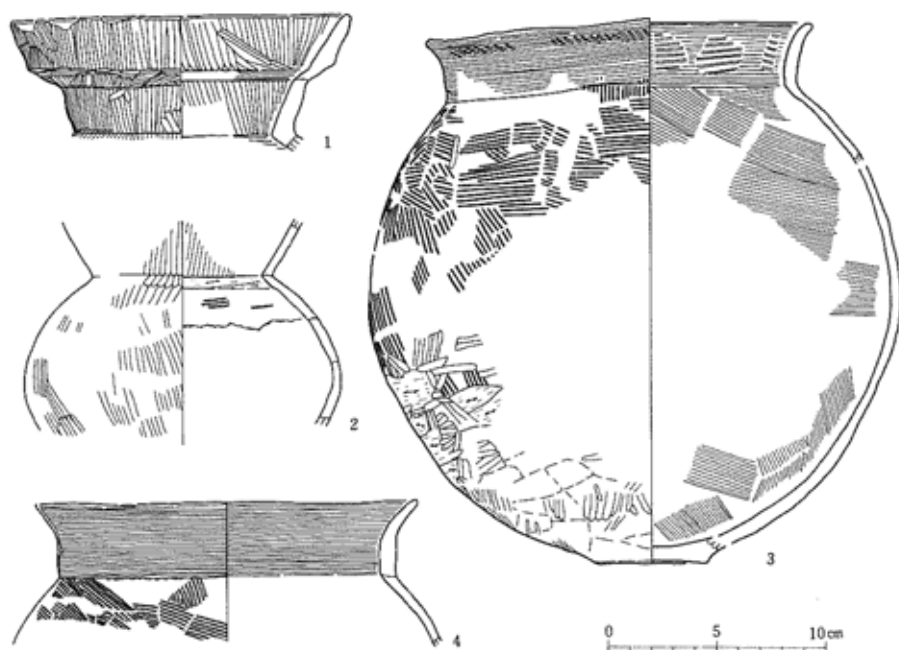


No.	器種別	寸数	備註	内	底	外	口径	底径	器高	残存率	図例
1	土師器	C型	底	口縁ヘラミダキ、体部ヘラミダキ、全面厚紙	ナシ	口縁ヨコナデ、体部ヘラミダキ	8.3	2.5	6.0	45%以上	22-5
2	土師器	F	2層	ヘラミダキ	ヘラミダキ	口縁ヨコナデ、体部ヘラミダキ	13.7	2.9	5.8	2/3	22-6
3	土師器		打割穴5個	ヘラミダキ	ヘラミダキ	体部上ホコナデ、以下ハケメヘラミダキ	1	2.4	15.0	体部の1/4	
No.	種別	寸数	備註	No.	種別	寸数	備註	No.	種別	寸数	備註
4	土瓦	最大径3.2cm 厚さ22g	5	土瓦	最大径3.2cm 厚さ22g	6	土瓦	最大径3.3cm 厚さ22g	7	土瓦	最大径3.6cm 厚さ22g
9	土瓦	最大径3.0cm 厚さ22g	10	土瓦	最大径3.1cm 厚さ22g	11	土瓦	最大径3.1cm 厚さ22g	12	土瓦	最大径3.5cm 厚さ22g
14	土瓦	最大径2.9cm 厚さ22g	15	土瓦	最大径2.9cm 厚さ21g	16	土瓦	最大径2.8cm 厚さ24g	17	土瓦	最大径3.6cm 厚さ22g
18	土瓦	最大径2.1cm 厚さ22g	20	土瓦	最大径3.0cm 厚さ22g	21	土瓦	最大径3.0cm 厚さ21g	22	土瓦	最大径3.5cm 厚さ22g
24	土瓦	最大径3.4cm 厚さ22g	25	土瓦	最大径3.5cm 厚さ22g	26	土瓦	最大径3.0cm 厚さ22g	27	土瓦	最大径3.5cm 厚さ22g
29	土瓦	最大径3.4cm 厚さ21g									

第18図 10号住居跡出土遺物



第19図 11号住居跡



No	器種別	形状	部位	内面	外面	口径	底径	器高	残存率	図例
1	土師器	C	床	ヘラシガキ	ヘラシガキ	15.6	—	5.7	—	図例1/1
2	土師器	G	床	ヘラシガキ	口縁ヘラシガキ、腹部ハマヘラシガキ、ナデ	—	—	116.30	1/5	—
3	土師器	非口	床	口縁ハマヘラシガキ、腹部ハマヘラシガキ	ヘラシガキ	17.7	5.1	25.1	1/3	図例1/1
4	土師器	—	床	口縁コナデ、腹部ハマ	口縁コナデ、腹部ヘラシガキ	17.5	—	16.50	—	図例1/1

第20図 11号住居跡出土遺物

[遺物] 床面から土師器壺(第18図1)、貯蔵穴から壺(同3)が出土している。また、住居跡の北西辺付近の床面から、土玉が39個まとまって出土した。これらはすべてほぼ同じ大きさで、いずれも貫通孔がある。また、住居跡堆積土中からも数個の同様な土玉が出土した。しかし、これらの土玉は非常に脆く、残存状況のよいもののみを図示した(同4~29)。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

【11号住居跡】(第19・20図)

[位置・確認面] N-0-S~S5・W1~4区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 2.9m×2.9mの隅丸正方形を呈する。

[堆積土] 2枚認められ、いずれも自然流入土である。

[壁] 地山を壁としている。削平を受けており、壁高はもっとも残りのよい部分でも床面から5cm、北東隅付近では失われている。

[床] 掘り方埋土を床としているが、住居跡の縁辺には帯状に地山を床としている部分がある。住居跡中央付近に貼床されて硬化した部分がある。

[柱穴] 検出されなかった。

[炉] 床面中央やや西寄りで、床面が弱く焼けて赤変している部分が検出された。範囲は60cm×40cmで、不整形である。

[貯蔵穴] 住居跡南隅で検出された。平面形は直径50cmの円形を呈し、北西側に緩やかで浅い部分がある。底面までの深さは35cmである。堆積土は4枚認められ、いずれも自然流入土である。

[遺物] 床面から土師器壺(第20図1・2)・甕(同3・4)が出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

【12号住居跡】(第21~23図)

[位置・確認面] S2~8・E2~8区付近で検出した。確認面は 層上面である。

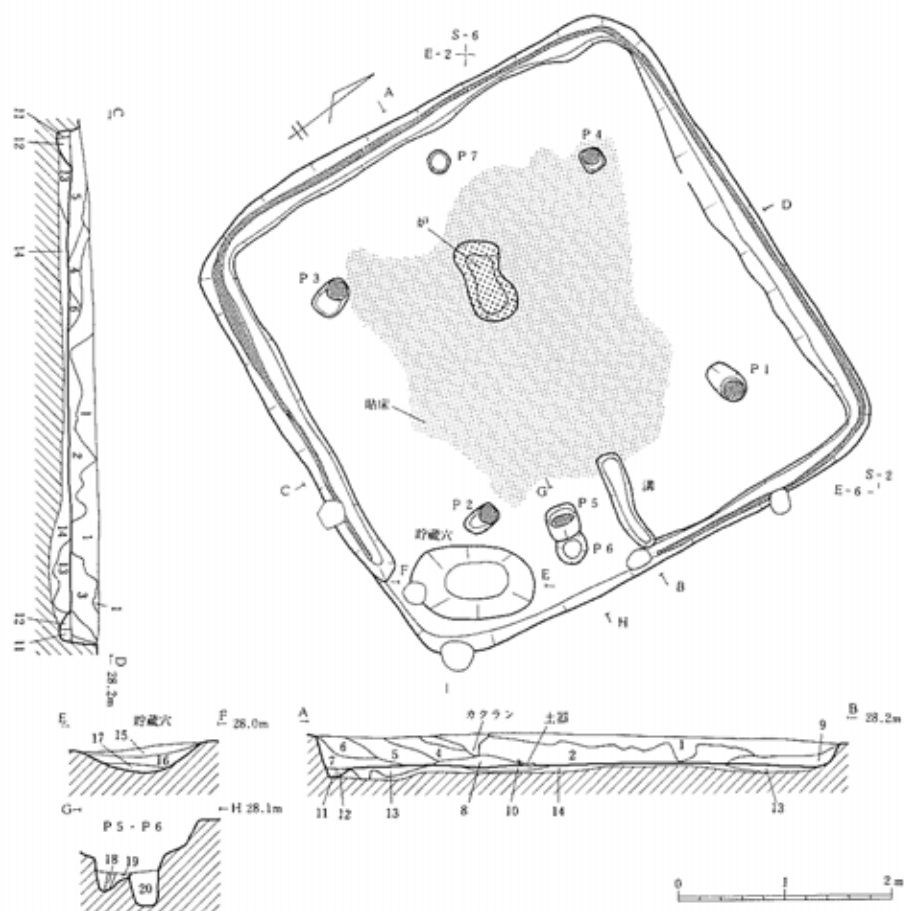
[平面形・規模] 4.9m×4.8mの隅丸正方形を呈する。

[堆積土] 9枚認められ、いずれも自然流入土である。

[壁] 地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から40cmである。

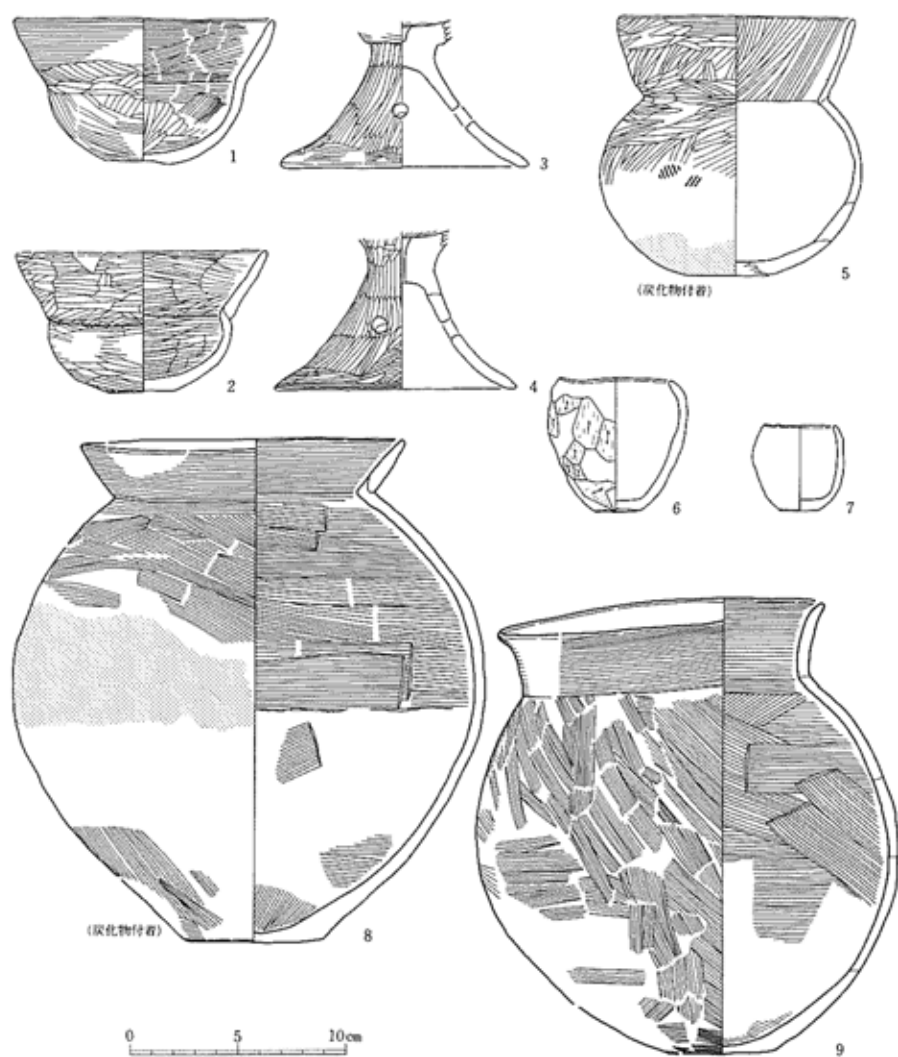
[床] 掘り方埋土を床としている。住居跡中央付近に貼床されて硬化した部分がある。

[柱穴] 合計7個のピットが検出された。P1~P4は、その位置・形状・規模から支柱穴であると考えられる。床面からの深さはP1が28cm、P2が32cm、P3が39cm、P4が38cmである。いずれからも直径約15cm、円形の柱痕跡が検出されている。P5の掘り方の平面形は一辺30cmの隅丸方形で、断面形は住居跡の壁側が緩やかで住居跡の中央側が



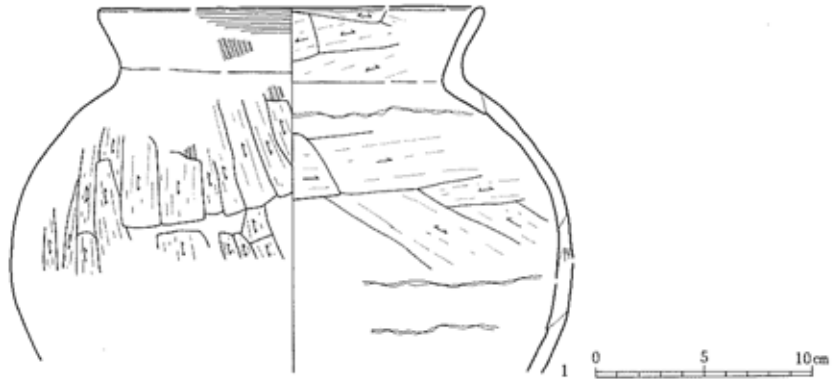
No	土色	土性	備考
1	109K2/3 黒褐色	シルト	自然成土 地山殻・灰化物を含む
2	109K3/4 暗褐色	シルト	自然成土 地山殻を含む
3	109K4/5 灰白-黄褐色	シルト	自然成土 地山殻を含む
4	109K4/4 褐色	シルト	自然成土 地山殻を含む
5	109K3/2 暗褐色	シルト	自然成土 地山殻を多く含む
6	109K2/2 黒褐色	シルト	自然成土 地山ブロックを多く含む
7	109K4/4 褐色	シルト	自然成土 地山殻・ブロックを多く含む
8	109K2/3 黒褐色	シルト	自然成土 焼土・灰化物・地山殻を含む
9	109K5/4 灰白-黄褐色	シルト	自然成土 地山殻・小ブロックを多く含む
10	109K3/2 暗褐色	シルト	砂礫層土 焼土を多く含む
11	109K5/3 灰白-黄褐色	シルト	黒褐色土層
12	109K5/3 灰白-黄褐色	シルト	暗褐色土
13	109K3/2 暗褐色	シルト	住居掘り方埋土
14	109K5/3 灰白-黄褐色	シルト	住居掘り方埋土
15	109K2/2 黒褐色	シルト	貯蔵穴埋土
16	109K3/2 暗褐色	シルト	貯蔵穴埋土
17	2.5K3/2 黒褐色	シルト	貯蔵穴埋土
18	109K4/3 灰白-黄褐色	シルト	P5柱礎跡
19	109K5/3 灰白-黄褐色	シルト	P5掘り方埋土
20	109K4/3 灰白-黄褐色	シルト	P6掘り方埋土

第21図 12号住居跡



No.	器種別	分類	部位	外 面	底 面	内 面	口径	底径	容 量	検 査 年	図例
1	土師器鉢	C Ⅱ	底	白緑ヨコナダ・ヘラナダ、條部(ヘラナダ側)ニダケ	ヘラナダ	白緑ヨコナダ・ヘラナダ、條部ヘラナダ側ニダケ	12.1	3.0	6.9	1/1	23-5
2	土師器鉢	C Ⅱ	狩籠穴付縁	ヘラナダ、加納焼	ヘラナダ	ヨコナダ・ヘラナダ	11.5	2.9	6.6	3/4	23-4
3	土師器器台	Ⅱ	底	ヘラナダ	條部(内面)ニダケ	ナダ	/	11.5	16.8	調査1/1	23-8
4	土師器器台	Ⅱ	底	ヘラナダ	條部(内面)ニダケ	ナダ	/	11.3	17.4	調査1/1	23-7
5	土師器壺	F	狩籠穴付縁	白緑ヨコナダ・ヘラナダ、條部(ヘラナダ側)ニダケ、加納焼	加納焼	白緑ヘラナダ、條部加納焼	11.0	4.0	12.2	1/1	23-10
6	土師器小形	Ⅱ	底	ユビナダ・ヘラナダ	ヘラナダ	ナダ	5.2	3.0	6.3	1/1	23-6
7	土師器小形	Ⅱ	狩籠穴付縁	ナダ	ヘラナダ	ユビナダ	3.4	1.7	4.1	1/1	23-3
8	土師器壺	C Ⅰ	狩籠穴付縁	白緑ヨコナダ、條部ヘラナダ、加納焼、炭化物付着	ナダ	白緑ヨコナダ、條部ヘラナダ、加納焼	14.9	7.5	23.6	3/4	24-1
9	土師器壺	D Ⅱ	F 7	白緑ヨコナダ、條部ヘラナダ、下部ヘラナダ	木炭焼	白緑ヨコナダ、條部ヘラナダ	25.2	5.0	25.3	1/1	24-2

第22図 12号住居跡出土遺物(1)



No.	器種別	分類	層位	外 形	産 地	内 容	口径	口径	器 高	底 径	容 積
1	土師器	甕	Ⅱ-1	口縁ハケメニコナダ、縁ハケメヘラサズリ	ヘラサズリ	ヘラサズリ	17.8	17.1	17.5	22-9	

第23図 12号住居跡出土遺物（2）

急な変形V字形である。深さは約40cm、材の痕跡は20cm×8cmの長円形で住居跡の壁側に向かって傾斜している。P5はその位置・形状からみて、壁際ピットと考えられる。P6はP5と重複し、これより古い。平面形は直径30cmの円形で、床面からの深さは60cmである。P7は床面で検出されたピットである。平面形は直径20cmの円形、深さは3cmである。

[周溝]南東隅を除く壁の直下から検出された。幅は20～40cm、深さ約8cmである。また周溝内の壁側に沿って幅5～15cmの黒褐色土帯が検出されている（図版8）。

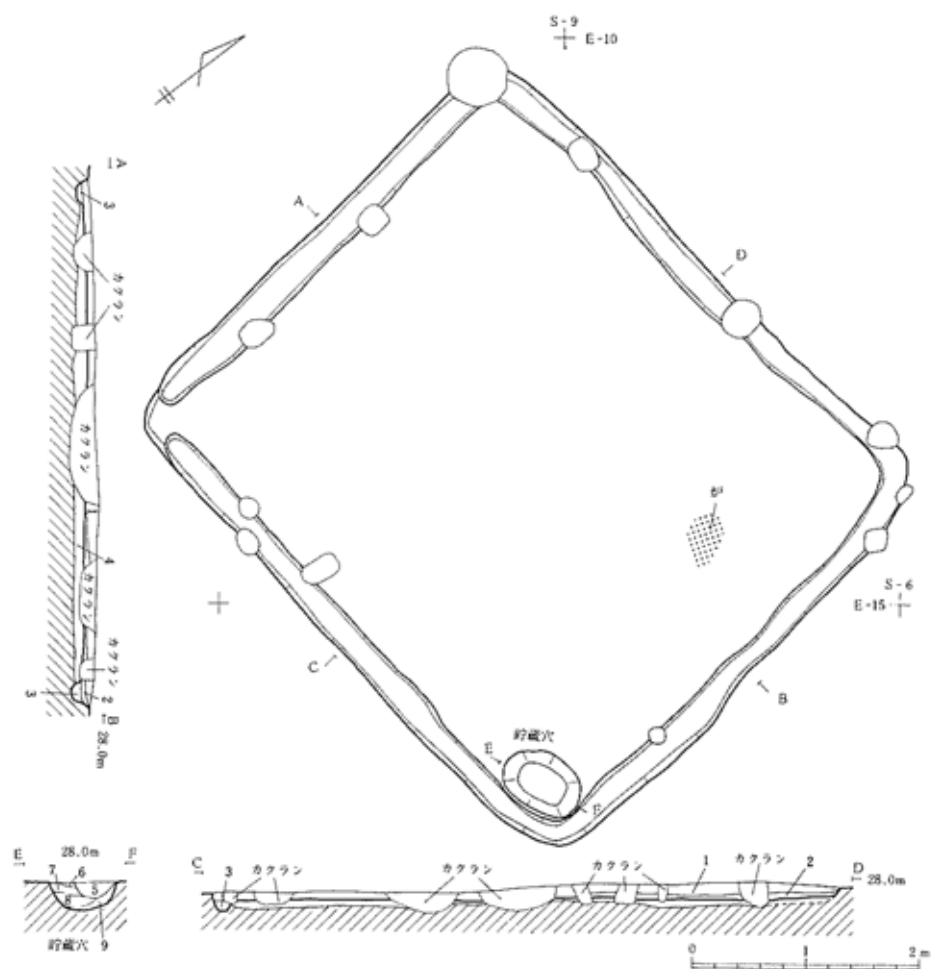
[炉]住居跡中央やや西寄り、床面が弱く焼けて赤変している浅い窪みが検出された。60cm×45cmの瓢形で、深さは5cmである。焼土を含む土が堆積している。

[貯蔵穴]住居跡南東隅で検出された。平面形は1.2m×0.7mの長円形で、深さ30cmである。堆積土は3枚認められ、15層は自然流入土、16・17層は住居機能時に堆積した土であると考えられる。

[その他の施設]住居跡東辺中央付近で壁と直角する方向の溝が検出された。この溝は周溝と重複し、これよりも新しい。長さ90cm、幅は最大で20cm、深さ7cmである。

[遺物]床面から土師器坏（第22図1）・器台（同3・4）・小形土器（同6）・甕（第23図1）、P7から甕（第22図9）、貯蔵穴から坏（第22図2）・壺（同5）・小型土器（同7）・甕（同8）が出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。





No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黄褐色	シルト	自然流入土
2	10YR4/4 褐色	シルト	自然流入土 地山ブロックを少量含む
3	10YR5/4 灰褐色	シルト	高濃自然流入土 地山小ブロックを多く含む
4	10YR5/3 灰褐色	粘土質シルト	自然降り方堆土 地山粒を含む
5	10YR3/7 暗褐色	シルト	自然流入土 新しいゼット
6	10YR3/4 暗褐色	シルト	貯蔵穴堆積土 自然流入土
7	10YR3/4 暗褐色	シルト	貯蔵穴堆積土 自然流入土 地山ブロックを多く含む
8	10YR3/3 灰褐色	シルト	貯蔵穴堆積土 自然流入土 地山ブロックを少量含む
9	10YR3/3 灰褐色	シルト	貯蔵穴堆積土 自然降り時の堆積土? 地山ブロックを多く含む

第24図 13号住居跡

【13号住居跡】（第24図）

[位置・確認面] S6~12・E1~7区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 5.6m×4.6mの長方形を呈する。

[堆積土] 2枚認められ、いずれも自然流入土である。

[壁]地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から20cmである。

[床]掘り方埋土を床としている。

[柱穴] 検出されなかった。

[周溝]住居跡南西隅を除いてほぼ全周する周溝が検出された。幅は最大30cm、深さ約10cmである。

[炉]住居跡東寄り、床面が焼けて赤変している部分が検出された。50cm×30cmの楕円形である。

[貯蔵穴]住居跡南東隅で検出された。平面形は80cm×50cmの長円形を呈し、深さは25cmである。堆積土は4枚認められ、6~8層が自然流入土、9層は住居機能時に埋め戻された土である可能性がある。

[遺物] 堆積土から土師器の破片が若干出土しているが、図示できるものはない。

【14号住居跡】（第25・26図）

[位置・確認面] S-0-N~N6・E13~18区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 5.2m×3.9mの長方形を呈する。

[堆積土] 5枚認められた。3層は焼土層で、床面直上にも部分的に堆積していることから、住居廃絶後間もなく住居内に廃棄された焼土の層であると考えられる。1・2・4・5層は自然流入土である。

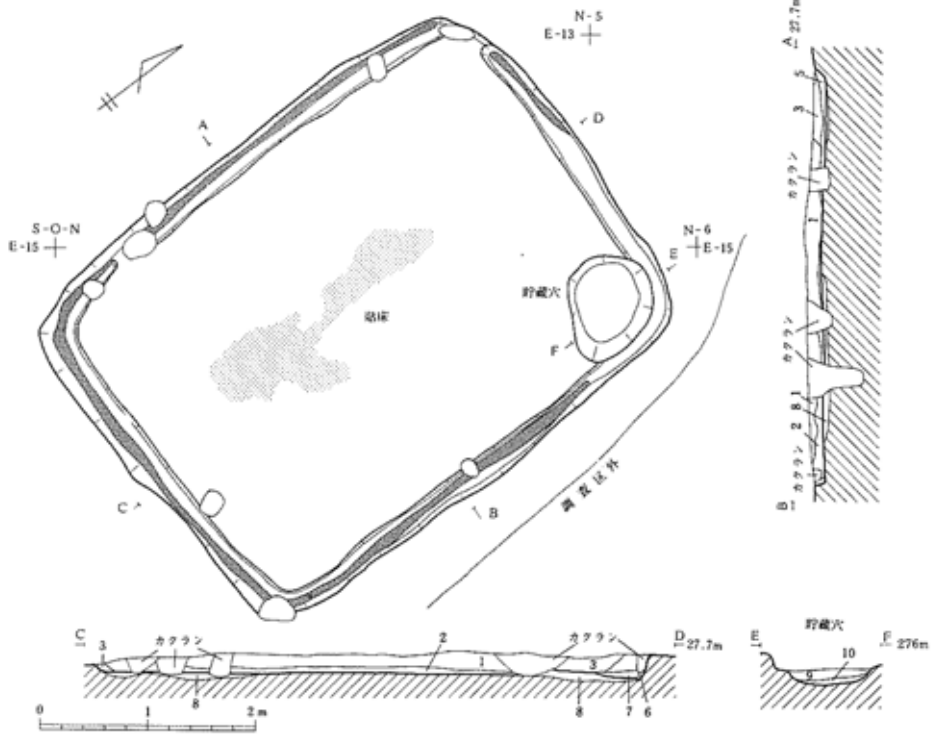
[壁]地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から20cmである。

[床]住居跡の中央付近は地山を、縁辺付近は掘り方埋土を床としている。また、中央には部分的に貼床されて硬化した部分がある。

[柱穴] 検出されなかった。

[周溝]壁の直下をほぼ全周する。幅約20cm、深さ約5cmである。住居跡の北東隅を除く周溝内の壁側に沿って、5~15cmの黒褐色土帯が検出されている。

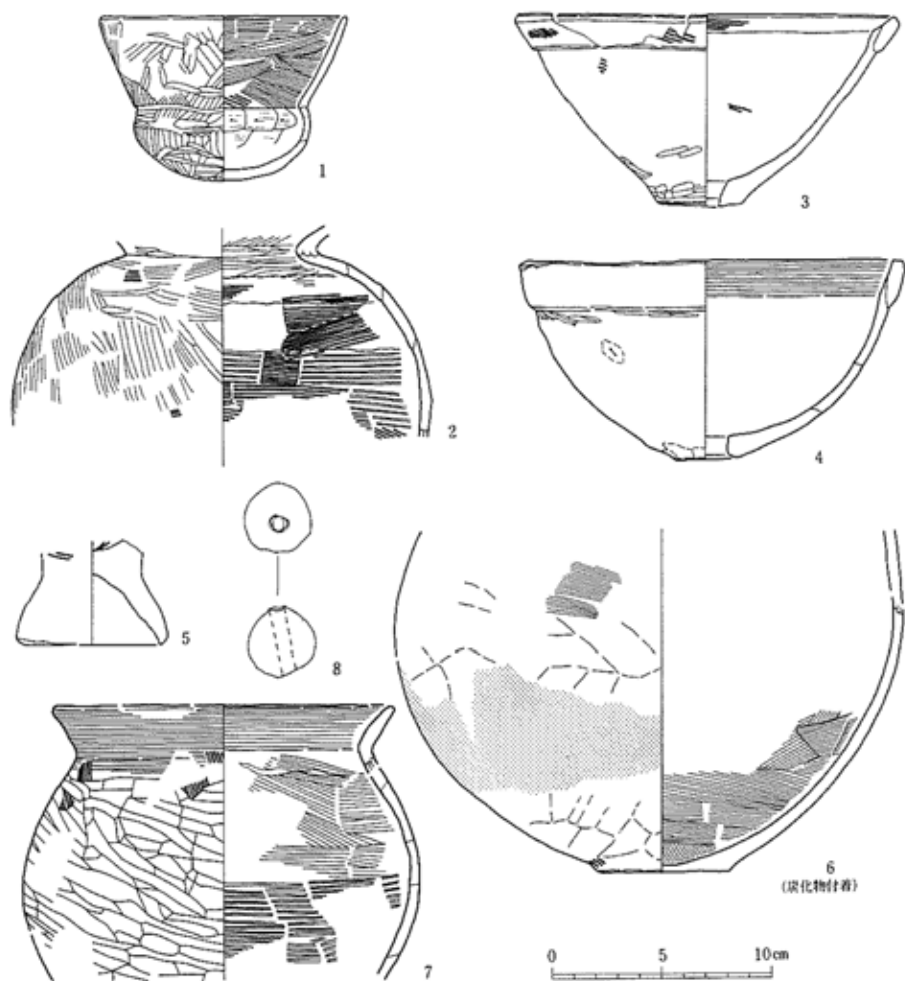
[貯蔵穴]住居跡北東隅で検出された。周溝と重複しこれより古い。平面形は1.1m×0.9mの不整な円形を呈し、深さは30cmである。堆積土は2枚で、9層が自然流入土、10層は住居機能時に堆積した土である可能性がある。



No	土色	土性	備考
1	10182/2 黒褐色	シルト	自然流入土 地山粒を含む
2	2.513/2 黒褐色	粘土質シルト	自然流入土 地山ブロックを含む
3	10183/2 黒褐色	シルト	自然流入土 炭化物・機土・地山粒を含む
4	10186/2 暗褐色	シルト	自然流入土 機土・地山粒を含む
5	10186/4 暗褐色	シルト	自然流入土 炭化物・地山ブロックを含む
6	10183/4 暗褐色	シルト	黒褐色土層
7	2.503/2暗オリーブ褐色	シルト	硬質埋土 地山小ブロックを多く含む
8	10183/4 暗褐色	シルト	自然降り方埋土 地山粒を含む
9	10185/2c, d, e 黄褐色	シルト	貯蔵穴埋積土 自然流入土
10	10185/4に, b, c 黄褐色	粘土質シルト	貯蔵穴埋積土 住居構築時の埋積土? 地山ブロックを多く含む

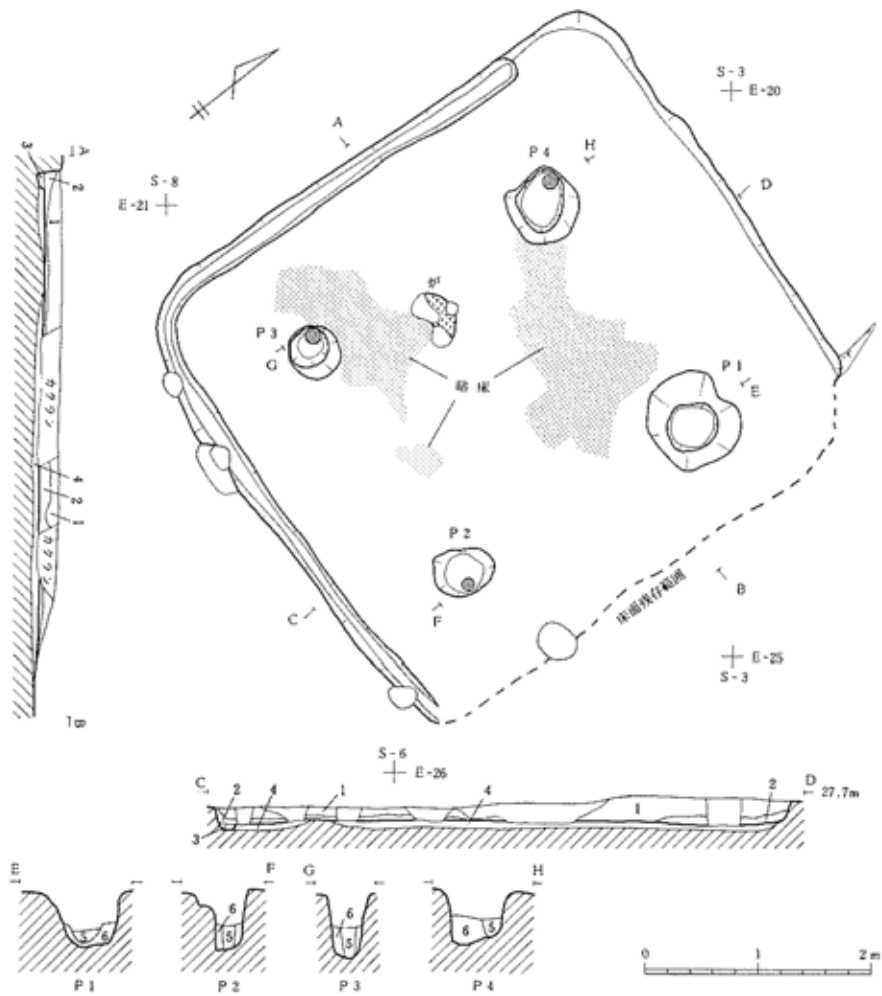
第25図 14号住居跡

[遺物] 床面から土師器坏（第26図1）、堆積土から土師器壺（同2）・甌（同3・4）・甕（同6・7）・台付甕（同5）・土玉（同8）が出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。



No.	器種別	分類	部位	片	面	裏面	内面	口径	底径	器高	残存率	図版	
1	土師器鉢	C 器	底	(ハケメ、ヘラケズリ) ヘラシガキ	手鞠	口縁ヘラシガキ、底部ヘラケズリ		11.3	2.1	7.2	2/3	24-5	
2	土師器鉢		埴埴土	ハケメヘラシガキ	/	口縁ヘラシガキ、埴埴ハケメ	/	/	/	19.8	埴埴01/2	24-6	
3	土師器鉢		埴埴土	鎌合口縁、(ハケメ) ナデ、埴埴下縁ヘラシガキ	1孔 (径1.3cm)	(ハケメ) ナデ		17.2	3.7	8.4	6/5	24-4	
4	土師器鉢		埴埴土	鎌合口縁、(ヘラケズリ) ナデ、埴埴上縁ヘラケズリ	1孔 (径1.5cm)	口縁コナデ、埴埴ナデ		17.6	2.8	8.7	6/5	24-3	
5	土師台付甕		埴埴土	埴埴下縁ハケメ、埴埴コヒナデ		埴埴ヘラのオキエ、埴埴ナデ	/	7.0	14.5	埴埴02/3			
6	土師器鉢	B	埴埴土	(ハケメ) ヘラケズリ全面ナデ、加熱痕		ヘラケズリ (ハケメ) ヘラナデ、加熱痕	/	8.0	14.8	埴埴遺跡02/3		25-17	
7	土師器甕	E	埴埴土	口縁コナデ、埴埴 (ハケメ) ヘラケズリ	/	口縁コナデ、埴埴上縁ヘラナデ下縁ハケメ		16.0	/	12.0	口縁部02/3		25-2
8	土瓦		埴埴土	最大径 3.1cm 重量21g 埴埴下縁中									

第26図 14号住居跡出土遺物



No	土色	土性	備考
1	0793/3 黒褐色	シルト	自然流入土 地山粒・ブロックを含む
2	0794/3に多い黄褐色	シルト	自然流入土 地山ブロックを多く含む
3	0792/3 黒褐色	シルト	周典埋土 地山ブロックを多く含む
4	0795/3に多い黄褐色	シルト	圧縮層り方埋土 地山ブロックを多く含む
5	0794/4 褐色	シルト	土柱穴埋り方埋土
6	0795/6に多い黄褐色	シルト	土柱穴埋り方埋土

第27図 15号住居跡



No.	器種別	分類	備註	外 面	底 面	内 面	口径	底径	高さ	残存率	図説
1	土師器器台?	鉢	ヘラミダキ	/	/	ナド→コナダ	/	11.9	12.6	胴部の1/5	
2	土師器鉢	フナ	1層 (ヘラヤミダキ→ヘラミダキ ナダ)			白磁ヨコナダ→ヘラミダキ、黒部ヘラミダキ	/	1.4	15.2	1/3	25-3

第28図 15号住居跡出土遺物

【15号住居跡】（第27・28図）

[位置・確認面] S2~8・E19~25区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 削平によって東辺が失われており全体の規模は不明であるが、現状で5.0m×4.6m以上の方形を基調とするものと思われる。

[堆積土] 2枚認められ、いずれも自然流入土である。

[壁]地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から20cmである。

[床]住居跡の大部分で掘り方埋土を、ごく一部で地山を床としている。主居跡の中央付近およびP3付近に貼床されて硬化した部分がある。

[柱穴] 検出されたP1~4は、その位置・形状・規模から支柱穴であると考えられる。いずれの柱穴にも柱抜き取り痕がみられた。

[周溝] 住居跡の西壁と南壁で検出された。幅は最大25cm、深さは約6cmである。

[炉]住居跡中央やや西寄りで、床面が焼けて赤変している部分が検出された。しかし攪乱を受けており、全体形は不明である。

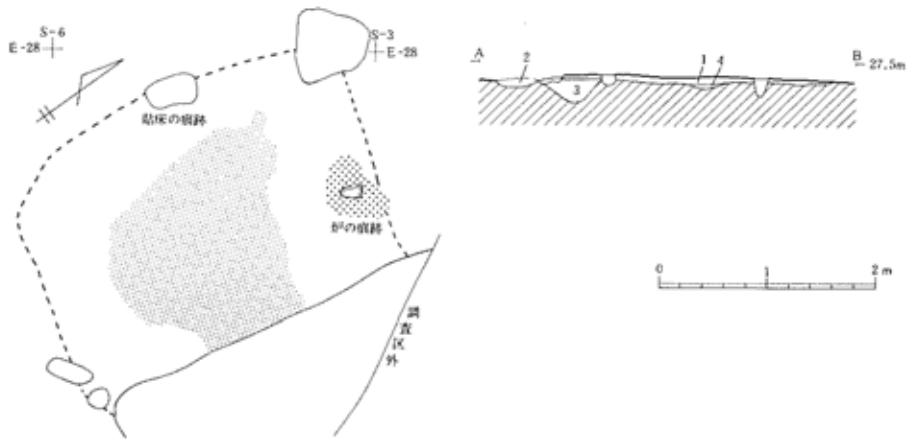
[遺物] 炉部分の床面から土師器器台と考えられるもの（第28図1）、堆積土から坏（同2）が出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

【16号住居跡】（第29図）

[位置・確認面] S3~6・E28~31区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 削平および攪乱を受けており全体の規模は不明であるが、現状で3.3m以上×2.6m以上の方形を基調とするものと考えられる。

[堆積土] 掘り方埋土のみ確認された。



No	土 色	土 質	備 考
1	10B5/9 黄褐色	粘土質シルト	住居層の方埋土 固くしまっている
2	10B5/9 黄褐色	粘土質シルト	住居層の方埋土
3	10B5/4に濃い黄褐色	粘土質シルト	住居層の方埋土 地山ブロックを多く含む
4	10B5/4に濃い黄褐色	粘土質シルト	住居層の方埋土

第29図 16号住居跡

[壁] 残存していない。

[床] 残存する掘り方埋土の上面が床面である可能性があるが、堆積土が残存していないため不明である。また、貼床されて硬化している部分の痕跡が検出された。

[柱穴] 検出されなかった。

[炉] 床面が焼けて硬化している部分が検出された。状況からみて炉の痕跡であると考えられる。また、その上面から平らな石が出土したが、これが本住居跡に伴うものであるかどうかは不明である。

[遺物] 出土していない。

【17号住居跡】（第30・31図）

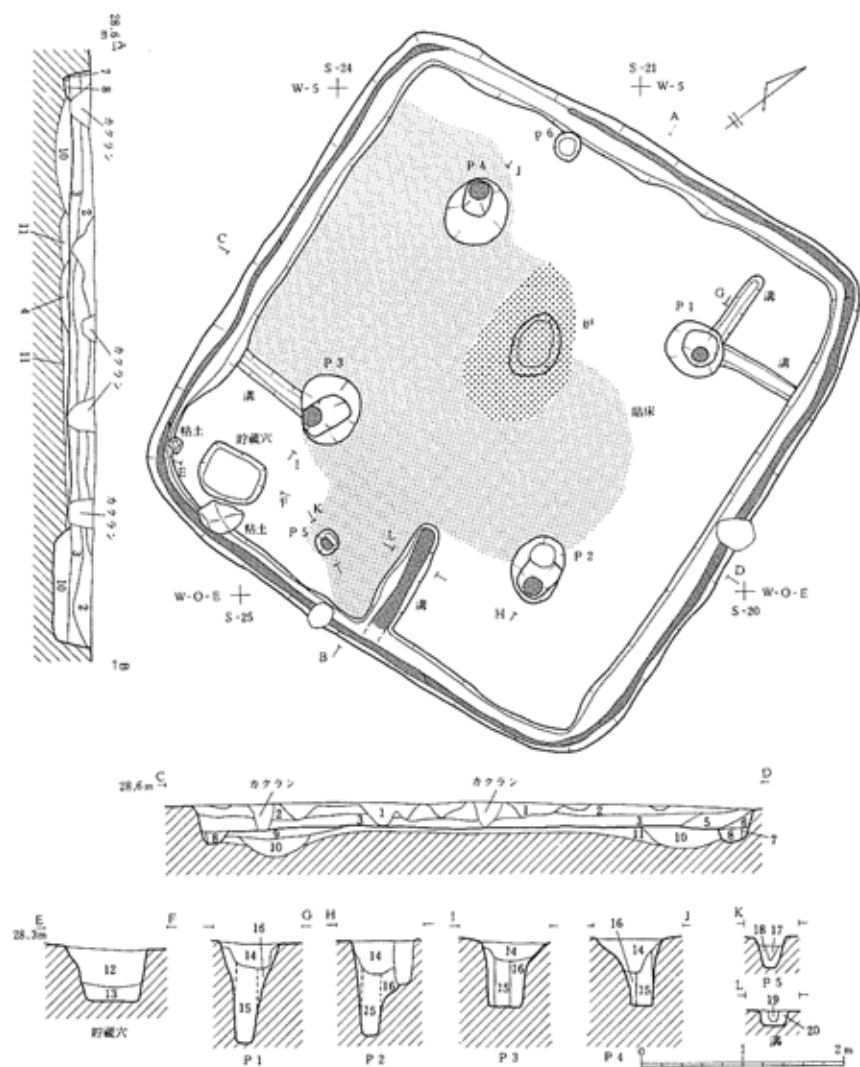
[位置・確認面] S19～26・W5～E1区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 5.8m×5.6mの隅丸正方形を呈する。

[堆積土] 5枚認められ、いずれも自然流入土である。

[壁] 地山を壁としており、周溝底面から垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から30cmである。

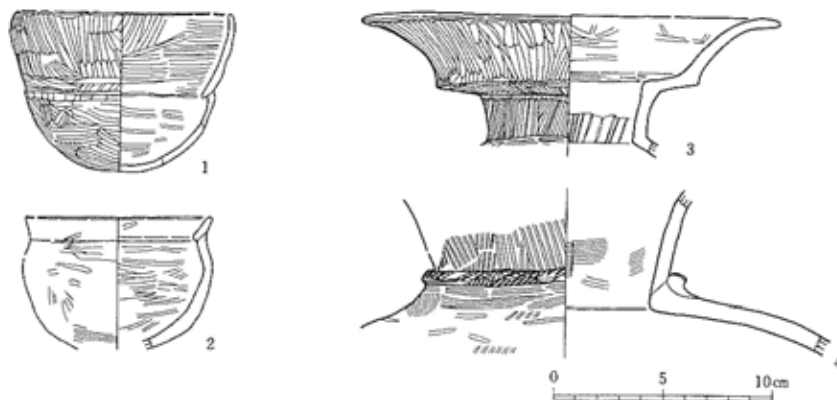
[床] 掘り方埋土を床としている。住居跡の中央付近から溝跡、P5にかけてと南辺周辺に、貼床されて硬化した部分が検出された。なお、床面の貼床・硬化部分は、この溝を境にして西寄りでは見られるが、東寄りではみられない。また、貯蔵穴と黒褐色土帯の間の床面



No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考	
1	10101	黄褐色	シルト	自然成土	11	10161	赤い黄褐色	粘土質シルト
2	10104	褐色	シルト	自然成土	12	10102	黄褐色	シルト
3	10102	黄褐色	シルト	自然成土	13	10104	褐色	シルト
4	10103	黄褐色	シルト	自然成土	14	10102	黄褐色	シルト
5	10102	黄褐色	シルト	自然成土	15	10103	黄褐色	シルト
6	10103	黄褐色	シルト	自然成土	16	10102	黄褐色	シルト
7	10161	赤い黄褐色	シルト	黄褐色土層	17	10102	黄褐色	シルト
8	10161	赤い黄褐色	シルト	黄褐色土層	18	10103	黄褐色	シルト
9	10105	黄褐色	粘土質シルト	自然成土	19	10103	黄褐色	シルト
10	10161	赤い黄褐色	粘土質シルト	自然成土	20	10161	赤い黄褐色	粘土質シルト

第30図 17号住居跡





No.	器種別	分形	用途	外 面	底 面	内 面	口径	底径	容 量	残 存 率	図号
1	土製器杯	C	杯	ヘラミダキ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	3.8	2.3	7.3	4/50以上	25-5
2	土製器杯	D	杯	ヘラミダキ、摩滅	ヘラミダキ	ヘラミダキ、摩滅	3.6	2.3	4.0	1/3	25-4
3	土製器蓋	C	蓋	口縁ヘラミダキ、底部ハケメヘラミダキ	ヘラミダキ	口縁ヘラミダキ、摩滅、底部ナデハヘラミダキ	15.1	16.4	口縁部1/3	25-6	25-6
4	土製器蓋	蓋	蓋	底部ハケメ、縁部ハケメヘラミダキ	ヘラミダキ	縁部ヘラミダキヘラミダキ、縁部ナデ	15.1	16.4	縁部1/3	25-7	25-7

第31図 17号住居跡出土遺物

で粘土塊が確認された。大きさは45cm×30cm、厚さは最大約10cmである。

[柱穴] 合計6個のピットが検出された。P1～4は、その位置・形状・規模から主柱穴であると考えられる。いずれの柱穴からも直径約20cmの柱痕跡が検出された。また、いずれの柱穴にも抜き取り痕がみられる。P5は壁際ピットと考えられ、掘り方の平面形が一辺25cmの隅丸正方形で、断面形は住居跡の壁側が緩やかで住居跡中央側が急な変形V字形である。床面からの深さは35cmである。材の痕跡は15cm×10cmの長円形を呈する。P6は平面形が直径30cmの円形を呈し、深さは25cmである。P5の反対側に位置するが、性格は不明である。

[周溝] 壁の直下を全周する。幅は20～35cm、深さは約5cmである。また、北壁の一部を除く周溝内の壁側に沿って、幅5～10cmの黒褐色土帯が検出されている。

[炉] 住居跡の中央やや北寄り、床面が弱く焼けて赤変している部分が検出された。範囲は1.7m×1.0mで、中央部分は65cm×45cm、深さ5cmの皿状の浅い窪みである。

[貯蔵穴] 住居跡南東隅で検出された。平面形は65cm×50cmの隅丸長方形を呈し、深さは50cmである。堆積土は2枚認められ、自然流入土である。

[その他の施設] 住居跡の南辺中央で壁と直交する方向の溝が検出された。この溝の中央には黒褐色土帯が認められ、長さは1.1m、幅は最大で20cm、深さは10cmである。また、この溝は周溝と重複しているが、その前後関係は不明である。またP1周辺で2条、P3周

辺で1条の壁と直交する方向の溝が検出された。いずれも長さ80cm前後、幅20cm前後で、深さは10cmほどである。これらの溝は主柱穴の抜き取り穴に壊されている。

[遺物] 床面から土師器坏(第30図1・2)・壺(同3・4)が出土している。このうち1・3・4は住居跡南辺、貯蔵穴付近の壁際からまとまって出土しており、一括して廃棄されたものと考えられる。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

【18号住居跡】(第32・33図)

[位置・確認面] S28~37・W3~E6区付近で検出した。確認面は層上面である。

[重複] 1号土壌と重複し、これより古い。

[平面形・規模] 7.6m×6.9mの正方形を呈する。

[堆積土] 6枚認められた。基本的に自然流入土であるが、5層は焼土層で、住居廃絶後に住居内に廃棄された焼土の層と考えられる。

[壁] 地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から25cmである。

[床] 掘り方埋土を床としている。炉とP1周辺、貯蔵穴周辺、P5周辺に貼床されて硬化している部分が確認された。なお、P5周辺の貼床は周溝を覆うが、黒褐色土帯には及んでいない。また、貯蔵穴と黒褐色土帯の間の床面で粘土塊が確認された。粘土は白色で、大きさは20cm×20cm、厚さは最大3cmである。

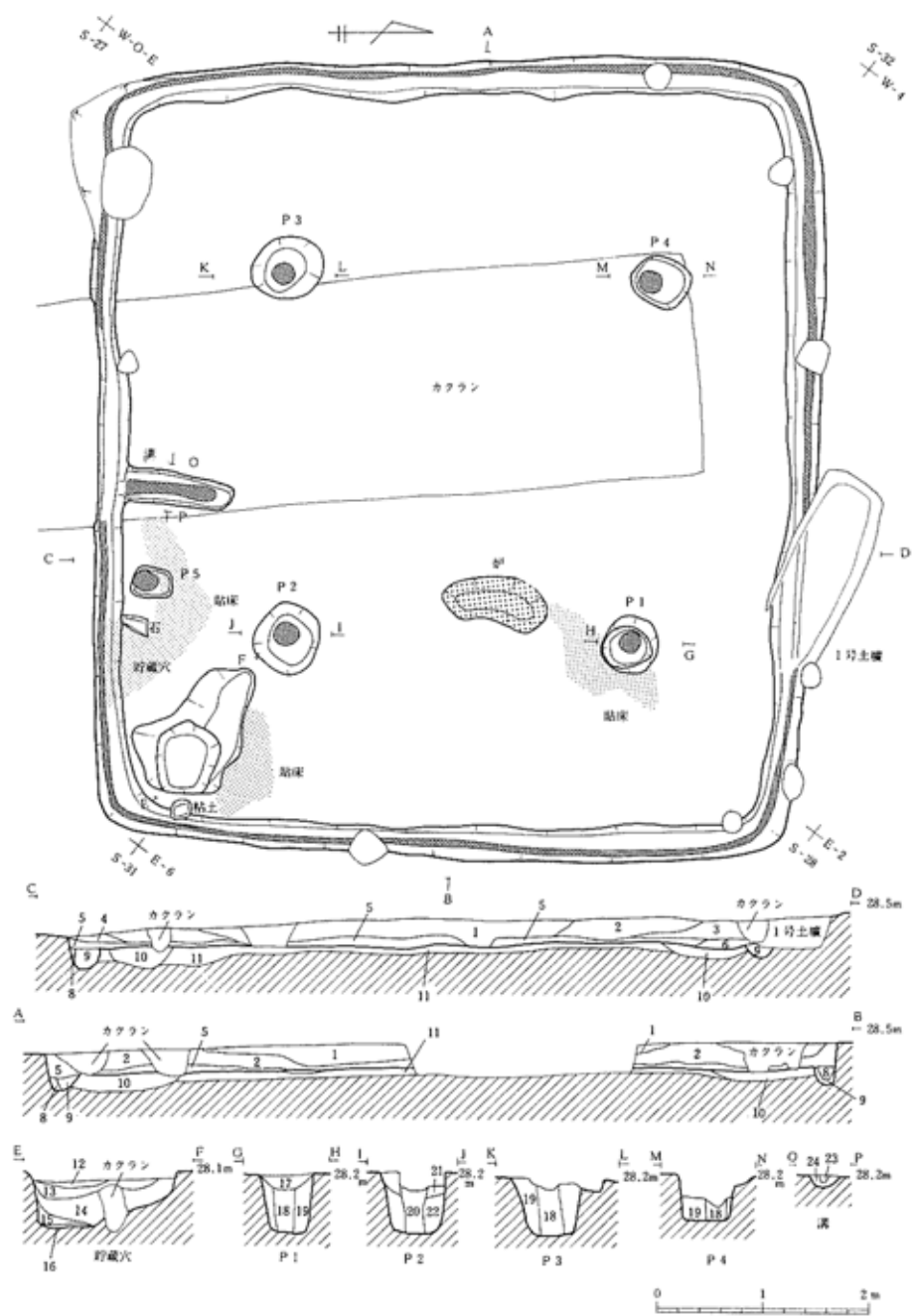
[柱穴] 合計5個のピットが検出された。P1~4は、その位置・形状・規模から主柱穴であると考えられる。いずれの柱穴からも直径約20cm、円形の柱痕跡が検出された。また、柱痕跡直下の掘り方底面はいずれの柱穴でも硬化していた。P1には柱の抜き取り痕と考えられる痕跡がみられる。P5は住居跡南辺東寄りで検出された。平面形は40cm×30cmの隅丸長方形で、床面からの深さは45cmである。材の痕跡は床面で検出され、直径25cmの円形を呈する。なお、P5周辺の貼床はその掘り方を覆っている。

[周溝] 壁の直下を全周する。幅は20~35cm、深さは約5cmである。攪乱を受けている南壁の一部を除く周溝内の壁側に沿って、幅5~10cmの黒褐色土帯が検出されている。

[炉] 住居跡中央やや東寄り、壁と底面が焼けて赤変した皿状の浅い窪みが検出された。範囲は1.0m×0.4mの不整形で、深さは5cmである。

[貯蔵穴] 住居跡南東隅で検出された。平面形は1.4m×1.0mの不整形で、その中に一辺60cmの隅丸正方形の部分がある。深さは55cmである。堆積土は15、16層が住居機能時に堆積した土、12~14層が自然流入土であると考えられる。

[その他の施設] 住居跡南辺中央で壁と直交する方向の溝跡が検出された。溝の中央には黒褐色土帯が認められ、長さは90cm、幅は最大で15cm、深さは8cmである。また、この溝



第32図 18号住居跡

第2表 18号住居跡観察表

S118 2表

No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	自然流入土 炭化物を少量含む
2	10YR4/3 紅褐色	シルト	自然流入土 炭化物を少量含む
3	7.5YR4/6 暗褐色	シルト	自然流入土 焼土を多量含む
4	10YR5/4 紅褐色	シルト	自然流入土
5	10YR4/6 暗褐色	シルト	自然流入土 地山ブロックを含む
6	10YR2/1 黒色	シルト	自然流入土 焼土を含む
7	10YR4/6 暗褐色	シルト	砂堆積土 自然流入土 焼土を含む
8	10YR5/4 紅褐色	シルト	黄褐色土層
9	10YR5/3 紅褐色	シルト	黄褐色土
10	10YR4/3 紅褐色	シルト	住居掘り方埋土 地山ブロック・黄褐色土ブロック・焼土を多く含む
11	10YR4/3 紅褐色	シルト	住居掘り方埋土 地山ブロックを含む
12	10YR4/3 紅褐色	シルト	貯蔵穴堆積土 埋土? 地山砂を多く含む 焼土・炭化物を少量含む
13	10YR2/2 黒褐色	シルト	貯蔵穴堆積土 埋土? 地山砂を多く含む 焼土・炭化物を少量含む
14	10YR4/6 暗褐色	シルト	貯蔵穴堆積土 埋土? 地山ブロックを多く含む
15	10YR4/2 灰褐色	シルト	貯蔵穴堆積土 住居掘削時の埋積 地山ブロックを少量含む
16	10YR2/1 黒色	粘土	貯蔵穴堆積土 住居掘削時の埋積
17	10YR3/3 暗褐色	シルト	主柱穴 (P1) 柱抜き取り層
18	10YR2/2 黒褐色	シルト	主柱穴柱脚跡 炭化物を若干含む
19	10YR4/3 紅褐色	シルト	主柱穴掘り方埋土 地山ブロック・黄褐色土ブロックを多く含む
20	10YR2/2 黒褐色	シルト	主柱穴 (P2) 柱脚跡
21	10YR3/2 黄褐色	シルト	主柱穴 (P2) 掘り方埋土 地山ブロックを含む
22	10YR3/2 黄褐色	シルト	主柱穴 (P2) 掘り方埋土
23	10YR5/4 紅褐色	シルト	黄褐色土層
24	10YR5/4 紅褐色	シルト	溝掘り方埋土 地山砂を含む

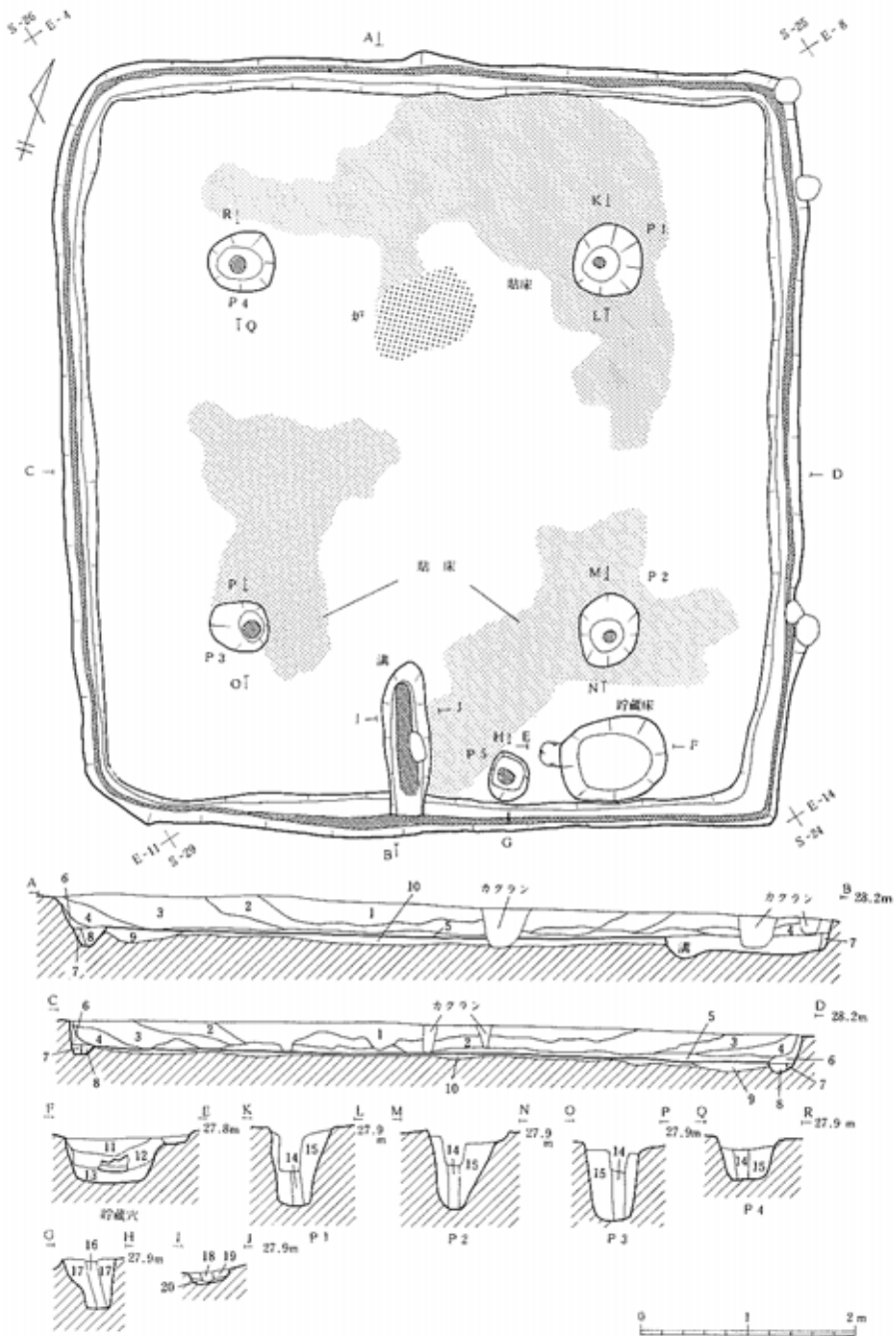


No	器種別	分類	層位	外	底	口縁	内	口縁	口径	高さ	残存率	図版
1	土師器壺	甲		S字状口縁、口縁ヨコナデ、体部ハナメ	/	/	口縁ヨコナデ、体部ハナメ	10.3	/	12.4	口縁1/2	20-3
2	土師器壺	乙	1層	口縁ヨコナデ、体部ハナメ→ヘラミガキ	厚底	/	口縁ヨコナデ→ヘラミガキ、体部ナデ	9.9	5.9	11.7	1/1	20-2
3	土師器高坏	丙	1、2層	ハナメ→ヘラミガキ、厚底	/	(縦筋なし)	厚底厚底、縦筋ハナメ、厚底	13.9	13.1	14.5	胴部04/5	20-1

第33図 18号住居跡出土遺物

は周溝と重複しているが、その前後関係は不明である。

[遺物] 炉内に堆積した焼土中から土師器甕(第33図1)、住居跡堆積土中から壺(同2)・高坏(同3)が出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。



第34図 19号住居跡

第3表 19号住居跡観察表

No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	自然流入土 地山粒を含む
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	自然流入土 地山粒を含む 炭化物を少量含む
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	自然流入土 地山粒を含む 炭化物を含む
4	10YR3/2 黒褐色	シルト	自然流入土 炭化物を多量含む
5	10YR4/4 褐色	シルト	自然流入土 地山粒・地山ブロックを多量含む
6	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	自然流入土 地山小ブロックを多量含む(壁積落土?)
7	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒褐色土層
8	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	周溝埋土 地山ブロックを多量含む
9	10YR4/4 褐色	シルト	住居掘り方埋土 地山ブロックを多量含む
10	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	住居掘り方埋土 地山ブロックを含む
11	10YR3/3 暗褐色	シルト	貯蔵穴埋積土 自然流入土 炭化物を多量含む 住居埋積土4層と類似
12	10YR2/3 黒褐色	シルト	貯蔵穴埋積土 自然流入土 炭化物を多量含む
13	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	貯蔵穴埋積土 住居掘削時の堆積 地山ブロックを多量含む
14	10YR3/2 黒褐色	シルト	主柱穴埋積土
15	10YR6/4 にぶい黄褐色	シルト	主柱穴掘り方埋土 地山ブロックを多量含む
16	10YR3/3 暗褐色	シルト	P5柱痕跡 炭化物を若干含む
17	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	P5掘り方埋土 地山ブロックを含む 炭化物を若干含む
18	10YR4/4 褐色	シルト	溝黒褐色土層 炭化物を含む
19	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	溝埋土 地山ブロックを含む
20	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	溝埋土 地山小ブロックを多量含む

【19号住居跡】(第34・35図)

[位置・確認面] S21～29・E5～14区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 7.2m×7.0mの正方形を呈する。

[堆積土] 6枚認められ、いずれも自然流入土である。4層は炭化物を多量に含み、大部分が床面の直上に堆積していることから、住居廃絶後間もなく住居内に廃棄された炭の層であると考えられる。

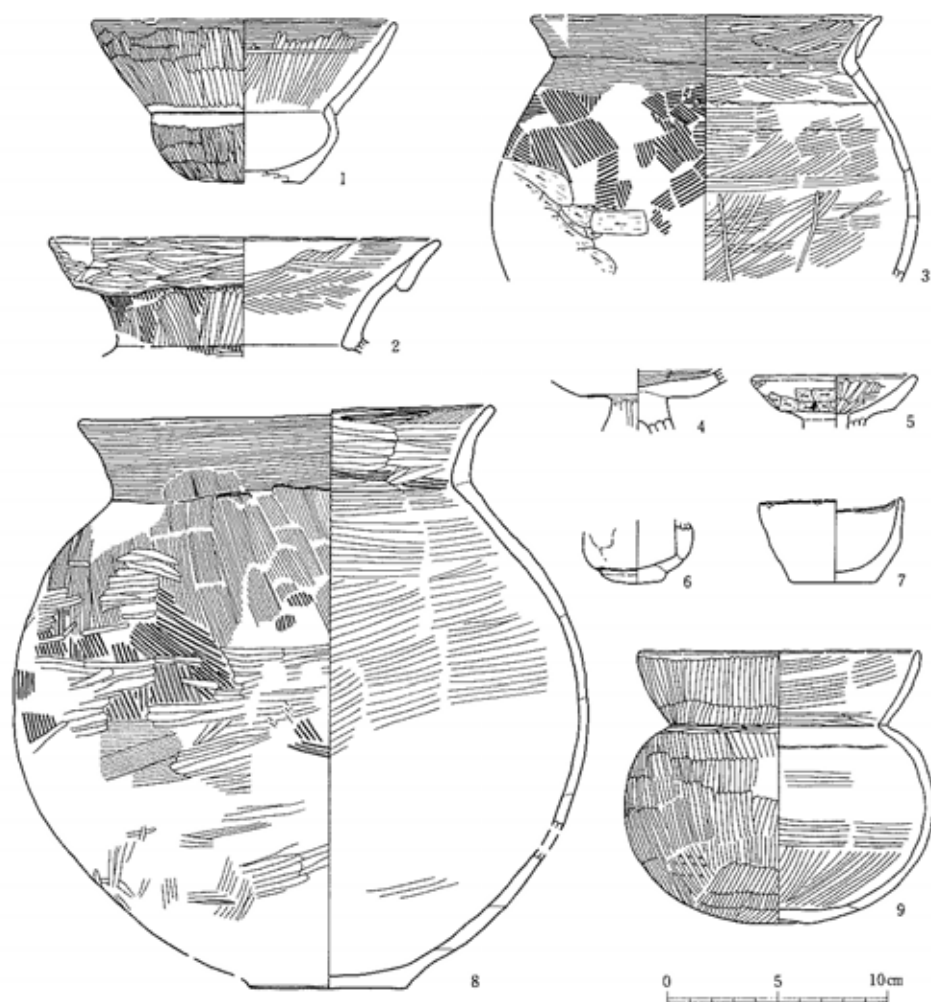
[壁] 地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から30cmである。

[床] 掘り方埋土を床としている。貼床されて硬化している部分が、4本の柱穴を結んだライン周辺から住居跡の北西辺にかけてとP5、溝跡にかけてみられる。なお、床面の貼床・硬化範囲は、この溝を境にして東側では認められるが、西側では認められない。

[柱穴] 合計5個のピットが検出された。P1～4は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。いずれの柱穴からも直径10～15cmの円形ないし長円形の柱痕跡が検出されている。P5は住居跡南辺中央やや東寄りで検出されており、壁際ピットと考えられる。平面形は50cm×35cmの隅丸長方形で床面からの深さは50cmである。材の痕跡は15cm×12cmの長円形で、住居跡の壁側に向かって傾斜している。

[周溝] 壁の直下を全周する。幅は20～35cm、深さは約15cmである。また、周溝内の壁側に沿って、幅5～10cmの黒褐色土帯が検出されている。

[炉] 住居跡中央やや北寄りで、床面が焼けて赤変している部分が検出された。範囲は1.0m×0.7mのやや不整な長方形を呈する。



No.	器種別	分類	部位	外	動	底	内	口徑	口径	高さ	底径	容積	出所
1	土師器鉢	C 器	野崎穴口縁上	ヨコナデヘラシガキ、加熱痕	ナデ	ヨコナデコナデヘラシガキ、縁部加熱痕	ヨコナデコナデヘラシガキ、縁部加熱痕	13.9	5.1	3.5	4.5以上	26-8	
2	土師器鉢	B	底	黄白口縁、口縁シガキ、縁部ハケメヘラシガキ	ノ	ヘラシガキ、加熱痕	ヘラシガキ、加熱痕	17.8	ノ	15.33	口縁部1/1	26-9	
3	土師器鉢	E	底	ヨコナデコナデ、縁部ハケメヘラシガキ、加熱痕	ノ	ヨコナデコナデヘラシガキ、縁部ヘラシガキ	ヨコナデコナデヘラシガキ、縁部ヘラシガキ	16.0	ノ	12.13	1/4	26-11	
4	土師器鉢		底	縁部不明、縁部ヘラシガキ	ノ	縁部ヘラシガキ	縁部ヘラシガキ	ノ	ノ	12.50	縁部上端のみ		
5	土師器鉢		底	ヘラシガキ、黄泥	ノ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	7.6	ノ	12.40	受胎のみ		
6	土師器小形		底	(ヘラシガキ) ナデ	ヘラシガキ	ナデ	ナデ	ノ	2.9	12.99	1/2	26-4	
7	土師器小形		底	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	6.1	3.8	3.9	1/3	26-5	
8	土師器鉢	C B	野崎穴口縁上	ヨコナデコナデ、縁部ハケメヘラシガキ	ナデ、加熱痕	ナデ、加熱痕	ヨコナデコナデヘラシガキ、縁部ヘラシガキ、加熱痕	18.0	5.2	26.6	1/3	26-1	
9	土師器鉢	F	底	口縁ヘラシガキ、縁部(ハケメ)ヘラシガキ	不明	ヘラシガキ、黄泥	ヘラシガキ、黄泥	12.9	2.4	12.4	4/5以上	26-19	

第35図 19号住居跡出土遺物

[貯蔵穴] 住居跡南辺、南東隅近くで検出された。平面形は 1.0m×0.8mの隅丸長方形を呈し、深さは 45cm である。堆積土は 11、12 層が自然流入土、13 層は埋め戻された土であると考えられる。12 層は住居跡堆積土の 4 層と類似する。

[その他の施設] 住居跡の南辺中央で壁と直交する方向の溝跡が検出された。溝の中央には黒褐色土帯が認められ、長さは 70cm、幅は最大で 15cm、深さは 10cm である。この溝は周溝と重複し、これよりも新しいが、周溝内の壁側にみられる黒褐色土帯は壊していない。また、溝の黒褐色土帯と周溝の黒褐色土帯との間には 20cm の間隔がある。

[遺物] 床面から土師器壺（第 35 図 2・9）・甕（同 3）・高坏（同 4）・器台（同 5）・小形土器（同 6・7）が出土している。また、貯蔵穴からは土師器坏（同 1）・甕（同 8）が出土しており、その出土状況から住居機能時または廃絶直後に一括して廃棄されたものであると考えられる。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

#### 【20 号住居跡】（第 36～39 図）

[位置・確認面] S22～28・E17～22 区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 5.5m×5.0mの隅丸正方形を呈する。

[堆積土] 6 枚認められ、いずれも自然流入土である。2 層には焼土や炭化物が多く含まれている。

[壁] 地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から 30cm である。

[床] 掘り方埋土を床としている。貼床されて硬化した部分が 4 本の支柱穴に囲まれた部分にみられる。

[柱穴] 合計 5 個のピットが検出された。P1～4 は、その位置・形状・規模から支柱穴であると考えられる。いずれの柱穴からも、直径約 15cm の円形の柱痕跡が検出された。P5 はその位置から壁際ピットと考えられる。平面形は 45cm×30cm の隅丸長方形である。断面形は住居跡の壁側が緩やかで住居跡の中央側が急な変形 V 字形、床面からの深さは 45cm である。材の痕跡は 20cm×8cm の長円形で、住居跡の壁側に向かって傾斜している。

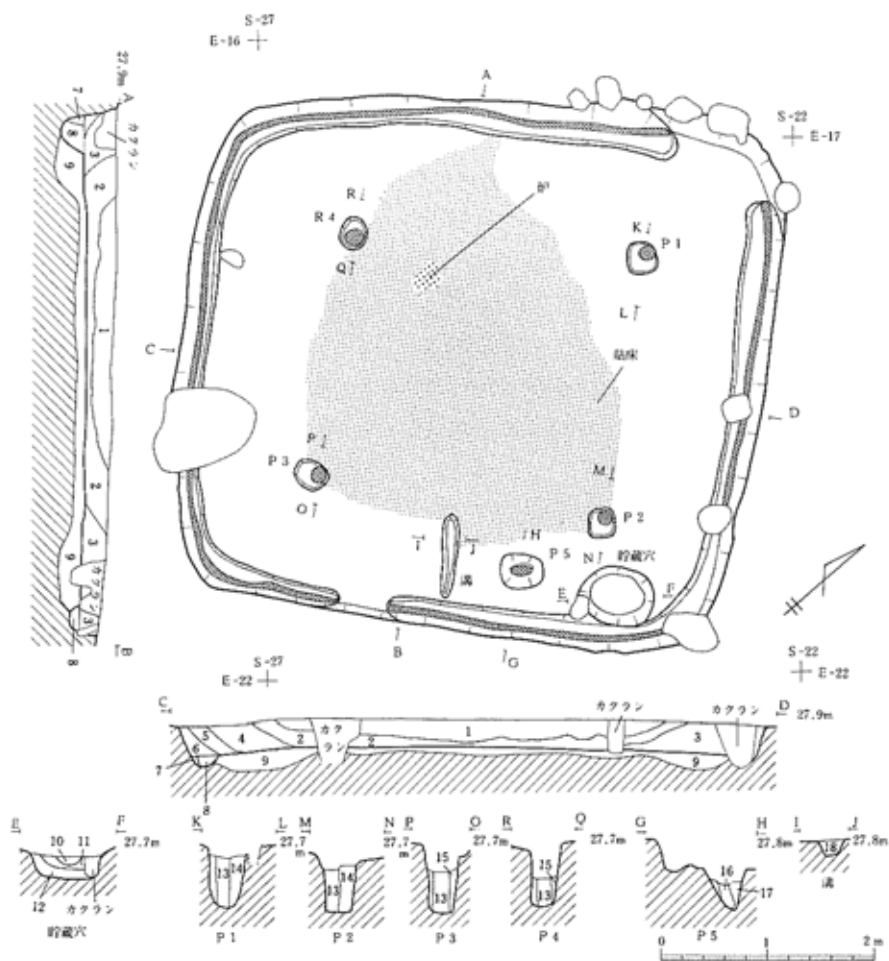
[周溝] 壁の直下をほぼ全周する。幅は 15～25cm、深さは約 20cm である。また、北隅と南東辺の一部を除く周溝内の壁側に沿って、幅 5～10cm の黒褐色土帯が検出されている。

[炉] 住居跡の中央やや西寄り、床面が焼けて赤変している部分が検出された。その範囲は 30cm×25cm の不整形を呈する。

[貯蔵穴] 住居跡東隅で検出された。平面形は 70cm×55cm の長円形を呈し、深さは 25cm である。堆積土は 3 枚認められ、いずれも自然流入土である。

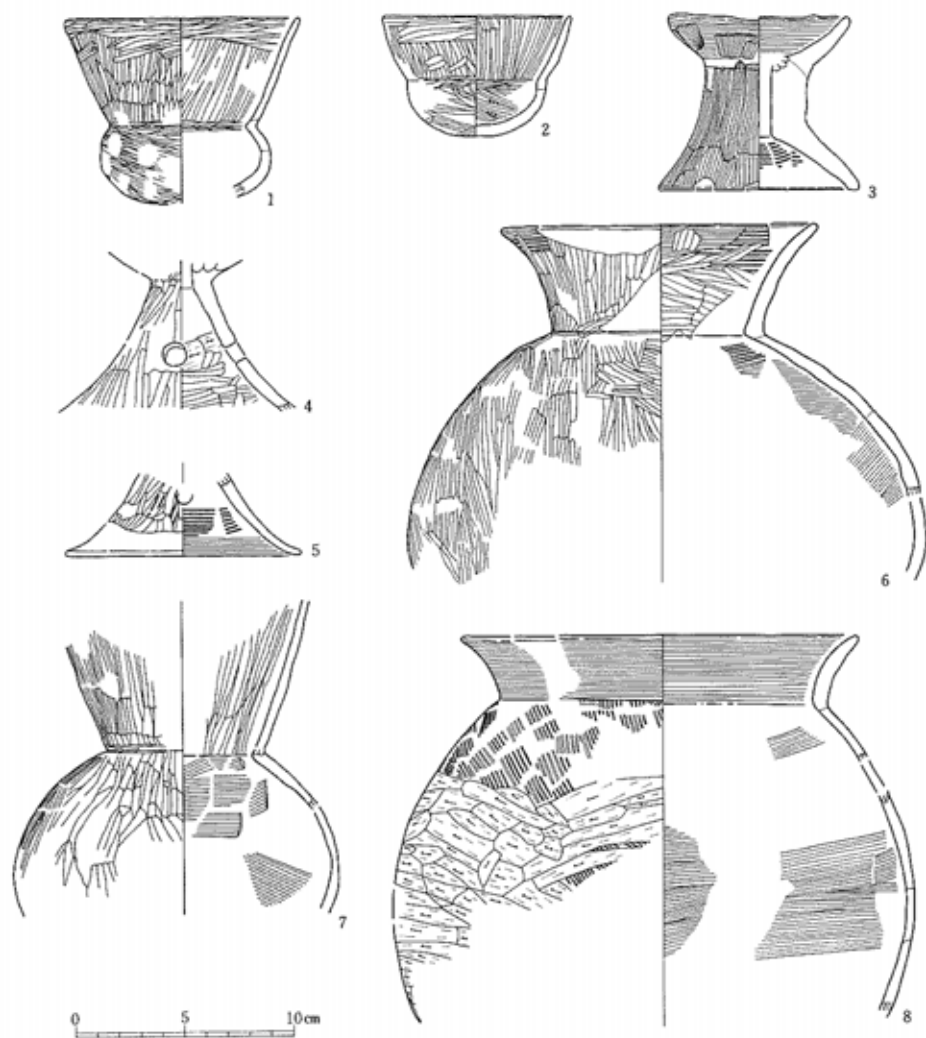
[その他の施設] 住居跡の南東辺中央で壁と直交する方向の溝跡が検出された。この溝の長





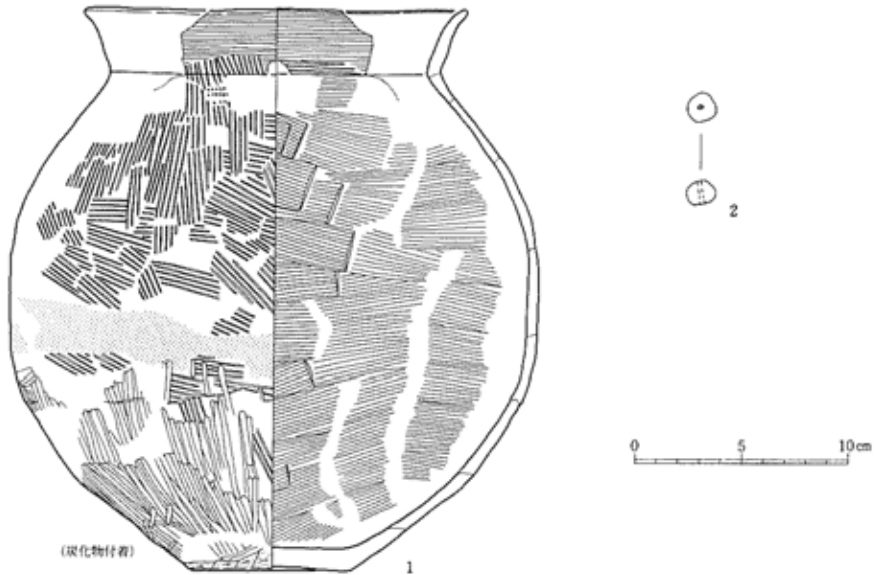
No	土色	土質	備考
1	10YR2/3 黄褐色	シルト	自然成土 粘土を少量含む
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	自然成土 粘土、炭化物を多量含む
3	10YR4/4 褐色	シルト	自然成土 粘土、地山粒を含む
4	10YR6/3 2.0Y・黄褐色	シルト	自然成土 地山粒・地山ブロックを含む
5	10YR3/2 黄褐色	シルト	自然成土
6	10YR6/3 2.0Y・黄褐色	シルト	自然成土 地山小ブロックを多量含む
7	10YR5/6 2.0Y・黄褐色	シルト	黄褐色土層
8	10YR5/6 2.0Y・黄褐色	シルト	黄褐色土 地山ブロック・黄褐色土ブロックを多量含む
9	10YR5/4 2.0Y・黄褐色	シルト	自然成り方理土 地山ブロック・黄褐色土を多量含む 炭化物を若干含む
10	10YR2/3 2.0Y・黄褐色	シルト	貯蔵穴内縁上 自然成土 地山粒を含む
11	10YR3/4 暗褐色	シルト	貯蔵穴内縁上 自然成土 地山粒を多量含む
12	10YR4/4 褐色	シルト	貯蔵穴内縁上 自然成土 地山粒・地山小ブロックを含む
13	10YR5/4 2.0Y・黄褐色	シルト	主柱式柱頭跡
14	10YR2/3 黄褐色	シルト	主柱式 (P1・2) 掘り方理土 地山ブロック・黄褐色土ブロックを多量含む
15	10YR5/4 2.0Y・黄褐色	シルト	主柱式 (P3・4) 掘り方理土 地山ブロックを多量含む
16	10YR5/4 2.0Y・黄褐色	シルト	P5柱頭跡 地山ブロックを若干含む
17	10YR5/4 2.0Y・黄褐色	シルト	P5掘り方理土 地山ブロックを多量含む
18	10YR5/4 2.0Y・黄褐色	シルト	黄褐色土 地山粒を含む

第36図 20号住居跡



No.	器種別	分類	部位	内面	外面	口縁	底面	口径	底径	器高	残存率	図号
1	土師器杯	B	深	ヘラシガキ、加熱痕	不明	口縁ヘラシガキ、加熱痕	底面	11.8	7	8.5	5/6以上	27-4
2	土師器杯	C II	2層土器製中	ヘラシガキ	ヘラシガキ	(ハケマー)ヘラシガキ	底面	8.7	1.5	5.0	2/3	
3	土師器器台	C	浅	口縁ヨコナデヘラシガキ、加部ヘラシガキ	(加部地位上)	加部ヘラシガキ	底面	8.2	9.2	8.2	1/3	27-5
4	土師器器台		2層	ヘラシガキ	(加部地位上層)	加部ヘラシガキ	底面	7	7	17.6	1/3	
5	土師器器台?		2層	(ハケマー)ヘラシガキ	(内面1層厚付)	ハケマーナデ、ヨコナデ	底面	10.8	1.5	11.6		
6	土師器器	D	2層	口縁ヨコナデハケマーヘラシガキ、加部ヘラシガキ	不明	口縁ヨコナデハケマーヘラシガキ、加部ヘラシガキ	底面	14.5	1.4	116.0	1/4	29-1
7	土師器器	G	深	ヘラシガキ	不明	口縁ヘラシガキ、加部ヘラシガキ	底面	114.0	1.4	114.0	1/4	27-4
8	土師器器	C II	2層土器製中	口縁(ハケマー)ヨコナデ、加部ハケマーヘラシガキ	不明	口縁ハケマーヨコナデ、加部ヘラシガキ、加熱痕	底面	11.2	1.2	117.3	1/2	27-2

第37図 20号住居跡出土遺物(1)



No.	器種別	分類	部位	内面	外面	内面	口径	口径	高さ	残存率	図版
1	土師器壺	C B	2層	口縁ハケメヨコナダ、腹部ハケメヨコナダ	ヘラケズリ	口縁ヨコナダ、腹部ヘラナダ	28.2	5.4	28.5	1/2	29-2
2	土玉		2層	最大径1.4cm、重0.2g、029536 下段付							

第38図 20号住居跡出土遺物（2）

さは80cm、幅は最大で15cm、深さは14cmである。

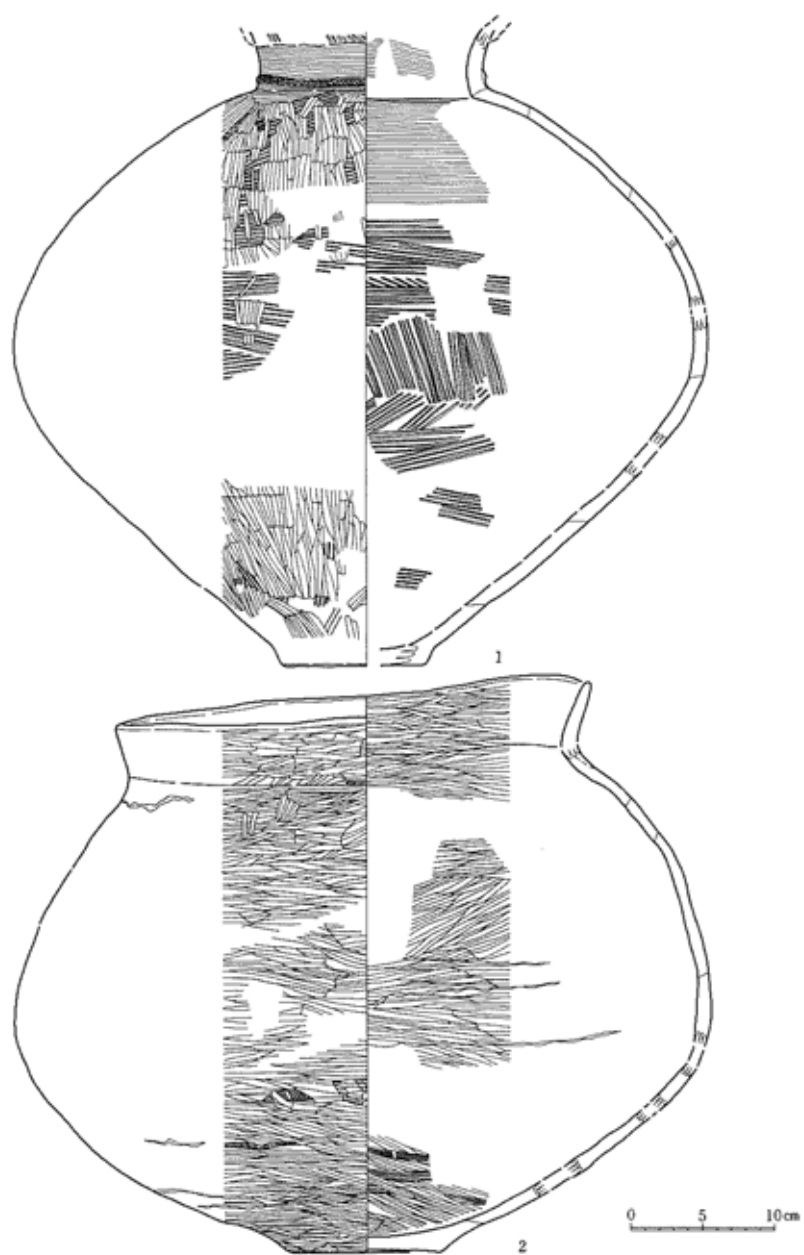
[遺物] 床面から土師器坏（第37図1）・器台（同3）・壺（同7）が出土している。また、住居跡北隅付近の床面～堆積土下位に、一括して廃棄されたと考えられる土器集中地点がみられる。この集中地点からは、土師器坏（同2）・壺（第39図1）・甕（第37図8・第39図2）が出土した。さらに、堆積土中から器台（第37図4・5）・壺（同6）・土玉（第38図2）も出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

【21号住居跡】（第40・41図）

[位置・確認面] S28～33・E24～28区付近で検出した。確認面は 層上面である。

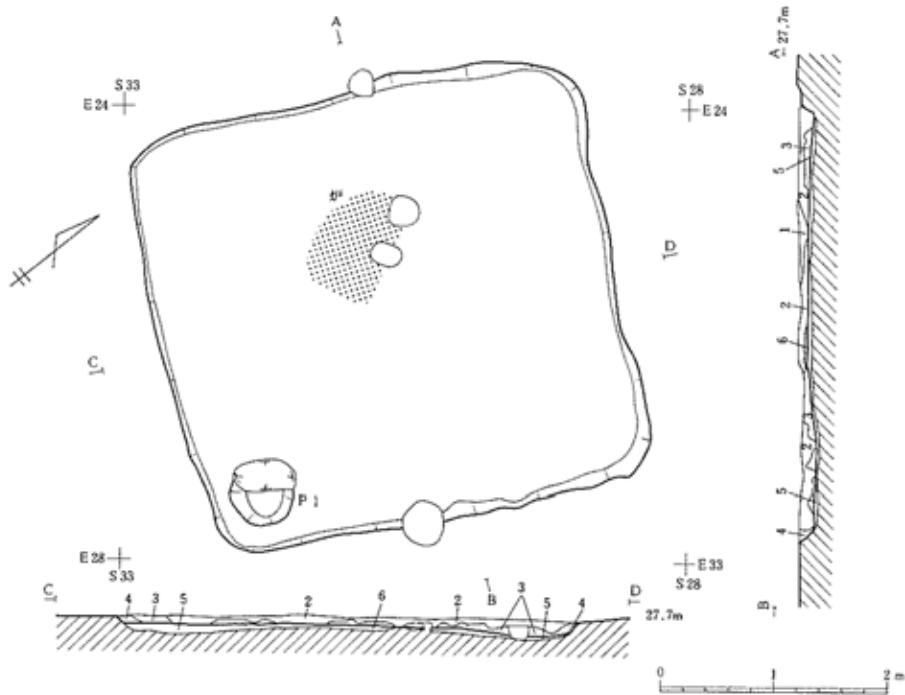
[平面形・規模] 4.1m×3.8mの隅丸正方形を呈する。

[堆積土] 4枚認められ、いずれも自然流入土である。



No.	器種別	分類	層位	外面	内面	口縁	口径	底径	器高	保存率	図版
1	壺	A	2層上層集中	珠白口縁、胴部ヨコナガ、体部ハツメヘラヒギ4	ヘラヒギ4	胴部→体部上半ナガ、以下ハツメ、割棄	∕	18.0	104.7	4/50上	28-1
2	壺	A	2層上層集中	口縁、体部ハツメヘラヒギ4	木炭痕 ハツメヘラヒギ4		33.2	16.7	40.4	4/50上	28-2

第39図 20号住居跡出土遺物(3)



No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黄褐色	シルト	自然流土 地山粒を含む
2	10YR3/2 黄褐色	シルト	自然流土 地山粒・地山ブロックを含む
3	10YR3/4 黄褐色	シルト	自然流土 地山ブロックを多量含む
4	10YR6/6 褐色	シルト	自然流土 地山ブロックを多量含む
5	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	圧縮掘り方埋土 黒色土ブロックを多量含む
6	10YR4/3 棕色・黄褐色	シルト	圧縮掘り方埋土 黒色土ブロックを多量含む

第40図 21号住居跡

- [壁] 地山を壁としている。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から15cmである。
- [床] 掘り方埋土を床としている。
- [柱穴] 検出されなかった。
- [炉] 住居跡の中央やや北西寄りで、床面が焼けて赤変している部分が検出された。その範囲は1.0m×0.7mである。
- [貯蔵穴] 住居跡南隅で検出されたP1はその位置から貯蔵穴である可能性がある。カクランによって壊されており、全体の形状や規模は不明である。
- [遺物] 堆積土中から土師器小形土器が出土した(第41図1)、その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。



No.	器種別	分類	部位	外	底	内	口縁	底径	高さ	残存率	図例
1	土師器小形	土器	ボディナブ	ナブ	ナブ		/	4.8	18.0	1/3	

第41図 21号住居跡出土遺物

【22号住居跡】（第42・43図）

[位置・確認面] S33～40・E17～24区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 5.9m×5.9mの正方形を呈する。

[堆積土] 8枚認められ、いずれも自然流入土である。

[壁] 地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から30cmである。

[床] 掘り方埋土を床としている。貼床されて硬化している部分が、住居跡中央およびP5周辺、貯蔵穴周辺、北西辺付近にみられる。また、貯蔵穴に接する床面で粘土塊が確認された。粘土は白色で、大きさは40cm×40cm、厚さは10cmである。

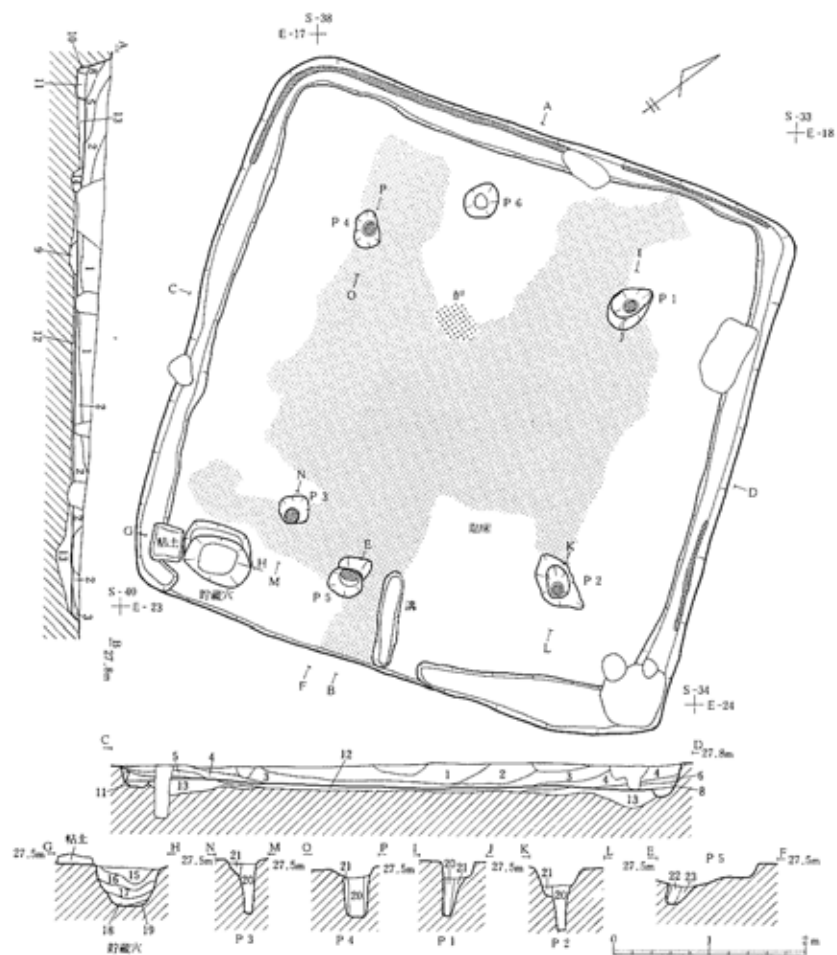
[柱穴] 合計6個のピットが検出された。P1～4は、その位置・形状・規模から主柱穴であると考えられる。いずれの柱穴からも直径約10cmの円形の柱痕跡が検出された。P5はその位置から壁際ピットと考えられる。平面形は35cm×30cmの隅丸長方形で、断面形は住居跡の壁側が緩やかで住居跡中央側が急な変形V字形、床面からの深さは40cmである。材の痕跡は20cm×10cmの長円形で、住居跡の壁側に向かって傾斜している。P6は平面形40cm×35cmの長円形を呈し、深さは25cmである。P5の反対側に位置するが性格は不明である。

[周溝] 南東壁の一部を除いて検出された。幅は20～50cm、深さは約10cmである。また、北西壁と南西壁・北東壁の一部で周溝内の壁側に沿って、幅5～10cmの黒褐色土帯が検出された。

[炉] 住居跡中央やや北西寄りに床面が焼けて赤変している部分が検出された。その範囲は50cm×45cm、不整形である。

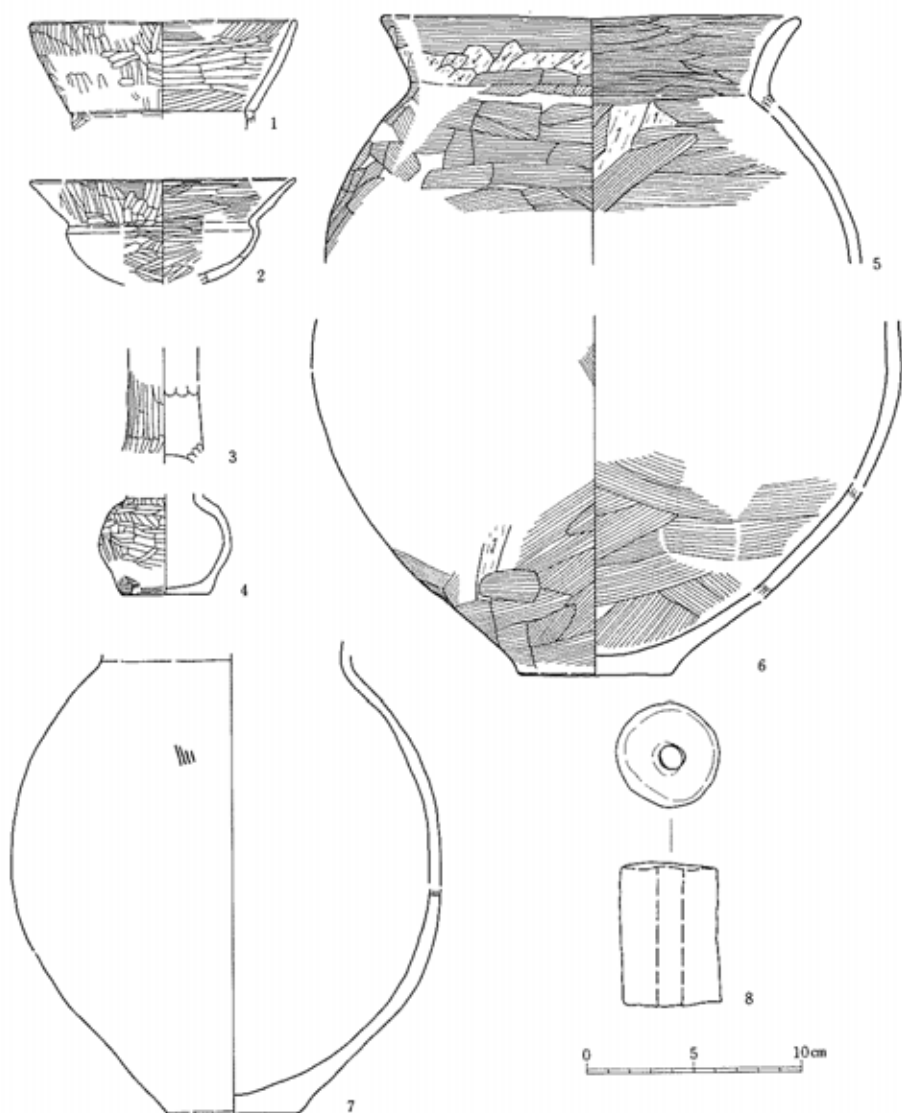
[貯蔵穴] 住居跡の南隅で検出された。平面形は75cm×60cmの長円形であるが、底面では40cm×30cmの長方形を呈する。深さは40cm、北西側に深さ15cmほどの段状に浅い部分が認められる。堆積土は5枚認められ、いずれも自然流入土である。

[その他の施設] 住居跡南東辺中央で壁とほぼ直交する方向の溝跡が検出された。この溝の



No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黄褐色	シルト	自然成土	13	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	住居層の方理土、地山ブロック・黄褐色土ブロックを多量含む
2	10YR2/3 黄褐色	シルト	自然成土	14	10YR2/3 黄褐色	シルト	住居層の方理土、灰化物を含む
3	10YR3/3 黄褐色	シルト	自然成土	15	10YR3/3 黄褐色	シルト	貯蔵穴堆積土、自然成土
4	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	自然成土	16	10YR3/3 黄褐色	シルト	貯蔵穴堆積土、自然成土
5	10YR2/3 黄褐色	シルト	自然成土	17	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	貯蔵穴堆積土、自然成土
6	10YR2/3 黄褐色	シルト	自然成土	18	10YR2/3 黄褐色	粘土質シルト	貯蔵穴堆積土、自然成土
7	10YR2/3 黄褐色	粘土質シルト	自然成土	19	10YR4/1 褐色	シルト	貯蔵穴堆積土、自然成土
8	10YR3/1 黄褐色	シルト	自然成土	20	10YR3/1 黄褐色	シルト	主坑内住居跡
9	10YR3/3 黄褐色	シルト	貯蔵穴土	21	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	主坑内方理土、地山ブロックを多量含む
10	10YR3/3 黄褐色	シルト	黄褐色土層	22	10YR2/3 黄褐色	シルト	P5住居跡
11	10YR4/1 褐色	シルト	黄褐色土	23	10YR4/3 濃い黄褐色	シルト	P5住居層の方理土、地山ブロックを含む、灰化物も若干含む
12	10YR6/6 明黄褐色	粘土	住居層の方理土、固くしまっている				

第42図 22号住居跡



No.	器種別	分類	部位	外	底	底面	内	器	口径	口径	器高	残存率	図版
1	土師器	CⅡ	縁	ヘラシガキ	/	/	ヨコナデヘラシガキ	12.4	/	15.2	1/4		
2	土師器	CⅡ	縁	口縁ヨコナデヘラシガキ、底部ヘラシガキ	/	/	口縁ヨコナデヘラシガキ、底部ヘラシガキ	12.4	/	14.9	1/4		
3	土師器	C	縁	ヘラシガキ	/	/	新部ヘラシガキ	/	/	15.1	新部のみ	29-3	
4	土師器	小形	縁	ヘラシガキ、ヘラナデ	ナデ	ナデ	ユビナデ	4.1	4.1	14.7	底部のみ	29-5	
5	土師器	CⅡT	縁	口縁ヨコナデヘラシガキ、新部ヘラシガキ	/	/	口縁ヘラシガキ、底部ヘラシガキ	13.6	/	13.1	口縁・底部1/2	29-1	
6	土師器	Ⅱ	縁	(ヘラシガキ) ナデ、5と同一個体の可能性あり	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	7.4	13.1	14.1	縁・底部1/2	29-2	
7	土師器	CⅡ	縁	(ヘラシガキ) ナデ、加納産	加納産	加納産	ヘラシガキ、加納産	6.2	12.1	11.3	1/3	29-3	
8	土師		陶片上	直径4.5cm、長さ6.5cm、重さ17g								29-4	

第43図 22号住居跡出土遺物



の長さは1.0m、幅は最大で25cm、深さは4cmである。

[遺物]床面から土師器坏(第43図1・2)・高坏(同3)・小形土器(同4)・甕(同5~7)が出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

#### 【23号住居跡】(第44図)

[位置・確認面] S45~53・E16~24区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模]削平を受けており全体の規模は不明であるが、現状で7.1m×6.7m以上の方形を基調とするものと考えられる。

[堆積土]1枚のみで、自然流入土である。

[壁]残存する部分では地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から10cmである。

[床]掘り方埋土を床としているが、削平を受けており、全体の3分の2ほどしか残っていない。貼床されて硬化している部分が、住居跡中央やや北寄りと西寄りにみられる。

[柱穴]合計5個のピットが検出された。P1~4は、その位置・形状・規模から主柱穴であると考えられる。いずれの柱穴からも直径約15cmの円形の柱痕跡が検出された。P5はその位置から壁際ピットと考えられる。平面形は直径35cmの円形を呈し、削平を受けているため明確ではないが、現状で深さは8cmである。中からは16cm×10cmの長円形の材の痕跡が検出された。

[周溝]残存する壁の直下で検出した。幅は15~30cm、深さは約20cmである。また、北東壁と北西壁で周溝内の壁側に沿って、幅5~15cmの黒褐色土帯が検出された。

[炉]住居跡中央やや北西寄りに床面が焼けて赤変している部分が検出された。その範囲は50cm×40cmのやや不整な円形である。炉に使用されたものかと思われる石が出土している。

[貯蔵穴]住居跡の南東隅付近で検出された。平面形は80cm×50cmの隅丸長方形で、深さは40cmである。堆積土は4枚認められ、いずれも自然流入土である。

[その他の施設]住居跡南東辺中央で溝跡が検出された。この溝の長さは1.5m、幅は最大で15cm、深さは4cmである。

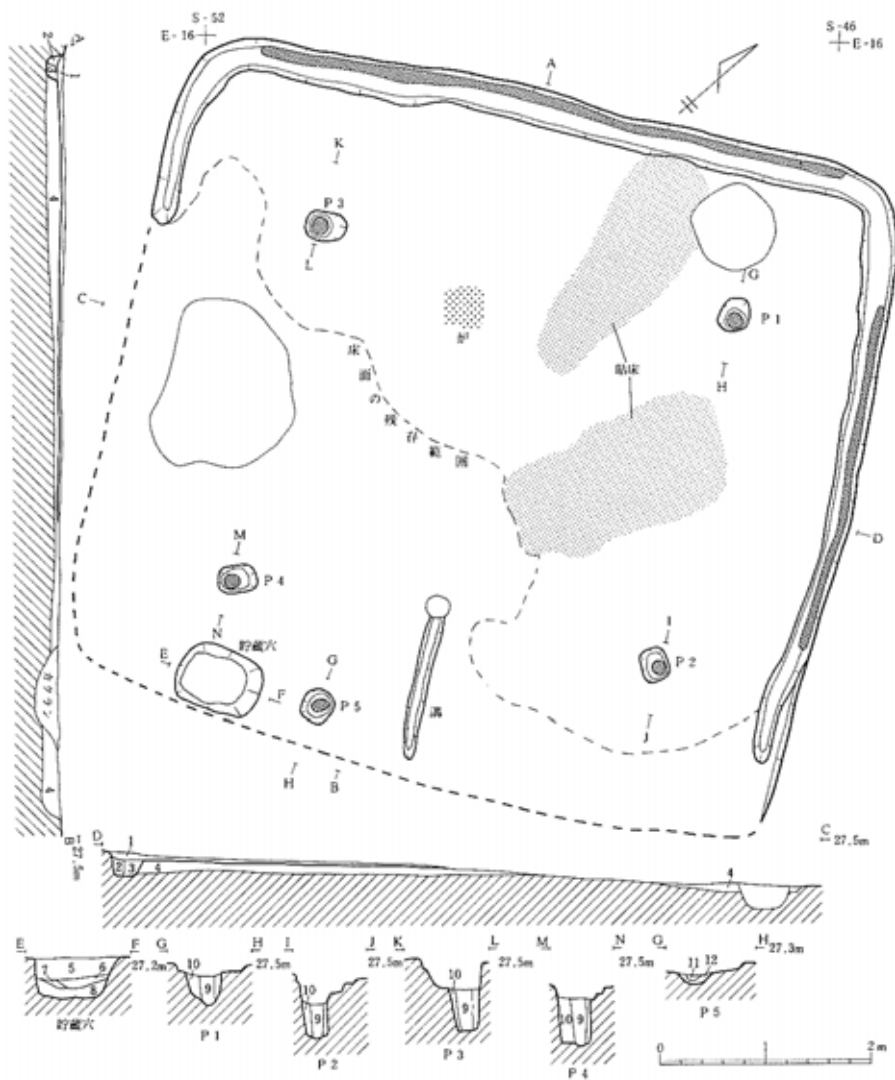
[遺物]土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

#### 【24号住居跡】(第45・46図)

[位置・確認面] S43~48・E27~30区付近で検出した。確認面は 層上面である。

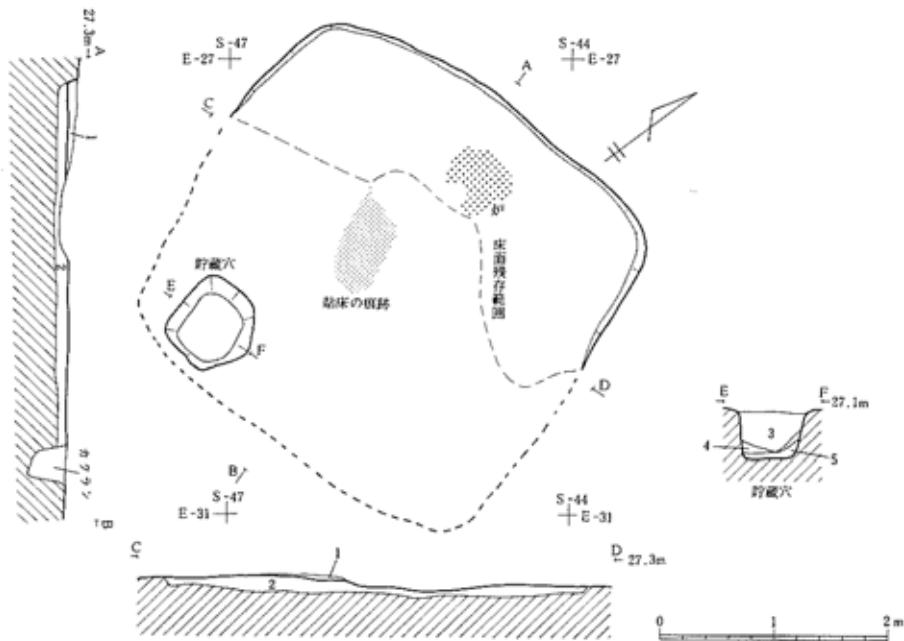
[平面形・規模]削平を受けており全体の規模は不明であるが、現状で3.9m×3.6m以上の方形を基調とするものと考えられる。

[堆積土]1枚のみで、自然流入土である。



No	土色	土性	備考
1	10YR5/4 軽褐色	シルト	自然流入土 地山アロクを含む
2	10YR5/3 軽褐色	シルト	黄褐色土層
3	10YR5/4 軽褐色	粘土質シルト	黄褐色土 地山小アロクを含む 灰化物を含む
4	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	ほぼ縦の方向土 地山アロクを含む 灰化物を少量含む
5	10YR5/2 黄褐色	シルト	貯蔵穴増殖土 自然流入土 地山アロクを含む 灰化物を含む
6	10YR5/2 黄褐色	シルト	貯蔵穴増殖土 自然流入土 灰化物を少量含む
7	10YR5/3 軽褐色	シルト	貯蔵穴増殖土 自然流入土
8	10YR5/4 軽褐色	シルト	貯蔵穴増殖土 自然流入土 地山アロクを含む
9	10YR5/3 軽褐色	シルト	土坑穴柱部
10	10BR4/2 10.0%黄褐色	粘土質シルト	ほぼ縦の方向土 地山アロクを多量含む
11	10YR5/2 黄褐色	粘土質シルト	P5柱部 灰化物を少量含む
12	10BR4/2 10.0%黄褐色	粘土質シルト	P5縦の方向土 地山アロクを含む 灰化物を含む

第44図 23号住居跡



No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 暗褐色	シルト	自然流入土 地山ブロック・積土を含む
2	10YR4/0 褐色	シルト	住居周り方塚土 黒褐色土ブロックを若干含む
3	10YR3/2 暗褐色	シルト	貯蔵穴堆積土 自然流入土
4	10YR5/4 褐色	シルト	貯蔵穴堆積土 自然流入土
5	10YR5/0 黒褐色	シルト	貯蔵穴堆積土 自然流入土

第45図 24号住居跡

[壁]地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から8cmである。

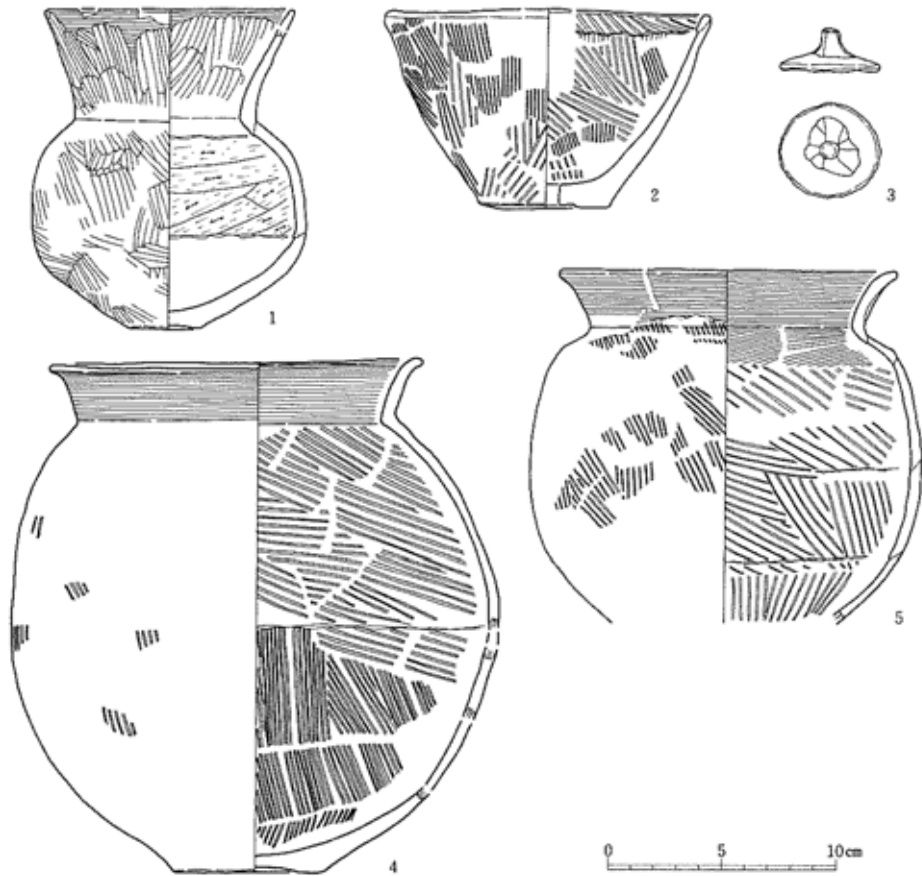
[床]掘り方埋土を床としているが、削平を受けており、全体の3分の1ほどしか残っていない。貼床されて硬化している部分の痕跡が住居跡中央にみられる。

[柱穴]検出されなかった。

[周溝]検出されなかった。

[炉]住居跡中央北寄りに床面が焼けて赤変している部分が検出された。その範囲は50cm×55cmである。炉に使用されたものかと思われる石が出土している。

[貯蔵穴]住居跡の南西隅で検出された。平面形は70cm×55cmの不整な隅丸長方形で、深さは40cmである。堆積土は3枚認められ、いずれも自然流入土である。



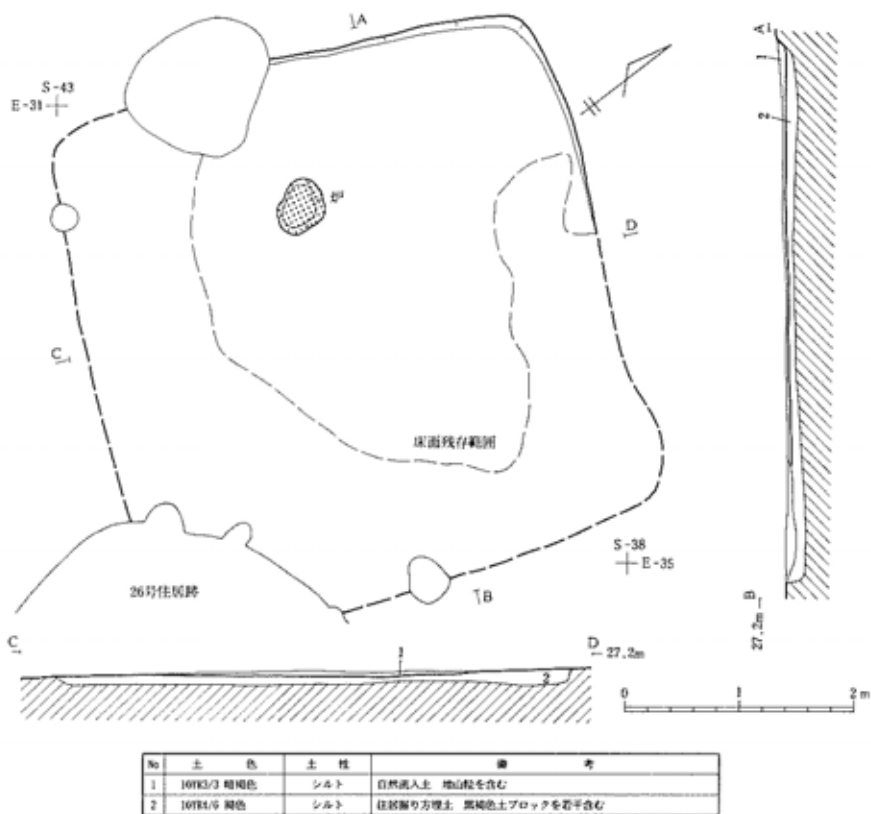
No	品名	分類	部位	外 面	底 面	内 面	口径	口径	高さ	検出率	図面
1	土師器壺	C	体	口縁ヨコナデ〜シガキ、体部シガキ	ナデ	口縁ヨコナデ〜シガキ、体部上ヨコナデ、下ナデ	11.0	3.0	14.2	6/502	38-6
2	土師器鉢		体	ハケメ	1元 (径1.3cm)	貼付痕、ハケメ	14.2	5.6	8.9	6/5	38-4
3	土師器		確認面	ヨビナデ	/	/	径4.4	高さ2.8		1/1	38-1
4	土師器壺	C/B	体	口縁ヨコナデ〜体部ハケメ〜ナデ	ナデ	口縁ヨコナデ、体部ハケメ	16.4	6.5	23.5	3/4	38-2
5	土師器壺	D	体	口縁ヨコナデ〜体部ハケメ〜シガキ、丸足痕	/	口縁ヨコナデ、体部ハケメ	14.8	/	15.0	1/3	38-5

第46図 24号住居跡出土遺物

[遺物]床面から土師器壺（第46図1）・甌（同2）・甕（同4・5）が出土している。また、確認面から土製品（同3）が出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

【25号住居跡】（第47図）

[位置・確認面] S38~43・E30~36区付近で検出した。確認面は 層上面である。



第47図 25号住居跡

[重複]26号住居跡と重複しているが、その前後関係は不明である。

[平面形・規模]削平を受けており全体の規模は不明であるが、現状で4.8m以上×4.6m以上の方形を基調とするものと考えられる。

[堆積土]1枚のみでごく一部に残存している。

[壁]地山を壁としている。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から10cmである。

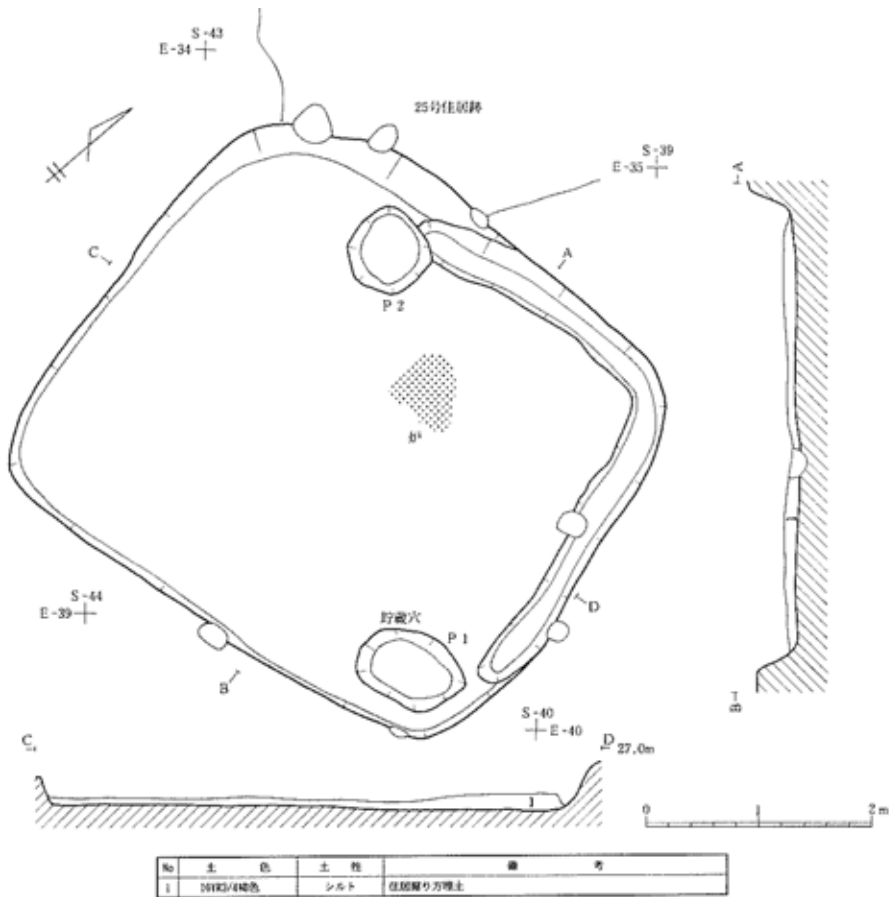
[床]掘り方埋土を床としているが削平を受けており全体の2分の1ほどしか残存していない。

[柱穴]検出されなかった。

[周溝]検出されなかった。

[炉]住居跡中央やや西寄りに、壁と底面が弱く焼けて赤変している皿状の浅い窪みが検出された。範囲は約40cm×約40cm、不整な円形で深さは4cmである。

[遺物]土師器の破片が出土しているが図示できなかった。



第48図 26号住居跡

【26号住居跡】（第48図）

本住居跡は昭和26年に樋口清之氏を中心とする国学院大学のチームによって調査されている住居跡で、住居堆積土中からガラスビンなどが出土しており、住居内の施設および、25号住居跡との関係など不明な点が多い（第1章参照）。

[位置・確認面] S39～45・E35～40区付近で検出した。確認面は層上面である。

[重複]25号住居跡と重複しているが、その前後関係は不明である。

[平面形・規模]4.9m×4.3mの隅丸長方形を呈する。

[堆積土]しまりのない褐色土である。

[壁]地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から30cmである。

[周溝]住居跡の北壁と東壁で検出された。幅は最大 35cm、深さは 8cm である。周溝内の壁側に沿って部分的に黒褐色土帯が認められたが、以前に掘られているため詳細は不明である。

[床]掘り方埋土を床としている。

[柱穴]検出されなかった。

[炉]住居跡中央やや北寄りに床面が焼けて赤変している部分が検出された。その範囲は 60cm × 60cm で、不整形である。

[貯蔵穴] P1・2 の 2 個が検出されている。P1 は住居跡の南東隅で検出された。平面形は 95cm × 65cm の不整な楕円形を呈し、深さは 50cm である。P2 は住居跡の北西隅付近で検出された。平面形は 75cm × 70cm のやや不整な円形を呈し、深さは 20cm である。P2 は 25 号住居跡の貯蔵穴の可能性も考えられる。

[遺物]掘り方埋土から土師器の破片が出土しているが図示できなかった。また、堆積土中からガラスビン、磁器が出土している。

#### 【27 号住居跡】(第 49・50 図)

[位置・確認面] S49～54・E37～43 区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模]削平を受けており全体の規模は不明であるが、現状で 5.9m × 5.7m 以上の方形を基調とするものと考えられる。

[堆積土]1 枚のみで、自然流入土である。

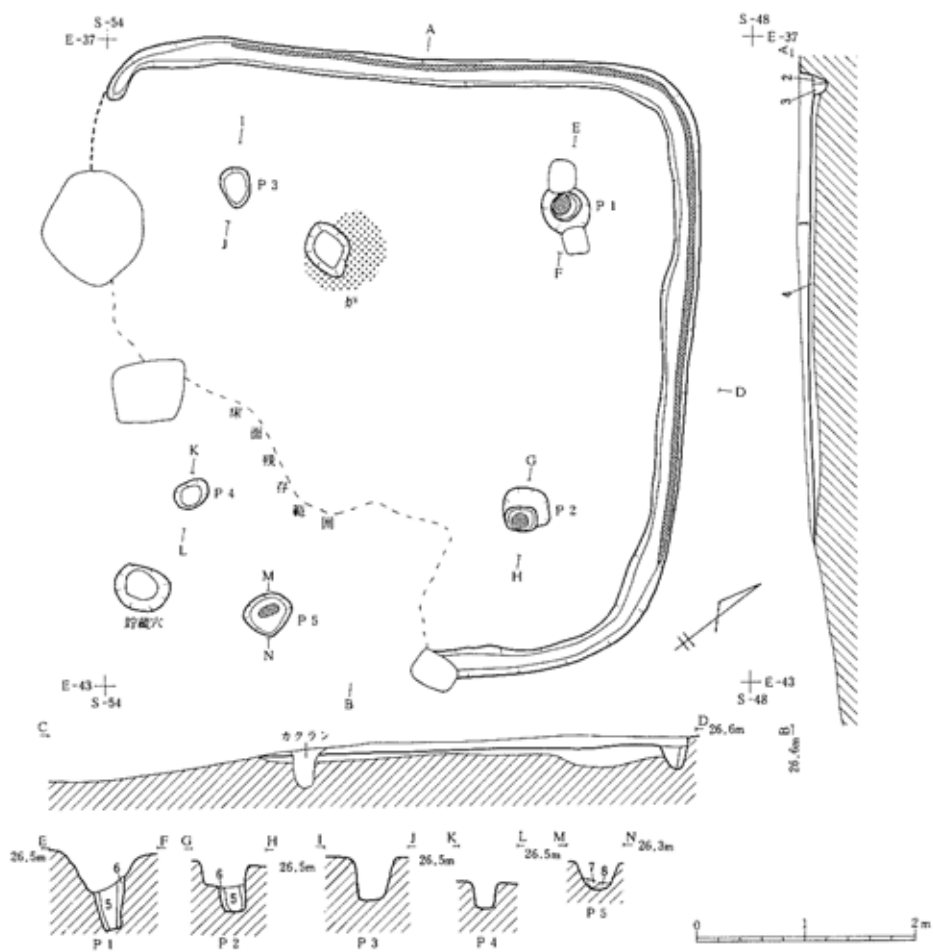
[壁]残存する部分では地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から 15cm である。

[床]掘り方埋土を床としているが、削平を受けており、全体の 4 分の 3 のほどしか残っていない。

[柱穴]合計 5 個のピットが検出された。P1～4 は、その位置・形状・規模から支柱穴と考えられる。P1・2 からは直径約 15cm の円形の柱痕跡が検出された。また、いずれの柱穴にも柱の抜き取り痕がみられる。P5 はその位置と形状から壁際ピットと考えられる。平面形は 45cm × 40cm の不整な円形を呈し、断面形は U 字形、削平を受けているため明確ではないが、現状で深さは約 20cm である。中からは 20cm × 8cm の長円形の材の痕跡が住居の壁側に向かって傾斜して検出されている。

[周溝]残存する壁の直下を全周する。幅は 20～30cm、深さ約 10cm である。また、北壁と西壁で周溝内の壁側に沿って、幅 5～10cm の黒褐色土帯が検出されている。

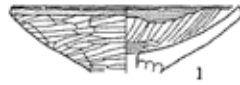
[炉]住居跡中央やや西寄りに床面が焼けて赤変している部分が検出された。その範囲は 75cm × 70cm で、不整な円形を呈する。



No	土 色	土 性	備 考
1	10194/3 灰褐色	シルト	自然成土 地山石を多量含む
2	10192/3 黄褐色	シルト	黄褐色土層
3	10192/3 黄褐色	シルト	黄褐色土 地山石・灰化物を含む
4	10194/6 褐色	シルト	自然成り方理土 地山ブロックを含む 灰化物を若干含む
5	10198/3 灰褐色	シルト	主柱穴柱礎跡
6	10195/4 灰褐色	粘土質シルト	主柱穴掘り方理土
7	10194/4 褐色	粘土質シルト	P5柱礎跡?
8	10194/3 灰褐色	粘土質シルト	P5掘り方理土 地山ブロックを多量含む

第49図 27号住居跡





品名	品種別	出処	単位	材質	産地	用途	口径	底径	器高	残存率	図例
1	土師器器台	周溝埋土		口縁破断ヨコナガ、受部ヘリノギキ		ノコナガヘリノギキ	36.4	ノ	13.8	受部1/2	

第50図 27号住居跡出土遺物

[貯蔵穴] 平面形は50cm×40cmの隅丸長方形で、深さは現状で20cmである。

[遺物] 周溝から土師器器台（第50図1）が出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

【28号住居跡】（第51・52図）

[位置・確認面] S27～33・E37～42区付近で検出した。確認面は層上面である。

[平面形・規模] 4.7m×4.5mの隅丸正方形を呈する。

[堆積土]15枚認められる。11層は焼土層、13、15層は炭化物層で住居廃絶後まもなく廃棄されたものと考えられる。その他の層はいずれも自然流入土である。

[壁]地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から50cmである。

[床]住居跡中央は地山、その縁辺は掘り方埋土を床としている。また、縁辺に近い部分は貼床されて硬化している。

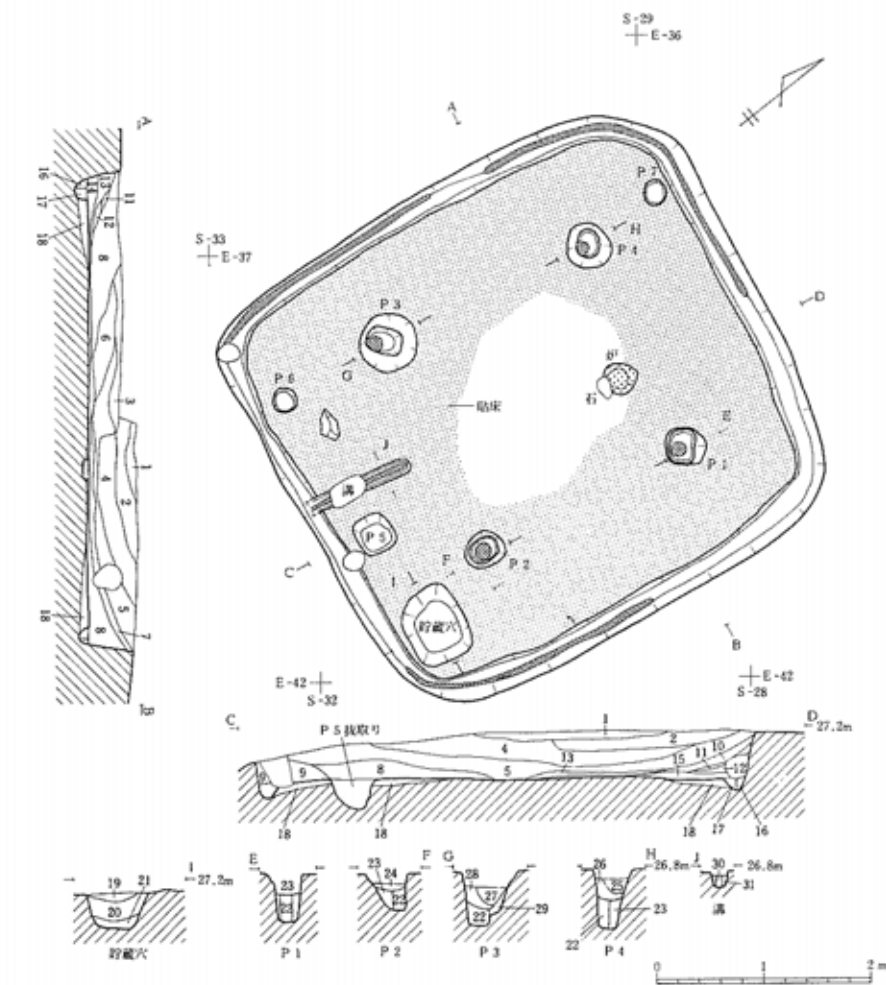
[柱穴]合計7個のピットが検出された。P1～4はその位置・形状・規模から支柱穴と考えられる。いずれの柱穴にも柱の抜き取り痕がみられる。また、いずれの柱穴からも直径約15cmの柱痕跡が認められた。P5はその位置から壁際ピットと考えられる。平面形は35cm×30cmの長方形を呈し、床面からの深さは20cmである。このピットにも支柱穴と同様、材の抜き取り痕が認められた。P6・7は平面形が直径25cmの円形を呈するピットだが材の痕跡もなく床面からの深さが約10cmと浅いため、その性格は不明である。

[周溝]壁の直下を全周する。幅は約20cm、深さは約10cmである。また、北辺・東辺の一部と西辺で周溝内の壁側に沿って、幅5～10cmの黒褐色土帯が検出された。

[炉]住居跡中央やや北寄りに床面が強く焼けて赤変している深さ6cmほどの浅い窪みが検出された。その範囲は30cm×30cm、円形を呈し、周囲から炉に使用されたものかと思われる石が出土している。

[貯蔵穴]住居跡の南東隅で検出された。平面形は70cm×50cmのやや不整な長方形を呈し、深さが45cmである。堆積土は3枚認められ、いずれも自然流入土である。

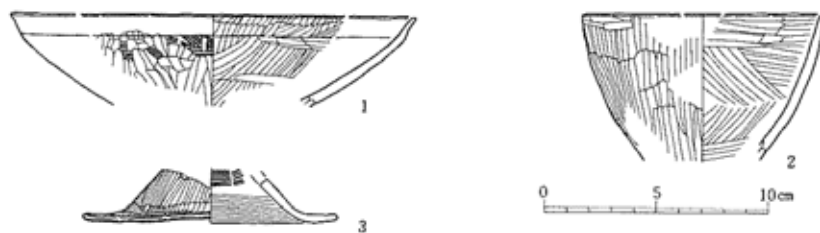
[その他の施設]住居跡の南辺中央で壁と直交する方向の溝跡が検出された。溝の中央に



No.	土色	土性	備考
1	10193/4 黄褐色	シルト	自然流入土
2	10194/4 褐色	シルト	自然流入土 地山粒多含心
3	10193/3 黄褐色	シルト	自然流入土
4	10193/3 黄褐色	シルト	自然流入土 地山粒多含心
5	10193/3 黄褐色	シルト	自然流入土
6	10193/3 黄褐色	シルト	自然流入土 地山アロップ多含心
7	10193/3 黄褐色	粘土質シルト	自然流入土 灰化物多含心
8	10193/3 黄褐色	シルト	自然流入土 地山粒多含心
9	10194/4 褐色	シルト	自然流入土
10	10193/4 灰褐色	シルト	自然流入土
11	10194/4 褐色	シルト	粘土質
12	10194/4 褐色	シルト	自然流入土
13	10192/2 黄色	シルト	自然流入土 灰化物多含心
14	10193/4 黄褐色	シルト	自然流入土 地山粒多含心
15	10192/2 黄色	シルト	自然流入土 灰化物多含心
16	10192/2 黄色	シルト	黄褐色土層

No.	土色	土性	備考
17	10193/4 黄褐色	シルト	黄褐色土 地山粒多含心
18	10193/4 灰褐色	シルト	灰褐色土層上
19	10193/3 黄褐色	シルト	貯蔵穴内層上 自然流入土 地山粒多含心
20	10193/3 黄褐色	シルト	貯蔵穴内層上 自然流入土
21	10193/3 黄褐色	粘土質シルト	貯蔵穴内層上 自然流入土
22	10194/4 褐色	シルト	貯蔵穴内層上
23	10195/5 黄褐色	シルト	貯蔵穴内層上
24	10195/5 黄褐色	シルト	主坑(P.2)内層上
25	10193/3 黄褐色	シルト	主坑(P.4)内層上
26	10195/5 黄褐色	シルト	主坑(P.4)内層上
27	10193/3 黄褐色	シルト	主坑(P.3)内層上
28	10195/5 黄褐色	粘土質シルト	主坑(P.3)内層上
29	10194/4 褐色	粘土質シルト	主坑(P.2)掘り方層上
30	10193/3 黄褐色	シルト	黄褐色土層
31	10194/4 褐色	粘土質シルト	黄褐色土層

第51図 28号住居跡



No.	器種別	分類	部位	外	底	内	面	口径	底径	器高	残存率	図例
1	土師器高坏?	深		ハマノヘヘラミダキ	/	ヘラミダキ		18.2	/	(4.2)	縁部のみ	
2	土師器壺	C	2輪	ヘラミダキ	/	ヘラミダキ		15.8	/	(6.1)	口縁部のみ	
3	土師器部位?	2輪		ヘラミダキ	(内底2箇所のみ)	ハマメ、ヨコナダ	/	14.4	位41		縁部の1/6以下	

第52図 28号住居跡出土遺物

は黒褐色土帯が認められ、長さは95cm、幅は最大で10cm、深さは15cmである。また、この溝は周溝と重複し、これよりも新しい。

[遺物]床面から土師器高坏ないし器台と考えられるもの(第52図3)が、堆積土中から土師器高坏と考えられるもの(同1)・壺(同2)が出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかつた。

【29号住居跡】(第53・54図)

[位置・確認面] S19~24・E42~47区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[重複]30・31号住居跡と重複し、これらより古い。

[平面形・規模]4.0m×4.0mの隅丸正方形を呈する。

[堆積土]3枚認められ、いずれも自然流入土である。

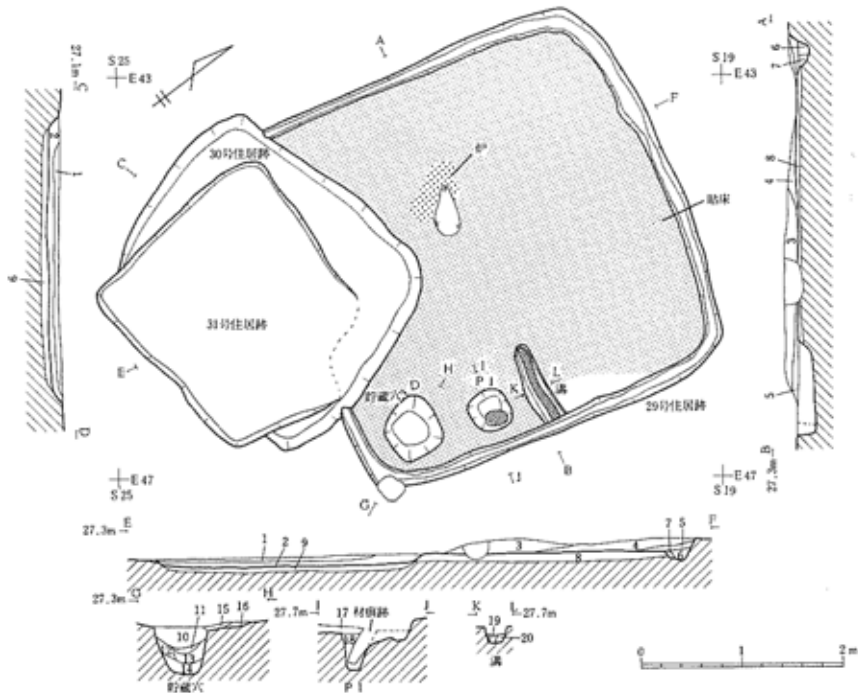
[壁]残存する部分では地山を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から20cmである。

[床]掘り方埋土を床としている。ほぼ全面に貼床されているが、溝跡の北側に貼床されていない部分がある。

[柱穴]検出されたピットはP1のみで、その位置から壁際ピットと考えられる。平面形は40cm×35cmの隅丸長方形を呈し、断面形は住居跡の壁側が緩やかで、住居跡中央側が急に立ち上がる変形V字形を呈する。床面からの深さは45cmである。中からは22cm×14cmの長円形の材の痕跡が、住居の壁側に向かって傾斜して検出されている。なお、主柱穴と思われるピットは検出されなかつた。

[周溝]残存する壁の直下を全周する。幅は15~20cm、深さは約10cmである。

[炉]住居跡中央やや西寄りに床面が強く焼けて赤変している部分が検出された。その範囲



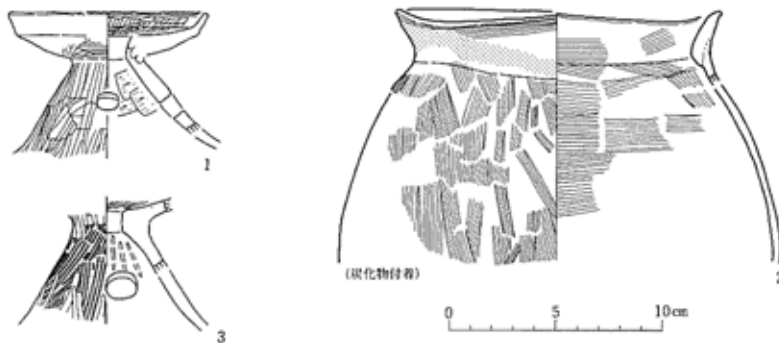
No.	土色	土質	備考	No.	土色	土質	備考
1	10YR3/2 黄褐色	シルト	29号住居跡の埋土・焼土層を含む	11	10YR3/2 黄褐色	シルト	貯蔵穴埋土・焼土層
2	10YR3/2 黄褐色	シルト	自然流入土・29号住居跡土・地山ブロック・炭化物を含む	12	10YR3/2 黄褐色	シルト	貯蔵穴埋土・焼土層
3	10YR3/2 黄褐色	シルト	自然流入土・29号住居跡土・地山ブロックを含む	13	10YR3/2 黄褐色	シルト	貯蔵穴埋土・焼土層
4	10YR3/2 黄褐色	シルト	自然流入土・29号住居跡土・地山ブロック・炭化物を含む	14	2.5B/2 黄褐色	シルト	貯蔵穴埋土・自然流入土・炭化物を含む
5	10YR3/2 黄褐色	シルト	自然流入土・29号住居跡土・地山ブロック・炭化物を含む	15	2.5B/2 黄褐色	砂	性状不明・炭化物を含む
6	10YR3/2 黄褐色	シルト	29号住居跡埋土層?	16	10YR3/2 黄褐色	シルト	性状不明・地山土・炭化物を含む
7	10YR3/2 黄褐色	シルト	29号住居跡埋土層・地山ブロックを含む	17	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	粘床
8	10YR3/2 黄褐色	シルト	29号住居跡埋土層・地山ブロックを多数含む	18	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	29号住居跡埋土・地山ブロックを多数含む
9	10YR3/2 黄褐色	シルト	29号住居跡埋土層・地山ブロックを多数含む	19	10YR3/2 黄褐色	シルト	黄褐色土層
10	10YR3/2 黄褐色	シルト	貯蔵穴埋土・自然流入土・地山ブロックを含む	20	10YR3/2 黄褐色	シルト	埋土・地山ブロックを多数含む

第53図 29・30・31号住居跡

囲は60cm×50cmで、不整形を呈する。

[貯蔵穴]住居跡の南東隅で検出された。平面形は60cm×60cmのやや不整な正方形を呈し、床面からの深さは50cmである。堆積土は5枚認められ、10層が自然流入土、11層が焼土層、12・13層が壁の崩落土、14層が住居機能時に堆積したものと考えられる。

[その他の施設]住居跡の東辺中央で壁と直交する方向の溝跡が検出された。溝の中央には黒褐色土帯が認められ、長さは80cm、幅は最大で8cm、深さは8cmである。また、この溝は周溝と重複するが、その前後関係は不明である。



No	器種別	分類	層位	外 面	底 面	内 面	口縁	底径	高 径	残 存 率	図版
1	土師器器台	非 漆		受胎ヘラミダリ、厚底、脚部ヘラミダリ	(脚部内面3面)	受胎ヘラミダリ、脚部ヘラミダリ	3.4	15.3	3.0		31-4
2	土師器甕	CⅡ	貯蔵穴埋土	白緑ヨコナガ、炭化物付着、底部ヘラナダ	/	ヘラナダ	15.2	41.7	口縁の1/2		31-5
3	土師器器台	確認品		ハケミヘラミダリ	(脚部内面3面)	受胎ナダ、脚部ヘラナダナダ	/	15.2	脚部の1/2		31-3

第54図 29号住居跡出土遺物

[遺物]床面から土師器器台（第54図1）が、貯蔵穴から甕（同2）が出土している。また、確認面からは器台（同3）が出土している。その他に土師器の破片が出土しているが図示できなかつた。

【30号住居跡】（第53図）

[位置・確認面] S22～25・E43～47区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[重複]29・31号住居跡と重複し、31号住居跡より古く、29号住居跡より新しい。

[平面形・規模]2.5m×2.3mの隅丸正方形を呈する。

[堆積土]1枚のみで、自然流入土である、

[壁]地山および29号住居跡の掘り方埋土および堆積土を壁としている。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から10cmである。

[床]掘り方埋土を床としている。

[柱穴]検出されなかつた。

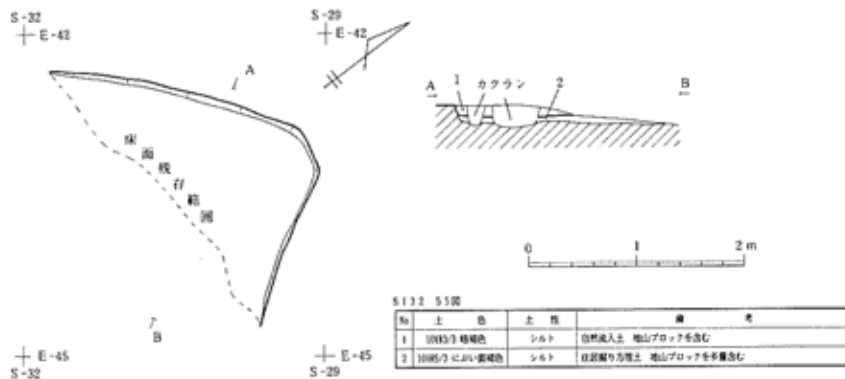
[遺物]掘り方埋土中から土師器の破片が若干出土しているが、図示できなかつた。

【31号住居跡】（第53図）

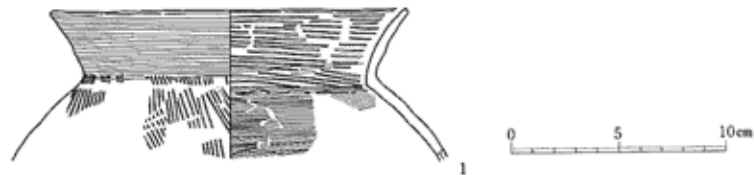
[位置・確認面] S23～25・E43～47区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[重複]29・30号住居跡と重複し、これらより新しい。

[平面形・規模]削平を受けているため全体の規模は不明だが、現状で2.2m×2.1m以上の



第55図 32号住居跡



No	品種別	分類	部位	内	品	数量	内	品	口径	底径	高さ	保存率	図取
1	土師器類		灰層土	口縁ココナダ、鉢部ハケメ		1		口縁ハケメーココナダ	15.4	7	16.5	口縁のみ/3	

第56図 32号住居跡出土遺物

方形を基調とするものと考えられる。

[堆積土]掘り方埋土のみ残存する。

[壁]残存していない。

[床]残存する掘り方埋土の上面が床面である可能性があるが、堆積土が残存していないため不明である。

[柱穴]検出されなかった。

[遺物]掘り方埋土中から土師器の破片が若干出土しているが図示できなかった。

【32号住居跡】（第55・56図）

[位置・確認面] S29～31・E42～45区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模]大幅に削平を受けているため北東コーナーを検出したのみである。現状で2.4m以上×1.8m以上の方形を基調とするものと考えられる。

[堆積土]1枚のみで、自然流入土である。

[壁]地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から10cmである。

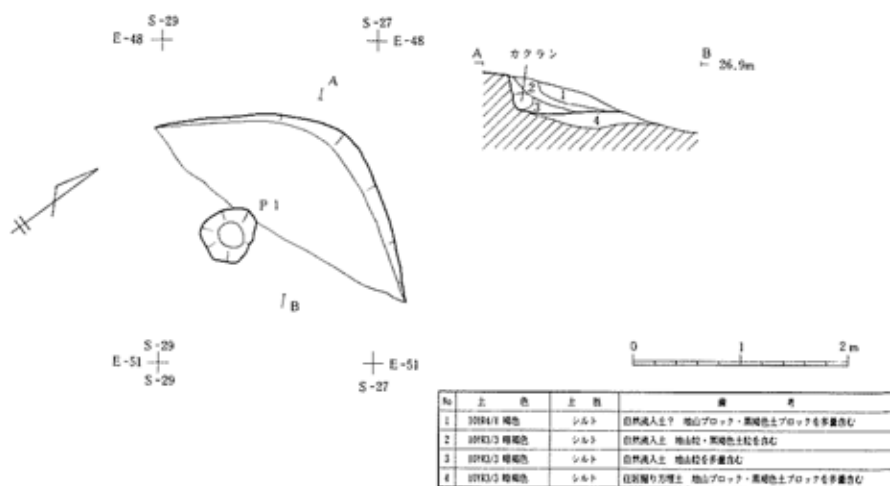
[床]掘り方埋土を床としている。

[遺物]堆積土中から土師器甕(第56図1)が出土している。

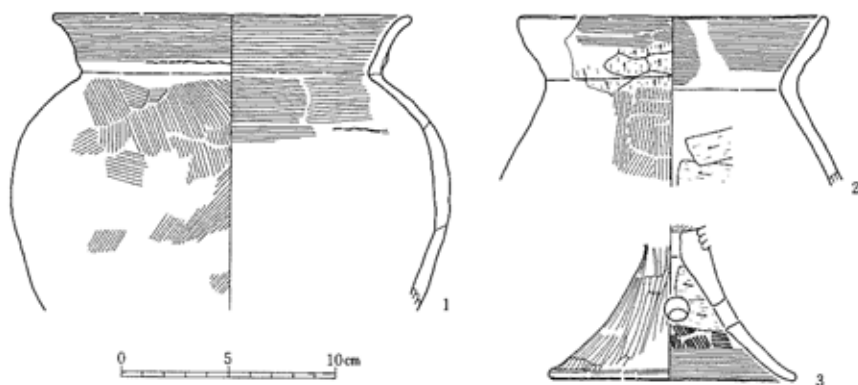
【33号住居跡】(第57・58図)

[位置・確認面] S27~29・E49~50区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模]大幅に削平を受けているため北西コーナーを検出したのみである。現状で



第57図 33号住居跡



No	器種別	分類	部位	外面	底面	内面	口径	底径	器高	残存率	図例	
1	土師器甕	D	胴・頸	口縁ヨコナデ、胴部ナデ、加熱痕	/	口縁ヨコナデ、胴部ナデ、加熱痕	16.8	13.7	23	23	胴部の1/3	31-1
2	土師器甕		頸	ヘラツグリーナデ	/	口縁ナデ、胴部ヘラツグリーナデ	14.4	13.4	10	10	口縁の1/2	
3	土師器甕		頸	ヘラツグリーナデ	加熱痕(逆V字状)	受取ノボテ、胴部ヘラツグリーナデ、ヨコナデ	11.5	13.2	10	10	胴部の1/2	31-6

第58図 33号住居跡出土遺物

1.8m以上×1.6m以上の方形を基調とするものと考えられる。

[堆積土]3枚認められ、いずれも自然流入土である。

[壁]地山を壁としており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高はもっとも残りのよい部分で床面から40cmである。

[床]掘り方埋土を床としている。

[柱穴]検出されたピットはP1のみで、その位置・形状・規模から支柱穴の柱抜き取り痕と考えられる。深さは40cmである。

[遺物]P1から土師器甕(第58図1)が、堆積土中から甕(同2)、器台(同3)が出土している。この他にも土師器の破片が出土しているが図示できなかった。

【34号住居跡】(第59図)

[位置・確認面] S34~39・E54~58区付近で検出した。確認面は層上面である。

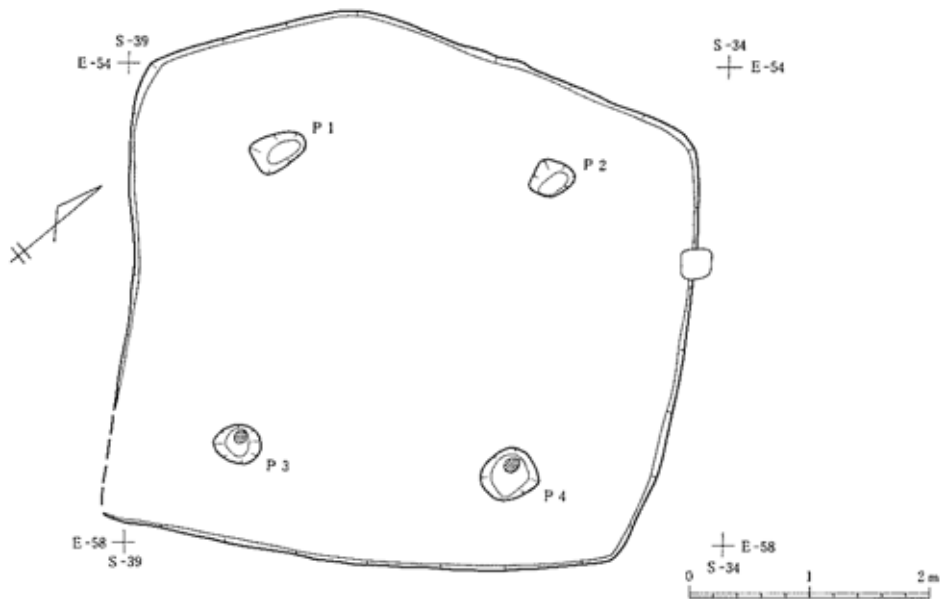
[重複]31号土壇と重複し、これより新しい。

[平面形・規模]削平を受けているため全体の規模は不明だが、現状で4.6m以上×4.6m以上の方形を基調とするものと考えられる。

[堆積土]掘り方埋土のみ残存する。

[壁]残存していない。

[床]残存する掘り方埋土の上面が床面である可能性があるが、堆積土が残存していないた



第59図 34号住居跡



め不明である。

[柱穴] 検出された P1~4 は、その位置・形状・規模から支柱穴と考えられる。掘り方底面からの深さは、P1 が 55cm、P2 が 50cm、P3 が 35cm、P4 が 47cm である。また、P3・4 からは直径 12cm の円形の柱痕跡が検出された。

[遺物] 掘り方埋土中から土師器の破片が若干出土しているが図示できなかった。

【35号住居跡】（第60図）

[位置・確認面] S42~45・E57~60 区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模] 大幅に削平を受けているため北コーナーを検出したのみである。現状で 2.6m 以上 × 1.6m 以上の方形を基調とするものと考えられる。

[堆積土] 1 枚のみで、自然流入土である。

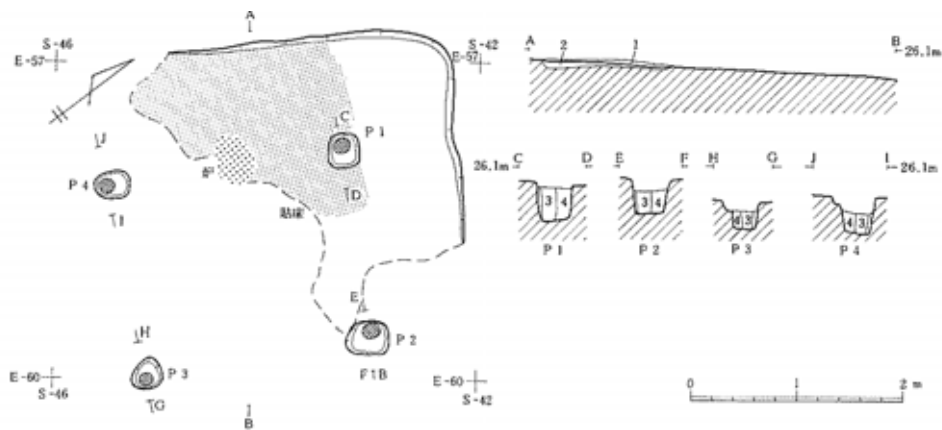
[壁] 地山を壁としている。壁高はもともと残りのよい部分で床面から 6cm である。

[床] 掘り方埋土を床としている。北西辺に貼床されて硬化している部分がある。

[柱穴] 検出された P1~4 は、その位置・形状・規模から支柱穴と考えられる。また、いずれの柱穴からも直径約 15cm の円形の柱痕跡が検出された。

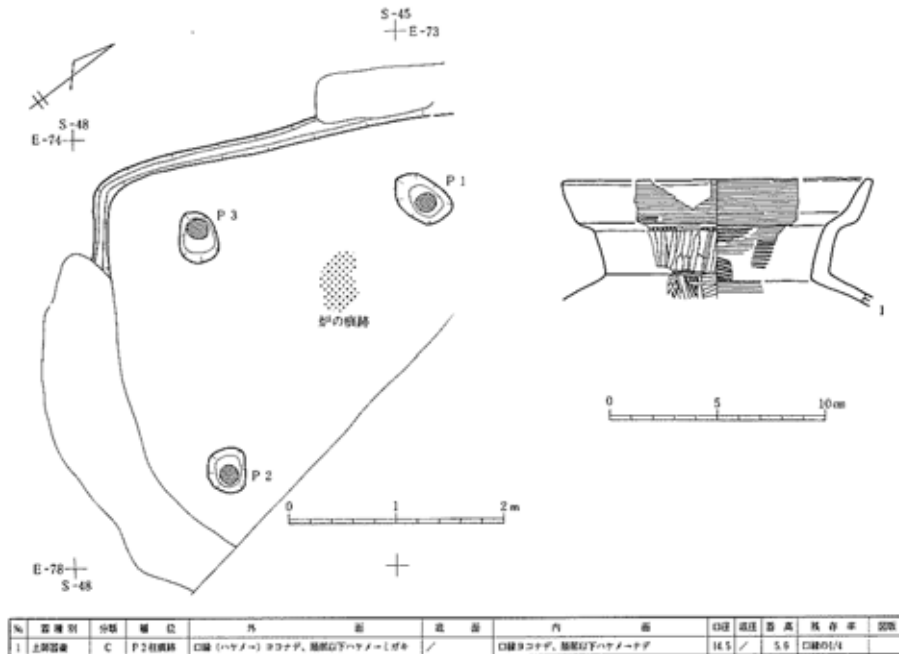
[炉] 住居跡やや西寄りに床面が強く焼けて赤変している深さ 7cm ほどの浅い窪みが検出された。その範囲は 50cm × 40cm の不整な円形を呈する。

[遺物] 掘り方埋土中から土師器の破片が若干出土しているが図示できなかった。



No	土色	土性	備考
1	10FK3/3 緑褐色	シルト	自然流入土 地山粒・炭化物を含む
2	10FK4/4 褐色	シルト	住居掘り方埋土 地山アロク・炭化物を含む
3	10FK3/3 緑褐色	シルト	支柱穴柱痕跡
4	10FK4/4 褐色	シルト	支柱穴掘り方埋土 地山アロク・炭化物を含む

第60図 35号住居跡



第61図 36号住居跡および出土遺物

【36号住居跡】(第61図)

[位置・確認面] S45～48・E74～77区付近で検出した。確認面は 層上面である。

[平面形・規模]大幅に削平を受けているため南西コーナーを検出したのみである。現状で3.2m以上×0.8m以上の方形を基調とするものと考えられる。

[壁]残存していない。

[床]残存していない。

[柱穴]検出されたP1～3は、その位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。現状での深さはP1が41cm、P2が38cm、P3が41cmである。また、いずれの柱穴からも直径約15cmの円形の柱痕跡が検出された。

「周溝」住居跡の北西辺と南西辺に周溝が検出された。幅は最大で20cm、深さは4cmである。

[炉]住居跡やや西寄りに 層が焼けて赤変している部分が検出された。その範囲は60cm×40cmの不整形を呈する。状況からみて炉であると考えられるが、削平を受けているため、わずかに痕跡が確認できる程度である。

[遺物]P2の柱痕跡から土師器壺(第61図1)が出土している。

## 2. 土壌と出土遺物(第3、第62~71図)

層上面で、51基検出された。分布状況は遺構配図(第3図)に示したとおりである。以下、精査した土壌について形態的な分類を行ない、その後分類ごとに個別に説明を加えていく。なお、土壌全体の形態・規模・分類・出土遺物などについては第4表にまとめた。

第4表 土壌集計表

No	口径×底径	深さ(cm)	平面形	断面形	底面ピット(規模・深さcm)	遺分	出土遺物	備考	本文中の表記
1	180以上×60	28	長方形			3	石製標高品3点	18号住居に埋される	①類
2	355×50	74	長楕円形			2			②類
3	118×106、126×124	114	円形	台形状	有(24×24cm、20cm)不整形円形		1EAb		③類
4	132×124、130×136	60	円形	方形状			1EAb		③類
5	170×106、106×162	60	円形	方形状	有(27×22cm、15cm)楕円形		1EAb		③類
6	154×134、144×128	104	円形	方形状			1EAb		③類
7	128×126、120×116	82	円形	方形状	有(28×24cm、20cm)不整形円形		1EAb		③類
8	174×160、212×206	90	円形	フラスタ状			1EAb		③類
9	188×186、205×200	109	円形	台形状	有(46×46cm、25cm)不整形円形		1EAb	底面に計3個の小ピット	③類
10	145×120以上120×105以上	128	円形	方形状	有(16×16cm、25cm)円形	有・2点	1EAb		③類
11	135×132、126×168	103	円形	方形状	有(23×23cm、17cm)円形		1EAb	縄文土器若干	③類
12	140×149、150×130	115	不整形円形	台形状	有(20×25cm、20cm)円形	有・4点	1EAb	縄文土器若干	33号土壌を埋す
13	133×105以上149以上×130	85	円形	フラスタ状			1EAb	縄文土器若干	12号土壌に埋される
14	196×124、108×160	55	楕円形	台形状	有(20×20cm、30cm)円形	有・4点	1EAb	縄文土器若干	15号土壌を埋す
15	145×80以上、145×80以上	102	円形	台形状	有(20×20cm、30cm)円形		1EAb	縄文土器若干	14号土壌に埋される
16	140×140、145×140	115	円形	台形状	有(20×20cm、18cm)円形	有・4点	1EAb	縄文土器若干 石楕	③類
17	158×	120	円形	台形状	有(20×20cm、16cm)円形		1EAb		③類
18	196×160、182×150	125	楕円形	方形状	有(46×46cm、28cm)不整形円形	有・4点	1EAb	縄文土器若干	③類
19	147×124、140×126	60	不整形円形	方形状	有(20×20cm、20cm)円形	有・4点	1EAb	縄文土器若干	③類
20	140×140、150×140	97	円形	台形状	有(20×20cm、35cm)円形	有・4点	1EAb	縄文土器若干 石楕	3号住居に埋される
21	148×120、168×150	114	円形	台形状			1EAb	縄文土器若干	22号土壌を埋す
22	195×135、197×192	103	円形	台形状	有(20×20cm、20cm)円形	有・4点	1EAb		21号土壌に埋される
23	140×132、168×166	84	円形	フラスタ状			1EAb		③類
24	154×154、135×130	64	円形	方形状	有(46×38cm、6cm)円形	有・6点	1EAb		③類
25	187×174、185×164	84	円形	方形状			1EAb		③類
26	150×152、170×166	89	円形	台形状	有(22×22cm、16cm)円形		1EAb	底面に計4個の小ピット	③類
27	180×172、190×170	60	円形	台形状	有(26×26cm、18cm)円形		1EAb	縄文土器若干	③類
28	176×168、192×182	130	不整形円形	台形状	有(25×25cm、25cm)円形		1EAb	底面に計7個の小ピット	③類
29	147×136、138×125	38	円形	方形状			1EAb		③類
30	145×123、130×95	79	楕円形	方形状			1EAb		③類
31	92×85、205×190	130	円形	フラスタ状			1EAb	34号住居に埋される	③類
32	195×160、222×220	66	円形	フラスタ状			1EAb		③類
33	156×150、160×140	46	円形	フラスタ状			1EAb		③類
34	100×96、100×100	62	円形	フラスタ状			1EAb		③類
35	164×90、206×195	75	円形	フラスタ状			1EAb		③類
36	127×87以上、180×80以上	76	楕円形	フラスタ状			1EAb		③類
37	148×138、212×204	108	不整形円形	フラスタ状			1EAb		③類
38	100×85、190×180	84	円形	フラスタ状			1EAb		③類
39	155×150、180×155	21	円形	フラスタ状			1EAb		③類
40	80×60、120×150以上	80	円形	フラスタ状			1EAb		③類
41	139×84以上、100×84以上	10	円形	方形状?			1EAb	近接層に埋される	③類
42	92×90、204×202	88	円形	フラスタ状			1EAb		③類
43	126×140以上236×140以上	160	不整形円形	フラスタ状			1EAb	縄文土器若干	44号土壌に埋される
44	214以上×164、216以上×220	99	楕円形	フラスタ状			1EAb		43号土壌を埋す
45	114×108、172×160	60	円形	フラスタ状			1EAb		③類
46	135×120、228×212	79	円形	フラスタ状			1EAb		③類
47	134×105、178×170	55	楕円形	フラスタ状			1EAb		③類
48	120×100、202×190	60	楕円形	フラスタ状			1EAb		③類
49	251×210、286×270	90	円形	フラスタ状			1EAb	近接層に埋される	③類
50	165×135以上240×170以上	76	円形	フラスタ状			1EAb	近接層に埋される	③類
51	160×110	20	不整形円形	方形状		6		3号住居に埋される	③類

## [土壌の形態分類]

検出した土壌について、まず平面形から大別を行ない、その中で大半を占める1類について断面形、底面のピットおよび溝跡の有無から分類を行なう。

### 平面形

1類：円形を基調とするもの

2類：長楕円形を呈するもの

3類：方形を呈するもの

4類：不整形を呈するもの

### 断面形

類：フラスコ状を呈するもの

類：台形状もしくは方形状を呈するもの

### ピットの有無

A類：底面ほぼ中央にピットのあるもの

B類：底面にピットのないもの

### 溝跡の有無

a類：底面に溝跡のあるもの

b類：底面に溝跡のないもの

以上の属性により分類すると、1 B b類・1 B b類・1 A a類・1 A b類・2類・3類・4類の7類が今回の調査で検出されている。ここで、これらをこの順に 類・類・類・類・類・類として、以下、各土壌群について説明を加える。

## 【類】

平面形は円形を基調としたもので、断面形がいわゆるフラスコ状を呈し、底面にピット・溝跡のないものである。今回検出された中で最も多い割合を占めており、22基認められる。8号および13号土壌以外は、調査区南側斜面付近に群集して分布している。規模は最大が49号土壌で口径251cm×210cm、底径286cm×270cm、最小が40号土壌の口径60cm×60cm、底径150cm以上×120cmである。深さは31号土壌の130cmが最も深い。堆積土はすべて自然流入土と考えられる。

遺物は、13・43号土壌から縄文土器片が若干数出土しているのみである。

この分類に属する土壌は、いわゆるフラスコ状土壌と呼ばれているものであり、七ヶ宿町小梁川遺跡（真山・村田ほか：1987）、岩手県上里遺跡（高橋：1983）など県内外の多数の遺構で検出されている。フラスコ状土壌は本来、形態の斉一性が強く、群集する傾向にある。

これらの土壌の機能については、植物質食料の貯蔵施設としての機能を持つと考えているものが多く（永瀬：1982ほか）、小梁川遺跡などのようにクルミの殻、トチの実などの植物質食料が出土している例もある。今回の調査ではそのような植物質食料は出土しなかったが、その形態・分布状況などに他遺跡との類似性がみられ、本遺跡の土壌についても同様の機能をもつものと考えられる。

#### 【 類】

平面形は円形を基調としたもので、断面形が台形状もしくは方形状を呈し、底面にピット・溝跡のないものである。8基検出された。規模は最大が25号土壌で口径197cm×174cm、底径185cm×164cm、最小が30号土壌の口径130cm×120cm、底径130cm×95cmである。深さは21号土壌の114cmが最も深い。堆積土はすべて自然流入土である。

遺物は、21号土壌から縄文土器片が若干数出土しているのみである。

この土壌については、本来フラスコ状土壌であったものの上端部が崩落し、このような断面形を呈するものが含まれている可能性がある。ほかの土壌の検出状況からみて、類と同様貯蔵穴の機能をもつものと考えたいが、詳細は不明である。

#### 【 類】

平面形は円形を基調としたもので、断面形が台形状もしくは方形状を呈し、底面にピット・溝跡の両者をもつものである。9基検出されており、ほぼS2～20・W27～43区付近に群集して分布している。規模は最大が22号土壌で口径195cm×155以上cm、底径197cm×192cm、最小が24号土壌の口径154cm×154cm、底径135cm×130cmである。深さは18号土壌の135cmが最も深い。底面中央のピットは径15～40cm、深さ6～35cmのほぼ円形を呈する。その中には柱痕跡は認められない。溝跡は底面中央のピットから放射状に2～6条（第4表参照）延びており、口径4～10cm、深さ5cm程度である。土壌堆積土はすべて自然流入土、底面のピットおよび溝跡の堆積土も自然流入土であると考えられる。

遺物は12・14・18・20号土壌から縄文土器片若干数、16号土壌から縄文土器深鉢（第71図2・5）・石棒（第71図7）、19号土壌から縄文土器深鉢（第71図4）が出土している。

このような底面にピット・溝跡のある土壌は、県内では利府町郷楽遺跡101・106号土壌（菊地・庄子ほか：1990）に検出例がみられるのみである。この郷楽遺跡の土壌は、ピットから放射状に延びる溝跡のほかに、土壌底面壁際にも周溝状に溝が巡っているもので、本遺跡の土壌とは若干様相を異にする。また、県外では山形県遊佐町吹浦遺跡（渋谷・黒坂：1988）で、本遺跡と同様にピットから溝跡が放射状に延びるものが検出されている。

なお、底面のピットおよび溝跡の機能について、利府町郷楽遺跡では「底面のピットや溝等の機能については堆積土からは不明であった」とし、それ以上の考察は行っていない。

い。本遺跡の土壌のピット・溝跡も、郷楽遺跡と同様堆積土が自然流入土と考えられるものであり、その機能は不明である。この土壌の機能については、郷楽遺跡、吹浦遺跡両者とも貯蔵穴と考えられており、本遺跡の土壌についても、その形態的特徴の類似性から同様の機能をもつものと考えたい。

#### 【 類】

平面形は円形を基調としたもので、断面形が台形状もしくは方形状を呈し、底面にピットのみをもつものである。10 基検出された。規模は最大が 9 号土壌で口径 188cm × 186cm 以上、底径 205cm × 200cm、最小が 7 号土壌の口径 128 cm × 126cm、底径 120cm × 110cm である。深さは 9 号土壌の 160cm が最も深い。土壌堆積土はすべて自然流入土である。底面中央のピットは径 20 ~ 45cm、深さ 10 ~ 30cm のほぼ円形を呈する。柱痕跡は認められず、その堆積土は自然流入土と考えられる。また、9・26・28 号土壌では底面中央のピットのほかに、9 号土壌では底面北寄りに 3 個、26 号土壌では対角線上に 4 個、28 号土壌では底面壁際に並ぶように 7 個の小ピットが検出された。小ピットの平面形はほぼ円形を呈し、径は 8 ~ 16cm、深さは 8 ~ 23cm である。堆積土は自然流入土で柱痕跡は認められなかった。なお、26・28 号土壌の小ピットは、すべて中央に向かって傾斜している。

遺物は 27 号土壌から縄文土器片が若干数、11 号土壌から縄文土器深鉢(第 71 図 1)、15 号土壌から縄文土器深鉢(第 71 図 3・6)が出土している。

このように底面に 1 個ないし数個のピットがある土壌は、仙台市山田上ノ台遺跡(主浜光朗:1987)、七ヶ宿町小梁川遺跡(前出)、岩手県五庵 遺跡(石川・渡辺:1987)、青森県鴨平遺跡(北林:1983)など県内外の多数の遺跡で検出されている。

これらの土壌の機能については、底面にピットがあることから考えると、貯蔵穴(山田上ノ台遺跡、小梁川遺跡、鴨平遺跡などに類例)、陥し穴(五庵 I 遺跡、鴨原遺跡などに類例)両者の可能性が考えられる。しかし、その断面形を考慮すれば、検出時には台形状・方形状の断面形を呈していたものの、断面形・堆積土の状況から本来フラスコ状の断面形を呈していた可能性が強い。このことを踏まえると、仙台市山田上ノ台遺跡、七ヶ宿小梁川遺跡などにみられる、フラスコ状土壌の底面にピットのあるものにより多くの類似点が見出せる。よって、この分類に属する土壌についても貯蔵穴と考えるのが妥当であろう。なお、山田上ノ台遺跡では底面のピットについて、「柱穴と考えられ、上屋構造をもつものと考えられている」ものがあるとしている。しかし、本遺跡のピットの堆積土は自然流入土と考えられるもので、このピットを柱穴とする確証は得られなかった。あるいは杭跡の可能性も考えられるがその確証もなく、これらピットの機能は不明である。

これら 1 類に属する土壌の年代については、土壌底面からの出土遺物はなく、堆積土出

土遺物の年代から、おおよそ大木9～10式期に位置付けられるものと考えられる。

【 類】

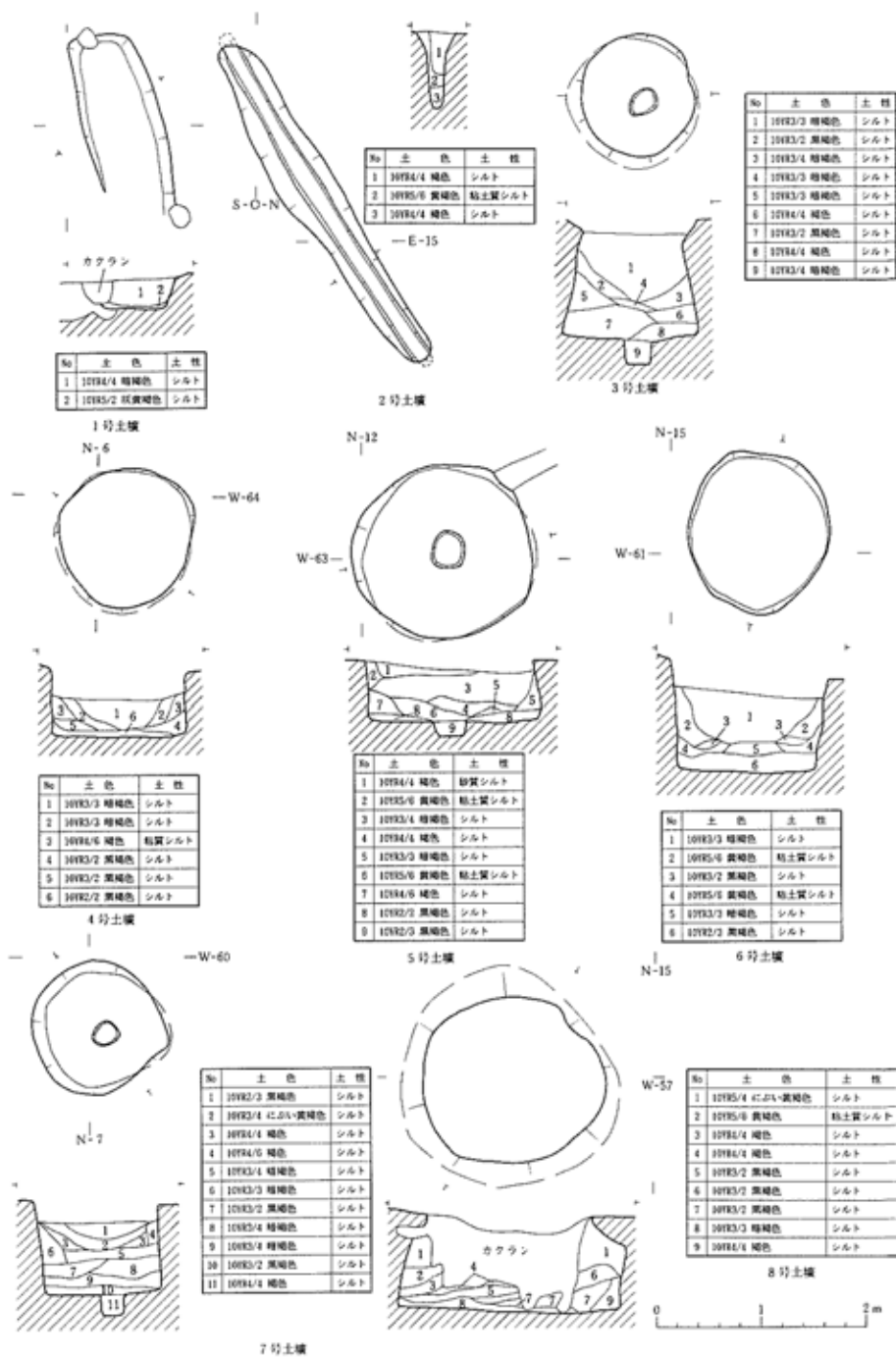
2号土壌のみで、規模は長軸354cm、短軸約50cm、深さ70cmである。短軸方向の断面形はV字形を呈し、長軸方向の断面形は開口部より底面が広がる形状をなす。堆積土は自然流入土である。その形態から、いわゆる「Tピット」であると考えられる。

【 類】

1号土壌のみである。18号住居跡と重複し、これより親しい。規模は長辺180cm以上、短辺60cm、深さ28cmである。堆積土は地山ブロックを多く含み、人為的に埋め戻されたものと考えられる。堆積土から石製模造品が2点(第76図19・20)出土しており、また、赤色顔料と思われるものも出土していることから、古墳時代に属する墓墳であると考えられる。

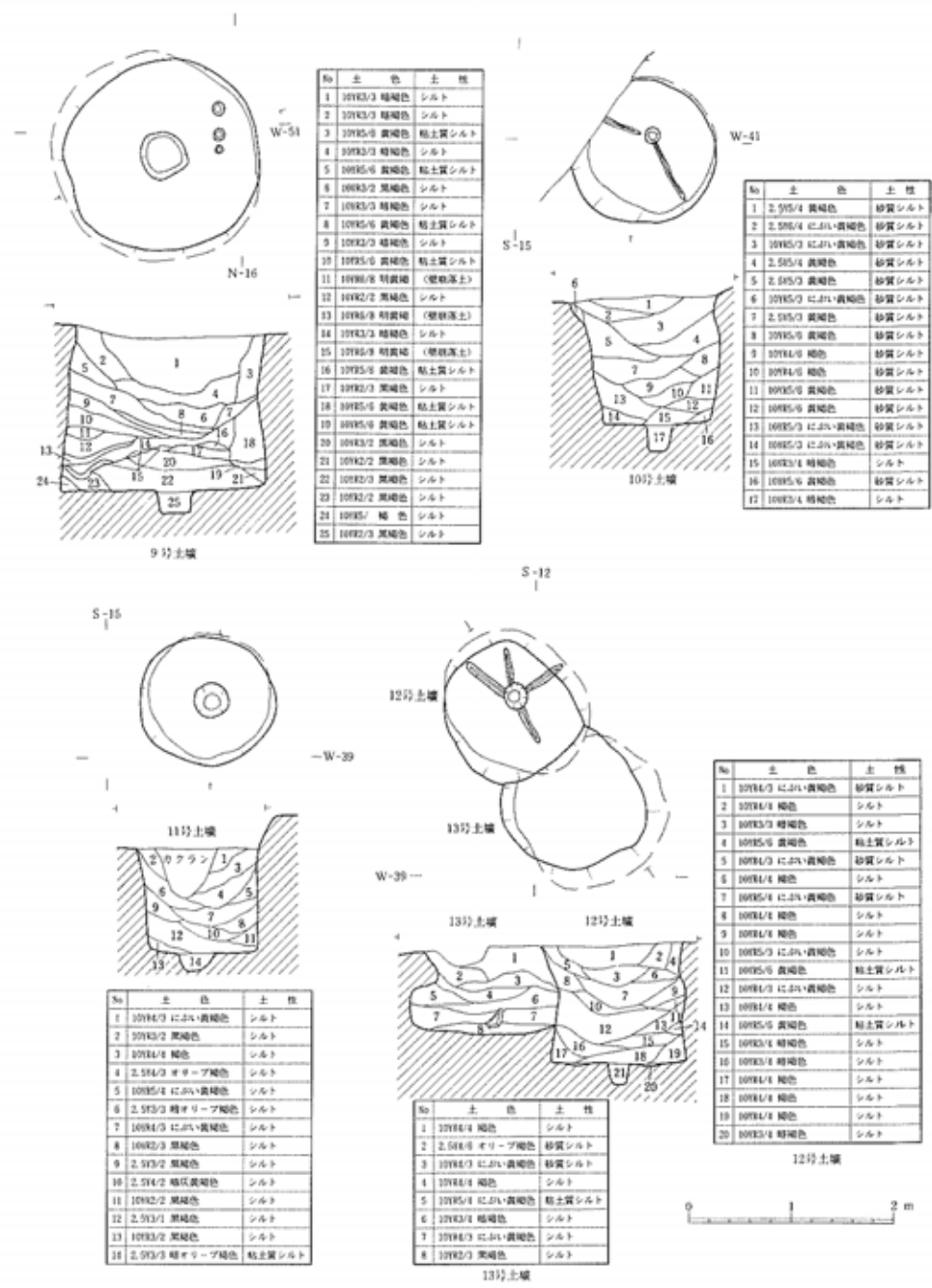
【 類】

51号土壌のみである。3号住居と重複し、これより古い。堆積土は自然流入土で、出土遺物もないため、その性格は不明である。

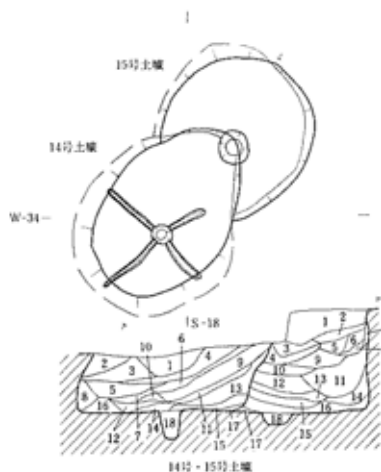


第62図 土壌 (1~8号土壌)





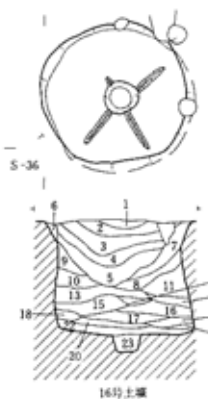
第63図 土壌 (9~13号土壌)



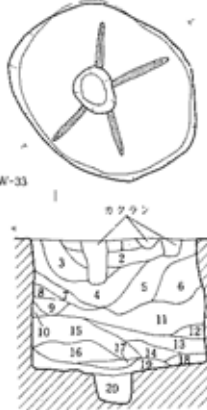
No	土色	土性
1	10YR4/4 褐色	シルト
2	2.5Y4/4 オリーブ褐色	シルト
3	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト
4	10YR5/8 明黄褐色	粘土質シルト
5	10YR4/4 褐色	シルト
6	10YR5/6 紅褐色	シルト
7	10YR5/3 紅褐色	シルト
8	10YR4/3 紅褐色	シルト
9	10YR3/4 暗褐色	シルト
10	10YR3/3 紅褐色	シルト
11	10YR4/4 褐色	シルト
12	10YR3/3 暗褐色	シルト
13	10YR4/3 紅褐色	シルト
14	10YR4/2 灰黄褐色	シルト
15	2.5Y4/6 オリーブ褐色	シルト
16	10YR4/4 褐色	シルト
17	10YR5/4 紅褐色	粘土質シルト
18	10YR3/4 暗褐色	シルト

No	土色	土性
1	10YR5/3 暗褐色	シルト
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト
3	10YR4/4 褐色	シルト
4	10YR5/6 明黄褐色	シルト
5	10YR5/4 紅褐色	シルト
6	10YR3/4 暗褐色	シルト
7	10YR4/3 紅褐色	シルト
8	2.5Y4/2 オリーブ褐色	シルト
9	2.5Y4/2 オリーブ褐色	シルト
10	10YR4/6 暗褐色	シルト
11	10Y4/2 黄褐色	シルト
12	10Y5/8 黄褐色	シルト
13	10YR4/4 褐色	シルト
14	2.5Y4/4 オリーブ褐色	シルト
15	10Y5/8 黄褐色	シルト
16	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト
17	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト
18	10YR3/4 暗褐色	シルト

S-15

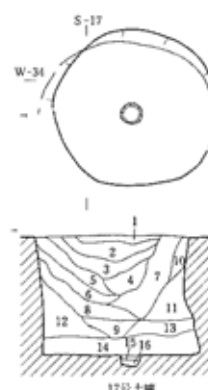


No	土色	土性
1	10YR4/4 褐色	シルト
2	10YR3/3 暗褐色	シルト
3	10YR3/4 暗褐色	シルト
4	10YR3/2 黄褐色	シルト
5	10YR2/2 黄褐色	シルト
6	10YR2/2 黄褐色	シルト
7	2.5Y3/2 暗オリーブ褐色	シルト
8	2.5Y3/2 暗オリーブ褐色	シルト
9	2.5Y3/2 暗オリーブ褐色	シルト
10	10YR3/2 黄褐色	シルト
11	10YR5/6 黄褐色	シルト
12	10YR4/4 褐色	シルト
13	2.5Y3/3 黄褐色	(砂礫混土)
14	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	シルト
15	10YR3/4 暗褐色	シルト
16	5Y3/2 オリーブ褐色	シルト
17	2.5Y4/2 黄褐色	シルト
18	2.5Y3/2 暗オリーブ褐色	シルト
19	10YR4/4 褐色	シルト
20	10YR4/4 褐色	シルト
21	10YR5/8 黄褐色	シルト
22	2.5Y4/2 暗黄褐色	シルト
23	10YR3/4 暗褐色	シルト

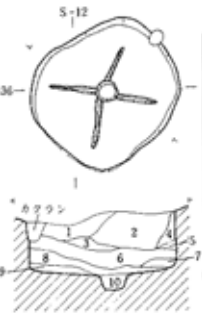


No	土色	土性
1	10YR3/3 暗褐色	シルト
2	10YR3/2 黄褐色	シルト
3	10YR3/2 黄褐色	シルト
4	2.5Y3/4 黄褐色	シルト
5	10YR4/3 紅褐色	シルト
6	10YR4/4 褐色	シルト
7	10YR4/4 褐色	粘土質シルト
8	10YR5/6 黄褐色	シルト
9	10YR4/4 褐色	シルト
10	10YR5/4 紅褐色	シルト
11	10YR4/3 紅褐色	シルト
12	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト
13	10YR5/4 紅褐色	シルト
14	10YR3/3 暗褐色	シルト
15	10YR3/2 黄褐色	シルト
16	10YR3/3 暗褐色	シルト
17	10YR3/3 暗褐色	シルト
18	10YR3/3 暗褐色	シルト
19	10YR4/3 紅褐色	シルト
20	10YR5/4 紅褐色	シルト

18号土壌



No	土色	土性
1	10YR6/4 紅褐色	シルト
2	10YR5/8 明黄褐色	粘土質シルト
3	10YR5/3 暗黄褐色	シルト
4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト
5	10YR3/4 暗褐色	シルト
6	10YR4/3 紅褐色	粘土質シルト
7	10YR4/4 褐色	シルト
8	10YR5/4 紅褐色	粘土質シルト
9	10YR4/4 褐色	シルト
10	10YR4/6 暗褐色	シルト
11	10Y5/8 黄褐色	粘土質シルト
12	10Y5/8 黄褐色	粘土質シルト
13	10YR4/4 褐色	シルト
14	10YR4/4 褐色	シルト
15	10YR3/3 暗褐色	シルト
16	10YR4/3 紅褐色	粘土質シルト

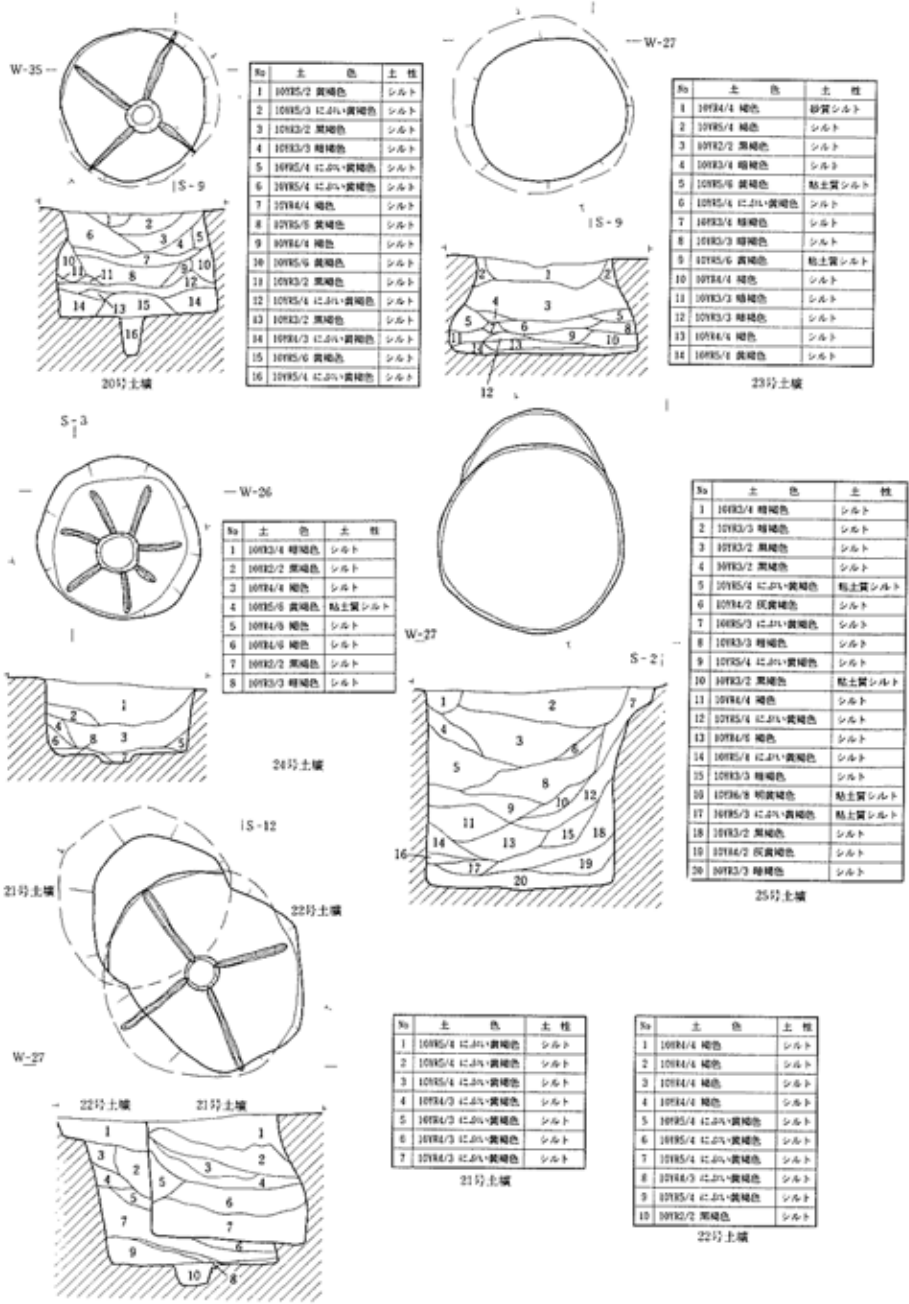


No	土色	土性
1	10YR4/4 褐色	砂質シルト
2	2.5Y5/8 黄褐色	シルト
3	10YR4/4 褐色	シルト
4	10YR5/4 紅褐色	シルト
5	10YR4/4 褐色	シルト
6	10YR5/4 紅褐色	シルト
7	10YR4/4 褐色	シルト
8	10YR5/8 黄褐色	シルト
9	10YR3/3 暗褐色	シルト
10	2.5Y5/8 黄褐色	シルト

19号土壌

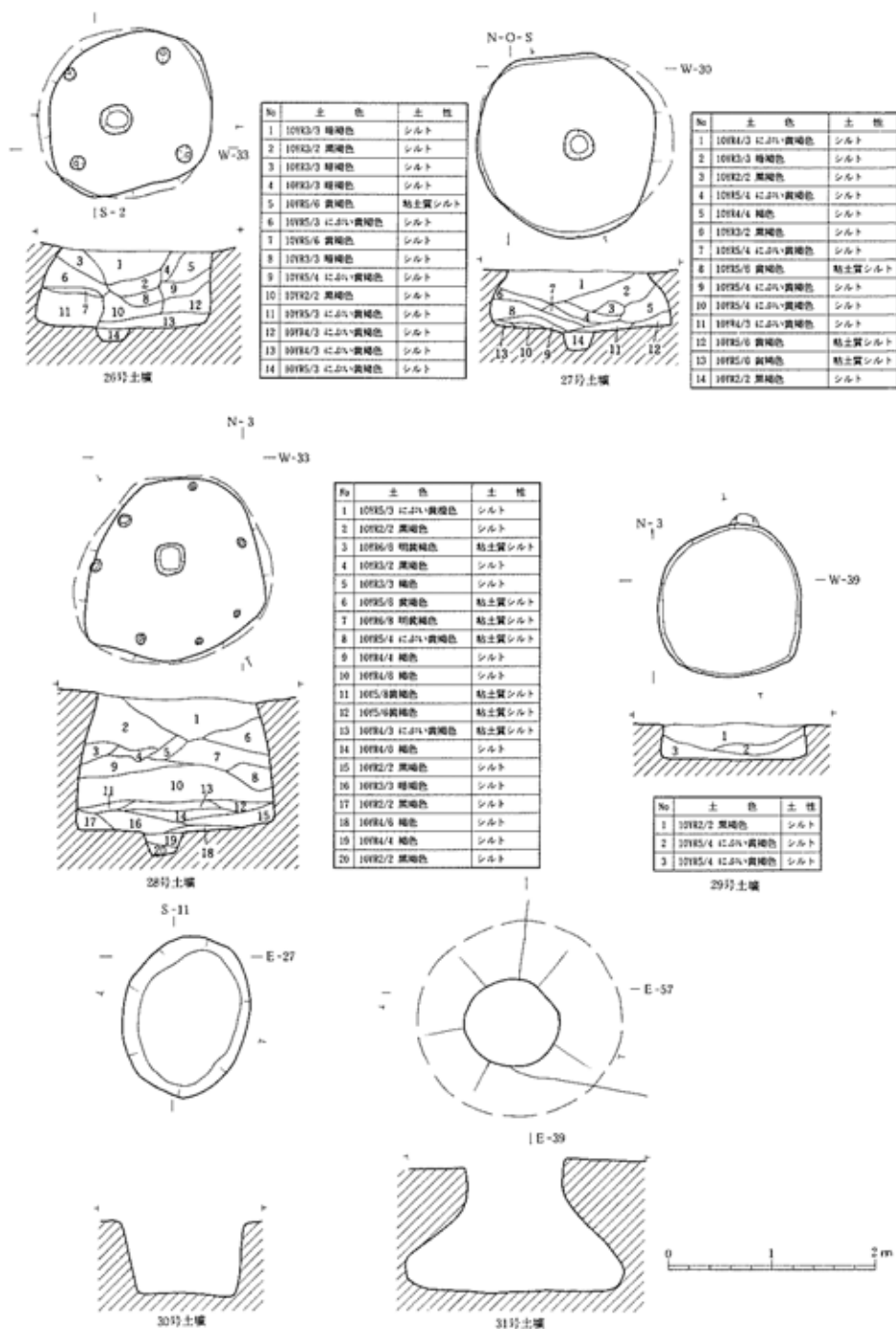


第64図 土壌 (14~19号土壌)

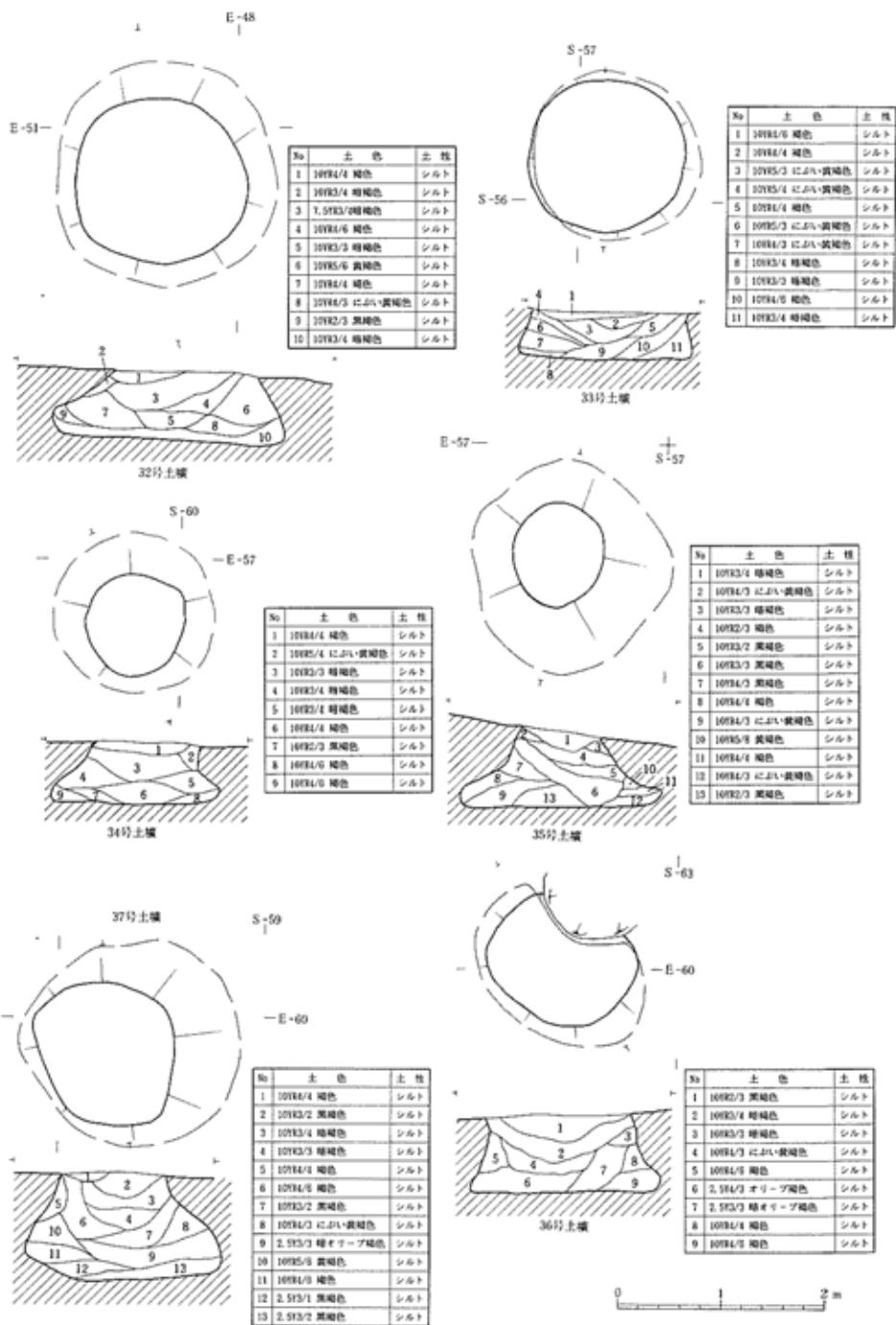


第65図 土壌 (20~25号土壌)

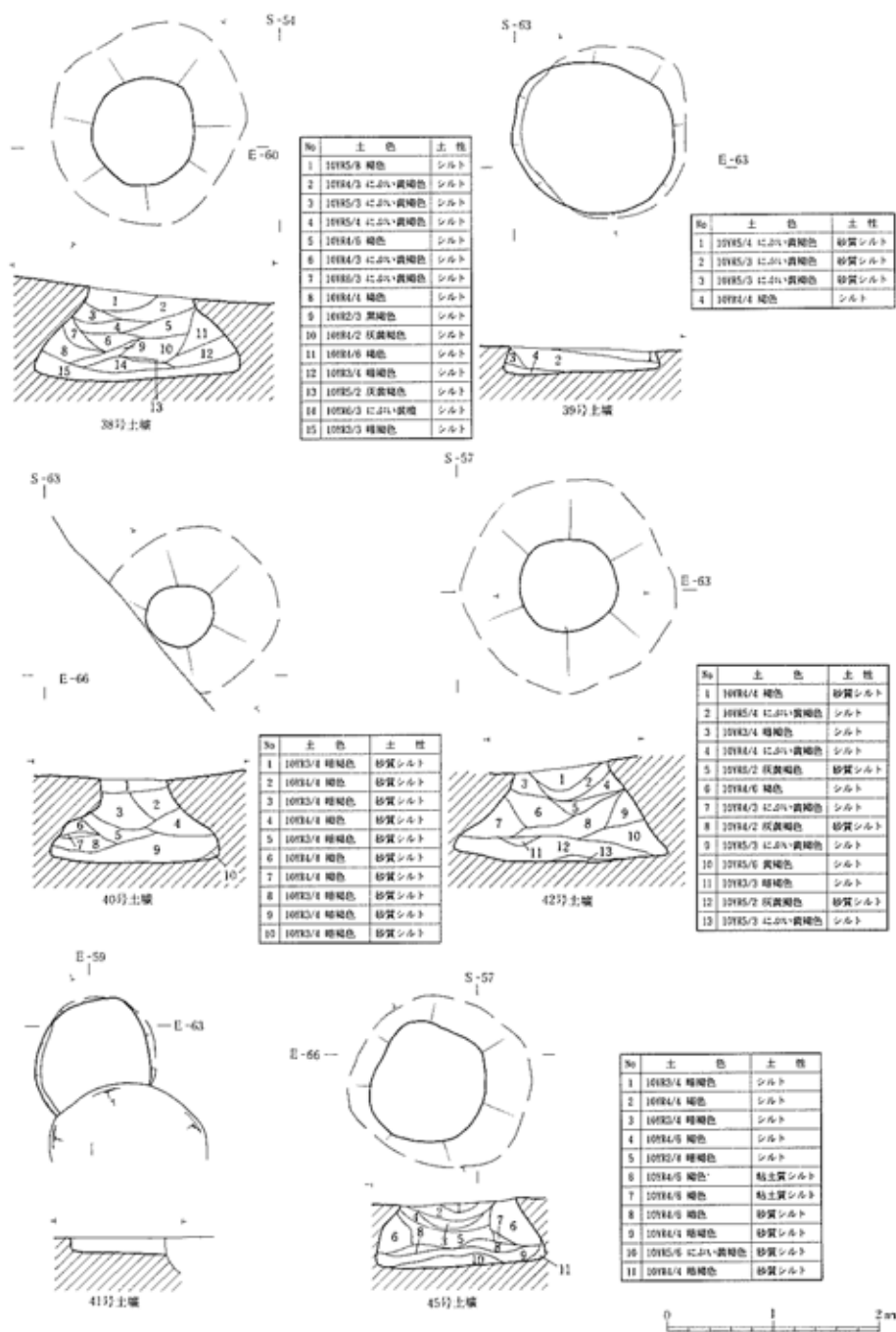




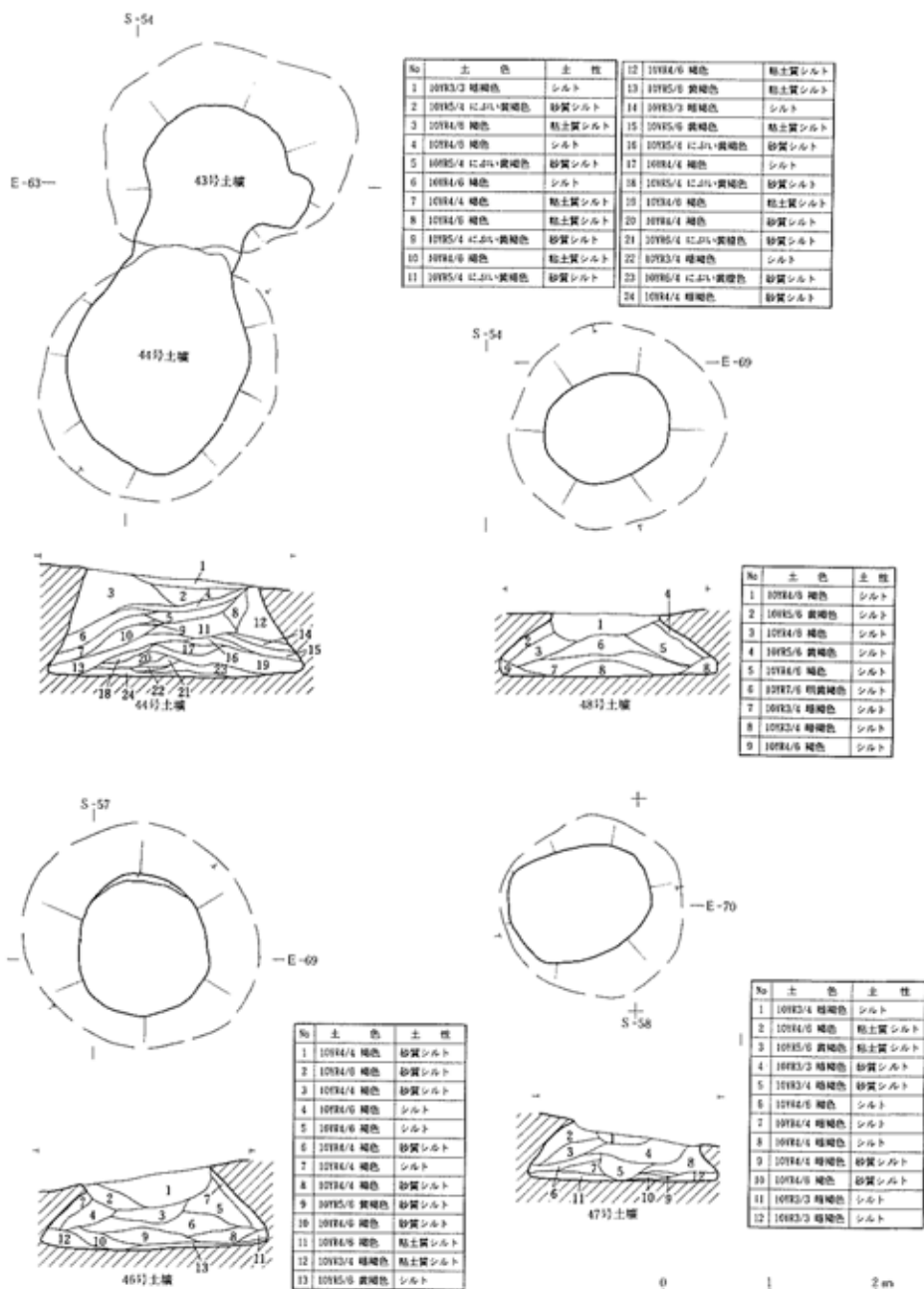
第66図 土壌 (26~31号土壌)

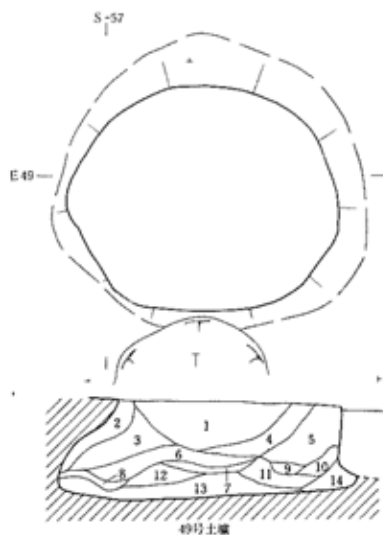


第67図 土壌 (32~37号土壌)

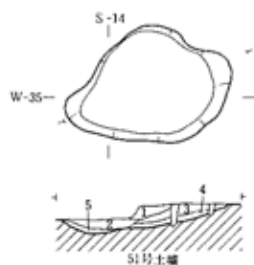


第68図 土壌 (38~42・45号土壌)

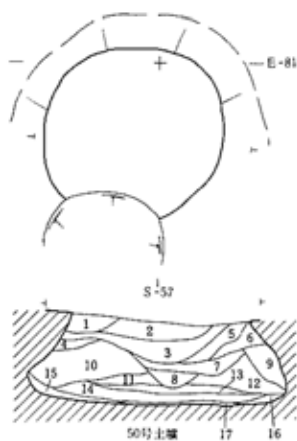




No	土色	土性
1	10YR5/4 暗褐色	砂質シルト
2	10YR5/8 に近い黄褐色	シルト
3	10YR5/8 黄褐色	シルト
4	10YR5/8 黄褐色	シルト
5	10YR5/8 黄褐色	シルト
6	10YR5/8 に近い黄褐色	シルト
7	10YR5/3 暗褐色	砂質シルト
8	10YR5/8 明黄褐色	(埋藏基土)
9	10YR5/8 黄褐色	シルト
10	10YR7/8 明黄褐色	(埋藏基土)
11	10YR4/6 褐色	シルト
12	10YR3/8 に近い黄褐色	砂質シルト
13	10YR6/8 明黄褐色	(埋藏基土)
14	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト



No	土色	土性
1	10YR3/2 黄褐色	シルト
2	10YR3/4 暗褐色	シルト
3	10YR3/3 暗褐色	シルト
4	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト
5	10YR4/4 褐色	シルト



No	土色	土性
1	10YR4/6 褐色	粘土質シルト
2	10YR3/4 暗褐色	シルト
3	10YR4/6 褐色	シルト
4	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト
5	10YR3/3 暗褐色	シルト
6	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト
7	10YR4/4 褐色	シルト
8	10YR5/8 黄褐色	シルト
9	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト
10	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト
11	10YR4/6 褐色	粘土質シルト
12	10YR4/6 褐色	粘土質シルト
13	10YR4/6 褐色	粘土質シルト
14	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト
15	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト
16	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト
17	10YR4/4 褐色	粘土質シルト



第70図 土層 (49~51号土層)





No.	種別	出土位置	特徴	図面	No.	種別	出土位置	特徴	図面
1	縄文土器厚鉢	5区11号地層	灰土縄文→沈殿→横溝、突縁部開幅定4単位	34-2	5	縄文土器厚鉢	5区10号地層	灰土縄文→沈殿→横溝	32-8
2	縄文土器厚鉢	5区10号地層	口縁部、乳突縄文	32-8	6	縄文土器厚鉢	5区10号地層	乳突縄文→沈殿→横溝	32-7
3	縄文土器厚鉢	5区10号地層	口縁部、横溝3条	32-3	7	石器	5区10号地層	横溝長16.5cm、最大径3.2cm、縦穴径	34-1
4	縄文土器厚鉢	5区10号地層	底縁に乳突同心円文	32-5	8	石器	5区20号地層	縦溝長4.1cm、幅2.5cm、碧玉	35-15

第71図 土坑出土遺物

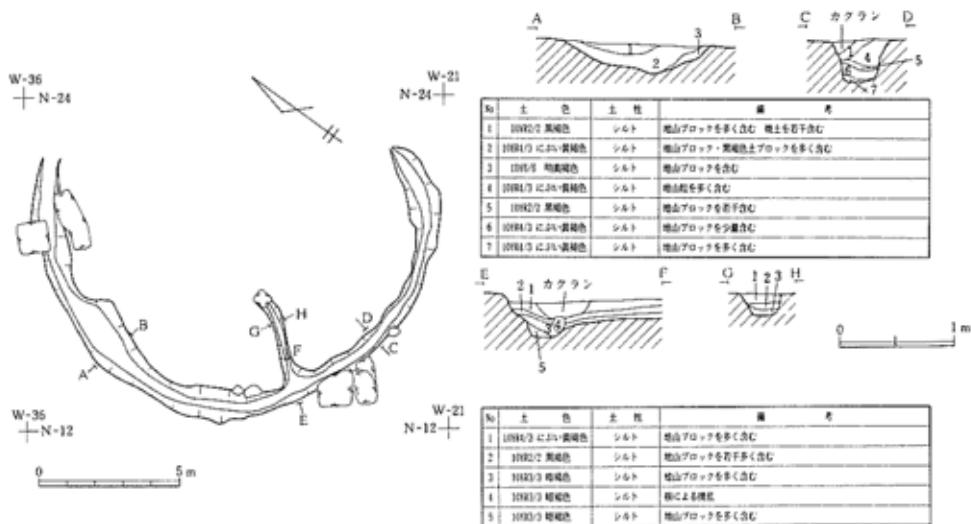
### 3. 円形周溝と出土遺物

#### 【1号円形周溝】(第72図)

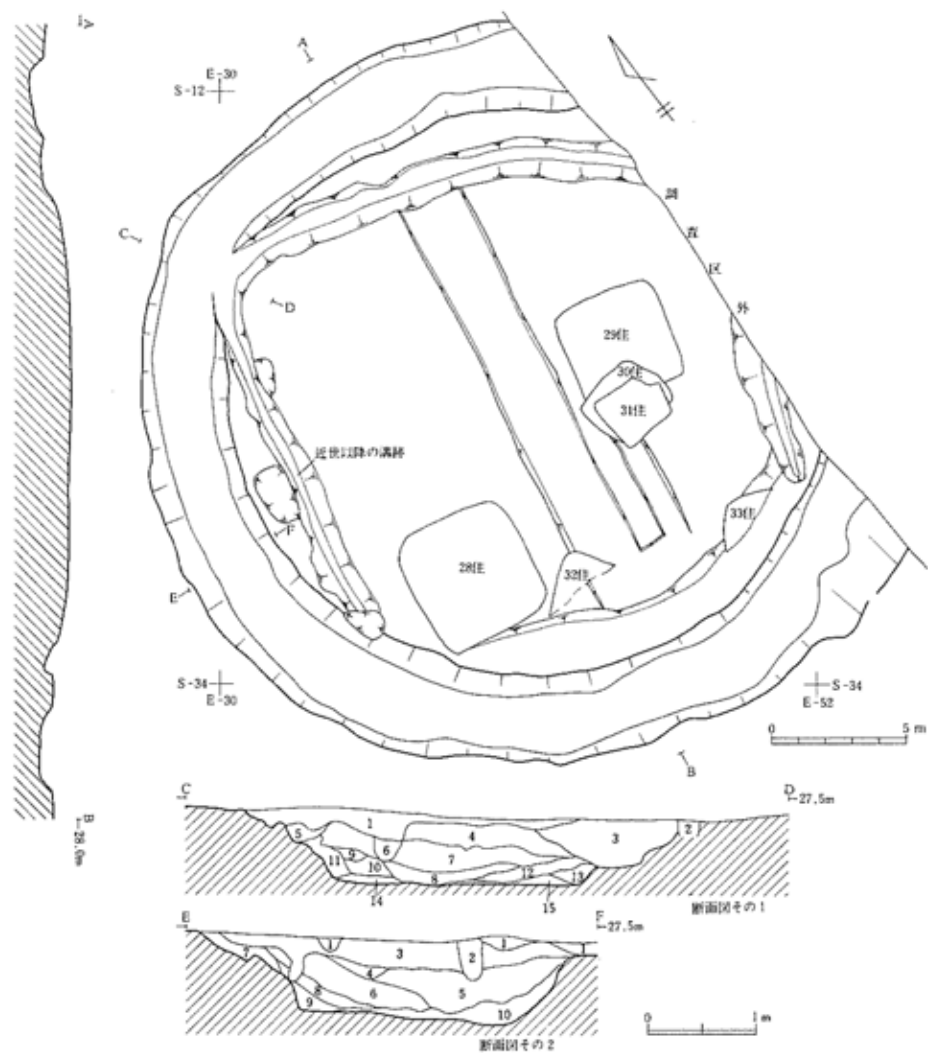
調査区北側やや中央より、N12~24・W21~36区付近で検出された。確認面は層上面である。ほぼ半周するように残存しており、内周が直径約12.5mである。周溝は上幅が0.5~1.3m、下幅が0.3~0.6mで、断面形はおおむね箱形を呈し、周溝上幅が広い部分は壁の立ち上がりが緩やかとなる。また、周溝の南西部分にほぼ北に延びる溝跡が取りついているが、断面観察からは円形周溝との切り合い関係は認められなかった。この溝は上幅が30cm、下幅が20cmで、断面形はU字形を呈する。堆積上中からは縄文土器、弥生土器が若干出土しており、第74図4は弥生時代中期後半(十三塚式)に位置付けられる。周溝の性格・年代については不明である。

#### 【2号円形周溝】(第73図)

調査区中央東寄りの、S11~35・E28~53区付近で検出された。確認面は層上面である。周溝の東側は、調査区外に延びている。内周が直径約22.0mである。28・29・30・31・32・33号住居跡と近接するが、切り合いは不明である。また、方形に巡る近世以降の溝跡と重複し、これより古い。周溝は上幅が約3.3m下幅が2.0~2.5m、断面形は逆台形状を呈している。周溝の堆積土は自然流入土である。堆積土中からは縄文土器、弥生土器、土師器が若干出土している。第74図1は土師器壺の、2は甕の破片で、古墳時代前~中期(塩釜式~南小泉式)に位置付けられる。3・5は弥生時代中期(十三塚式)、6~8は弥生時



第72図 1号円形周溝



断面図その1				断面図その2			
No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考
1	10103/1 黄褐色	シルト		1	10103/1 黄褐色	シルト	
2	10103/1 黄褐色	シルト	ビット埋戻土	2	10103/2 黄褐色	シルト	
3	10103/3 黄褐色	シルト	近世遺構埋戻土	3	10103/2 黄褐色	シルト	
4	10103/3 黄褐色	シルト		4	10103/2 黄褐色	シルト	
5	10103/3 黄褐色	シルト	ビット埋戻土	5	10103/2 黄褐色	シルト	
6	10103/3 黄褐色	シルト	ビット埋戻土	6	10103/2 黄褐色	シルト	
7	10103/4 黄褐色	シルト		7	10103/3 黄褐色	シルト	
8	10103/2 黄褐色	シルト		7	10103/3 黄褐色	シルト	地山ブロックを多く含む
9	10103/2 黄褐色	シルト		8	10103/3 黄褐色	シルト	地山ブロックを多く含む
10	10103/4 褐色	シルト	地山層を若干含む	9	10103/3 黄褐色	シルト	地山層・黄褐色土層を含む
11	10103/4 褐色	シルト		10	10103/3 黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック・褐色土ブロックを多く含む
12	10103/2 黄褐色	シルト	地山層を若干含む				
13	10103/4 褐色	シルト	地山層を多く含む 粘土を若干含む				
14	10103/3 黄褐色	粘土質シルト	地山ブロックを含む				
15	10103/3 黄褐色	シルト	地山ブロックを若干含む				

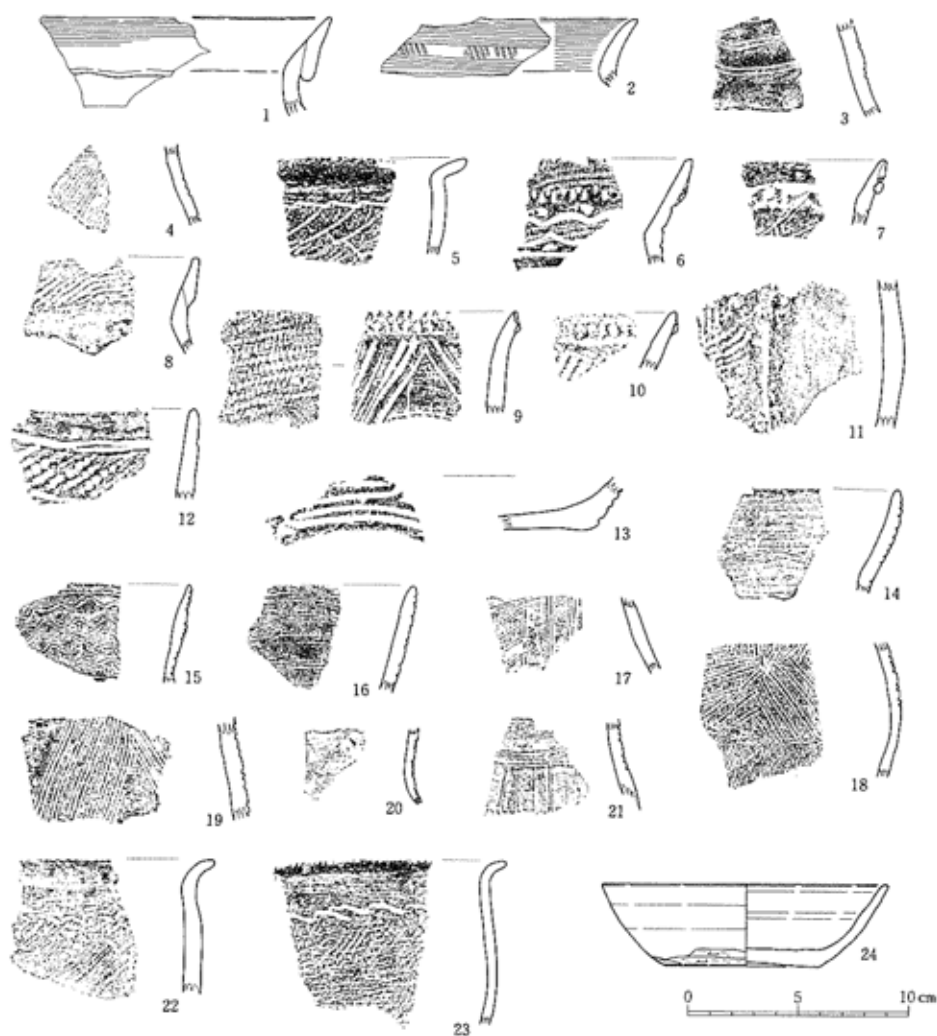
第73図 2号円形周溝

代後期（天王山式）に位置付けられる。周溝の年代、性格については不明である。

なお調査以前にはこの位置に高さ 0.5m～1m、一辺 20mほどの不整形の段状の高まりが認められ、その内部には厚さ最大 40cm の 層とその上面に厚さ最大 40cm のしまりのない整地層がごく部分的に認められた。この段状の高まりは、形状、規模が近世以降の溝跡とほぼ一致し、整地層の土質も近接する近世以降の攪乱と類似していることからみて 2号円形周溝に伴うものではなく、近世以降の塚の一部であると考えられる。

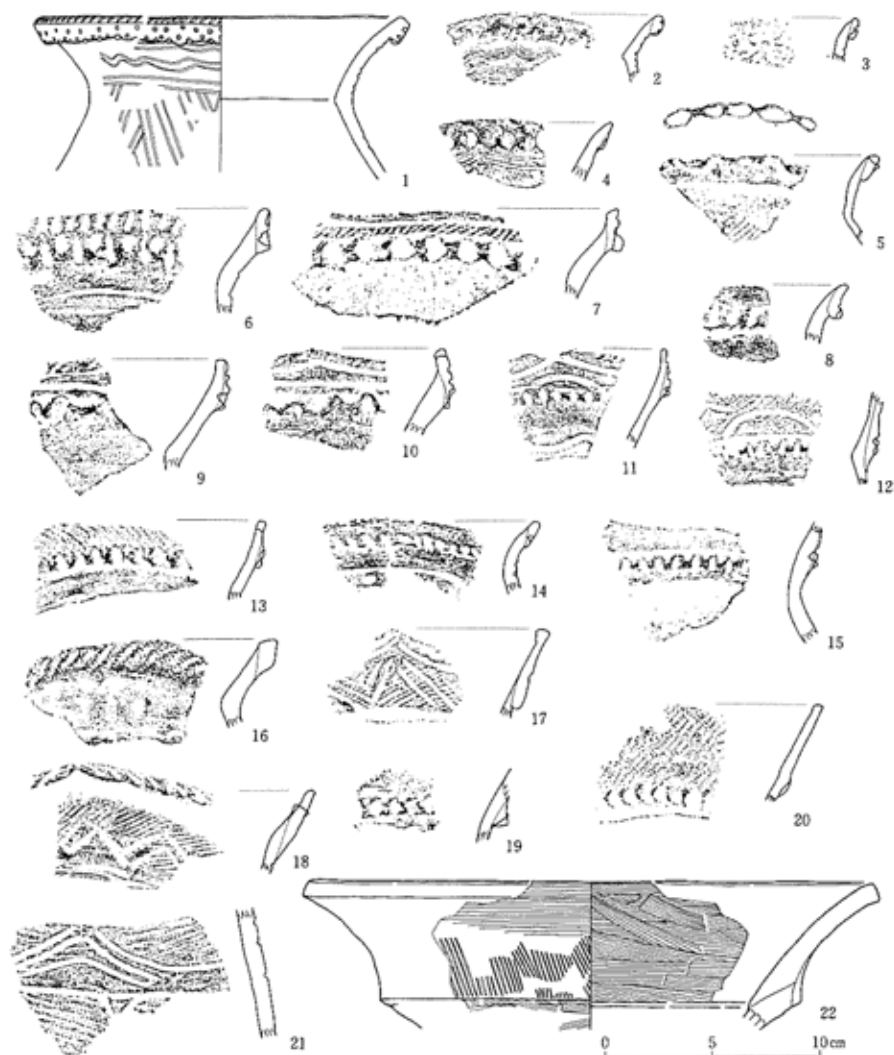
#### 4. その他の出土遺物（第 74～76 図）

第 74 図 9、10 は縄文時代早期末の梨木畑式に相当すると考えられる。13 は鉢の底部で、縄文時代晩期末～弥生時代初頭に位置付けられる。14～23 は弥生時代中期後半（十三塚式）に位置付けられる。24 は須恵器の坏で、南側斜面の 6 トレンチから出土した。器形や調整からみて 8 世紀中葉～後葉のものであると考えられる。第 75 図 1～21 は弥生時代後期（広義の天王山式）に位置付けられる。22 は土師器の壺の口縁部（有段口縁）で、2号円形周溝周辺の表土から出土した。



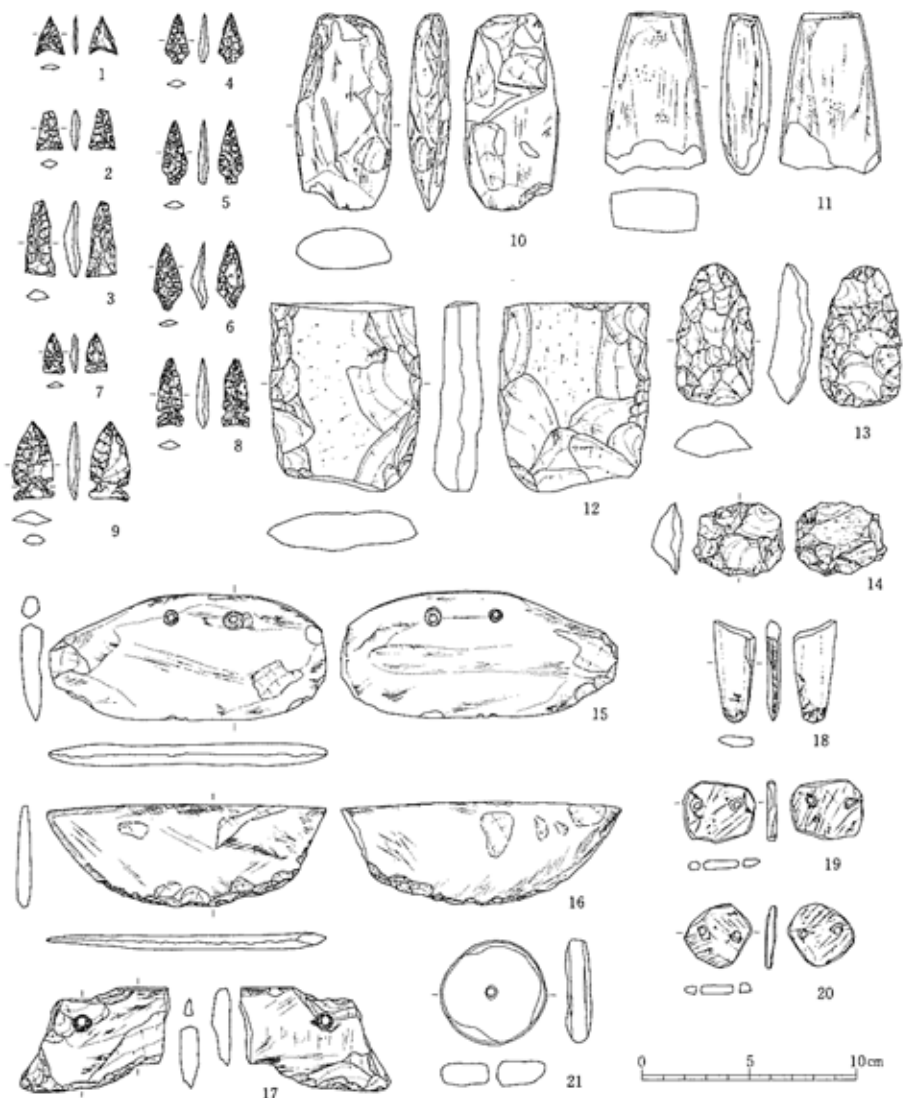
No.	種別	出土位置	特徴	図説	No.	種別	出土位置	特徴	図説
1	土師器壺	2号円形周溝坑	腹白口縁、口縁外面にコナテ、内面厚減	13	弥生土器鉢	S 1 19 1 層	波線による変形工字文、コナテなし	32-10	
2	土師器壺	2号円形周溝坑	口縁外面にヤメノコナテ、内面コナテ	14	弥生土器壺?	表土	口縁中や受け口状、1本筋より3本筋施文	32-18	
3	弥生土器壺	2号円形周溝坑	3本同時施文	15	弥生土器鉢?	表土	2本同時施文	32-13	
4	弥生土器壺	1号円形周溝坑	3本同時施文	16	弥生土器鉢?	表土	2本同時施文	32-14	
5	弥生土器壺	2号円形周溝坑	縦線文、L-R交互?、口縁部に施文あるか	17	弥生土器壺	表土	2本同時施文	32-12	
6	弥生土器壺	2号円形周溝坑	腹白口縁受口状、L-R、交互斜交文	18	弥生土器壺	表土	3本同時施文、Rより赤文	32-11	
7	弥生土器壺?	2号円形周溝坑	腹白口縁、交互斜交文	19	弥生土器壺	S 1 20 2 層	3本同時施文	32-16	
8	弥生土器壺	2号円形周溝坑	腹白口縁、L-R施文	20	弥生土器	S 1 28 1 層	3本同時施文	32-20	
9	縄文土器深鉢	表土	口縁に縁部→刺突、内面にL-R施文	21	弥生土器壺	S 1 20 1 層	3本同時施文か	32-17	
10	縄文土器深鉢	S 1 20 層土	口縁に縁部→刺突、内外面にL-R施文	22	弥生土器壺	S 1 20 1 層	縦線文、Rより赤文	32-22	
11	縄文土器深鉢	表土	縁部1筋、L-R施文	23	弥生土器壺	表土	縦線文、Rより赤文	32-21	
12	縄文土器深鉢?	S 1 19 1 層	L-R→波線	24	須恵器鉢	S 1 20 土	縦線手付ケズ、口縁13.9 底径1.1 高さ?	31-8	

第74図 円形周溝、その他の出土遺物(1)



No.	種別	出土位置	特徴	図版	No.	種別	出土位置	特徴	図版
1	弥生土器	表土	複合口縁、口縁部がわずし、口縁に竹管、棒状工具による刻文、底部2本同時刻文	33-1	11	弥生土器	S 122地	複合口縁、L状刻文、沈線、沈線+押圧	33-11
2	弥生土器	S 118 2層	複合口縁、口縁部がわずし、口縁に竹管による刻文、底部2本同時刻文、1と類似するが片側凹み	33-2	12	弥生土器	S 113地	複合口縁、L状刻文、沈線、沈線+交互刻文	33-8
3	弥生土器	S 122地	複合口縁、沈線+筋、2本同時刻文	33-3	13	弥生土器	S 119 2層	複合口縁、口縁、底部にR状刻文、交互刻文	33-14
4	弥生土器	S 120地	複合口縁、口縁下部押圧、2本同時刻文	33-4	14	弥生土器	S 119 2層	複合口縁、口縁、底部にR状刻文、交互刻文	33-15
5	弥生土器	S 115地	複合口縁、口縁部に押圧、L状刻文	33-5	15	弥生土器	S 122地	複合口縁、沈線+刻文、押圧	33-20
6	弥生土器	S 110 2層	複合口縁、口縁に筋、交互刻文	33-5	16	弥生土器	S 128 1層	L状刻文	33-13
7	弥生土器	S 104地	複合口縁、L状刻文、沈線、沈線+押圧	33-12	17	弥生土器	表土	複合口縁、L状刻文、沈線	33-18
8	弥生土器	表土	複合口縁、沈線+筋	33-6	18	弥生土器	表土	口縁部部に筋、L状刻文、沈線	33-17
9	弥生土器	S 120地	複合口縁、L状刻文、沈線、沈線+押圧	33-6	19	弥生土器	S 117 2層	複合口縁、口縁下部に筋	33-22
10	弥生土器	表土	3と同様、同一個体か	33-9	20	弥生土器	表土	複合口縁、口縁下部に押圧	33-23
					21	弥生土器	S 119地	R状刻文、沈線	33-7
					22	土師器	表土	外面ハヤメココフコ、内面ヘラケテ、加熱割、口縁部、口縁に口縁存	

第75図 その他の出土遺物(2)



No.	器種別	部位	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	石材	備考	図番
1	石	番号型・片	1.8	1.3	0.2	流石		25-13
2	石	番号型・片	0.30	1.3	0.4	流石	先端欠損	25-14
3	石	番号型・横断面	0.30	1.4	0.4	流石	先端欠損	25-15
4	石	番号型・横断面	0.40	1.1	0.3	流石	大を欠けている。先端欠損	25-16
5	石	番号型・片	1.0	1.2	0.4	玉製	先端欠損	25-17
6	石	番号型・横断面	1.2	1.3	0.4	玉製	先端欠損	25-18
7	アマリウ式石	番号型・横断面	1.8	1.0	0.3	玉製		25-19
8	アマリウ式石	番号型・片	0.30	1.3	0.5	輝石	先端欠損	25-20
9	アマリウ式石	1号型・2種	1.7	1.3	0.6	流石	大を受けている	25-21
10	標型石	1号型・横断面・片	0.2	0.5	1.9	不明	端は鋭い	25-22
11	標型石	2号型・片	0.50	0.60	2.3	板状石	先端欠損	25-23
12	石	番号型・横断面	0.30	0.9	2.0	不明		25-24
13	標型石	1号型・横断面	0.6	0.7	1.7	輝石		25-25
14	両面加工石	横断面	4.3	3.3	1.3	輝石		25-26
15	石	型丁	11.0	5.9	1.1	輝石	2孔。孔径：4mm	25-27
16	石	型丁	11.3	4.8	0.7	輝石	断面に4角溝あり	25-28
17	石	型丁	0.30	0.40	0.9	輝石	断面に4角溝あり。孔径：4mm	25-29
18	石	型丁	0.70	0.50	0.6	不明	断面に4角溝	25-30
19	有孔石	1号型・横断面	1.3	1.3	0.4	輝石	2孔。孔径：3mm	25-31
20	有孔石	1号型・横断面	2.0	2.4	0.4	輝石	2孔。孔径：3mm	25-32
21	標型石	1号型・2種	5.0	4.5	1.2	流石	孔径：4mm	25-33

第76図 その他の出土遺物 (3)

## 第4章 考察

### 1. 竪穴住居跡出土の土師器

住居跡から出土した土師器としては坏、高坏、器台、壺、甕、台付甕、甑、小形土器がある。ここではそのうち甕、坏、高坏、器台、壺について分類を行う。

【甕】器形によって分類する。

A類：大形の甕であるもの。

B類：中形の甕で、体部が球形であるもの。

B1類：口縁部が直線的であるもの。端部に段を有するもの（B 1類）と端部が丸く収まるもの（B 2類）がある。

B 類：口縁部が外反するもの。

C類：中形の甕で、体部が紡錘形に近いもの。

C 類：口縁部が直線的であるもの。

C 類：口縁部が外反するもの。

D類：小形の甕で、口縁部が外反し、体部上半が強く張るもの。

E類：小形の甕で、口縁部が直線的、体部が紡錘形に近いもの。

【坏】器形によって分類する。

A類：大形の坏であるもの。

B類：小形の坏で口縁部が非常に長く、全体に深い器形であるもの。

C類：小形の坏で口縁部が長く、全体に深い器形であるもの。

C 類：口縁部と体部の境界がわずかに屈曲し、体部が全体にゆるやかに湾曲するもの。

C 類：口縁部と体部の境界が強く屈曲し、体部が全体にゆるやかに湾曲するもの。

C 類：口縁部と体部の境界が非常に強く屈曲し、体部の上半が強く湾曲するもの。

D類：小形の坏で口縁部が非常に短く、全体に深い器形であるもの。

E類：小形の坏で口縁部が短く、全体に深い器形であるもの。

F類：小形の坏で口縁部が短く、全体に浅い器形であるもの。

【高坏】脚部の器形によって分類する。

A類：脚部が円錐台状で裾部が長く広がるもの。

B類：脚部が円錐台状で裾部が内湾するもの。

C類：脚部が円柱状であるもの。

【器台】器形によって分類する。



- A類：脚部が円錐台状で、受け部の口縁部がゆるやかに湾曲しているもの。
- B類：脚部が円錐台状で、受け部の口縁部が強く屈曲しているもの。
- C類：脚部が円柱状であるもの。

【壺】器形によって分類する。

- A類：特に大形のもの。
- B類：大形のもので、口縁部が複合口縁であるもの。
- C類：大形のもので、口縁部が有段口縁であるもの。
- D類：大形で単純口縁、口縁部が長くゆるやかに開くもの。
- E類：小形で有段口縁のもの。
- F類：小形で単純口縁、口縁部が短いもの。
- G類：小形で単純口縁、口縁部が長いもの。

第5表 住居跡での各類の出土状況

住居跡\分類	壺							坏							高坏		器台			壺						
	A	B	BI	BI	CI	CE	D	E	A	B	CI	CH	CH	D	E	A	C	A	B	C	A	B	C	F	G	
3号住居跡																A		A								
4号住居跡															E											
6号住居跡			BI						A		CI															
7号住居跡												CH														
10号住居跡														CH												
11号住居跡				BE																				C		G
12号住居跡			BI	BE	CI							CH	CH													F
14号住居跡														CH												
17号住居跡											CI				D									C		
19号住居跡						CE		E					CH										B			F
20号住居跡										B										C						G
20土器集中	A					CE						CE										A				
22号住居跡						CE						CE	CH				C									
24号住居跡						CE	D																			G
29号住居跡						CE														B						
33号住居跡							D																			
36号住居跡																										C

これらの種類の住居跡での出土状況は上の表の通りである。

この表に見られる通り、各住居跡での各類の出土点数が少ない上に出土状況も重複しており、共伴関係をとらえて明確な土器群を設定するのは難しい。

しかしながら坏の組み合わせをみると、6号住居跡では坏A類とC類、17号住居跡ではC類とD類が出土しているのに対して、12号住居跡、22号住居跡ではC類とC類が出土しており、様相の違いが見られる。他に共通して出土している器種がないため明確ではないが6号住居跡、17号住居跡と、12号住居跡、22号住居跡では時期を異にしている

可能性が考えられる。

次に本遺跡住居跡出土土師器の編年的位置付けについて考える。

本遺跡住居跡出土の土師器は、その形態的特徴からみて古墳時代前期の塩釜式（氏家1957）に位置付けられると考えられる。

塩釜式については、丹羽茂氏（丹羽1983、1985）、次山淳氏（1989、1992）の論考があり、丹羽氏は塩釜式を第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの4段階に、次山氏は1～6の6段階に細分している。本遺跡では若干の高坏のほか、坏、甕が多く出土しているが、これらは次山氏が編年の指標としているものであり、また丹羽氏と次山氏の編年は、結果として大筋で対応しているので（丹羽氏Ⅰ段階、次山氏1段階、Ⅱ段階、Ⅲ段階、Ⅳ段階、Ⅴ段階、Ⅵ段階）、ここでは主に次山氏の編年との対比を行うこととする。

3号住居跡出土の高坏のうち、第8図3は大橋遺跡1号住居跡出土資料、安久東遺跡方形周溝墓出土資料に類似しており、次山氏の分類の高坏A類に相当する。また第8図4は坏部を欠いているが、脚部が大きく広がる特徴は大橋遺跡1号住居跡、戸ノ内遺跡4号住居跡出土資料にみられるものであり、次山氏の分類の高坏B類と共通する。次山氏は高坏A類、B類を1ないし2段階に特徴的にみられるものとしていることから、3号住居跡出土資料は1ないし2段階に位置付けられると考えられるが、脚部が大きく広がる特徴をもつ高坏の出土例は宮城県内では1段階のみに認められ、2段階には確実な例はない。よって3号住居跡出土資料については、次山編年の1段階に位置付けられる可能性が高いと考えられる。

また22号住居跡出土の高坏（第43図3）は中実棒状の脚部のみが残存しているが、この特徴は清水遺跡第Ⅰ群土器、留沼遺跡1号住居跡出土資料などに見られるもので、次山氏の分類の高坏D、F、G類と共通する。全体の器形が不明であるため明確ではないが、22号住居跡出土資料は、次山編年の3～5段階の中に位置付けられると考えられる。

10号住居跡、12号住居跡、14号住居跡、22号住居跡で出土している坏C類は、次山氏のいう『小型丸底鉢』に含まれる。次山氏は『小型丸底鉢』は2段階に出現し5段階で消滅するものであると考えている。このことから10号住居跡、12号住居跡、14号住居跡、22号住居跡出土資料は、次山編年の2～5段階の中に位置付けられると考えられる。なお前述した22号住居跡以外の住居跡については高坏が出土しておらず、また共伴する甕の内容が次山氏の各段階の内容に合致しないため、細かい対比は行わない。

なお坏C類と類似する形態の坏（留沼遺跡4層上面出土資料など）について、次山氏はC類と類似する形態の坏を一括して『小型丸底鉢』の範疇でとらえている。しかしC類とC類とは形態的に区別できるものと考えられる一方、本遺跡の12号住居跡、22号

住居跡ではC 類とC 類が共伴している。よってC 類をC 類と同じ器形の流れの中で理解するのは難しいと考えられる。なお今後、次山氏がいう『小形丸底鉢』を含む坏の形態については、器形を細分した上でその変遷を検討する必要がある。

ここで先に触れた6号住居跡、17号住居跡出土資料の位置付けについて考える。

6号住居跡で出土している坏A類の類例としては、二本松遺跡遺物集中地点、色麻古墳群11号住居跡出土資料がある。前者は次山編年の1段階、後者は2段階に位置付けられている。

また17号住居跡で出土している坏D類については、口縁部が非常に短い特徴が戸ノ内遺跡4号住居跡、野田山遺跡19号住居跡、山前遺跡大溝、安久東遺跡4号住居跡出土の坏と共通する。坏D類は丸底あるいは底径の小さな平底であると推定されることから戸ノ内遺跡、野田山遺跡の出土資料に近く、底径が大きく明確な平底を呈する山前遺跡、安久東遺跡の出土資料とは異なるものであると考えられる。戸ノ内遺跡4号住居跡出土資料は次山編年の1段階に位置付けられ、野田山遺跡9号住居跡出土資料について報告者は明確には述べていないが、「塩釜式でも特に古い1段階」である可能性を指摘している。

両住居跡で出土している坏C 類については類例が少なく対比が難しいが、口縁部と体部の境界の屈曲がわずかであること、体部が全体にゆるやかに湾曲することなどの特徴が宮前遺跡49号住居跡（丹羽氏編年のA段階）、福島県棚倉町松並平遺跡34号住居跡出土資料と共通し、色麻古墳群11号住居跡出土資料や次山氏の1段階に位置付けられている大橋遺跡1号住居跡出土資料とも共通する点が多い。

以上のような他遺跡での類例の位置付け、及び前述した本遺跡住居跡出土の坏の出土状況の相異を総合して考えると、6号住居跡、17号住居跡出土資料は次山編年の1ないし2段階のものである可能性が考えられる。17号住居跡で共伴する壺C類の口縁部の形態や、頸部に櫛歯状の刻みをもつ突帯を有する壺が共伴することもこの見解と矛盾しない。

一方このほかの住居跡の出土資料は、位置付けは難しいが器形からみて塩釜式の範疇に入るもので、上記の住居跡出土資料の年代幅の中に収まるものであると考えられる。

このように本遺跡の住居跡出土資料については塩釜式のものであると考えられ、次山氏の1ないし2段階に相当する資料と、次山氏の2～5段階に相当する資料が出土している。しかし資料数の不足などにより明確に土器群の変遷をとらえることはできなかった。

## 2. 竪穴住居跡

北原遺跡から検出された住居跡は36軒である。これらの内、出土遺物により時期が明らかになったものは15軒(3・4・6・10・11・12・14・17・19・20・22・24・29・33・36号住居跡)で、いずれも古墳時代前期(塩釜式期)のものである。また、それ以外の住居跡についてもある程度の時期差は考えられるが、住居の構造や堆積土出土の遺物などから判断するとほぼ塩釜式期の範疇に納まるものと考えられ、一括して取り扱うことにする。以下ではまずその属性ごとに特徴を抽出していく。

### 【立地】

34・35・36号住居跡を除き、西方から延びてきた長岡丘陵の東端部、26.5m~29.0mの緩やかに弧を描く丘陵頂部に分布している。また、丘陵頂部の北斜面に分布するのは1・2号住居跡のみで、その他はすべて丘陵頂部の南斜面もしくは東斜面に分布しており、地形を考慮した立地であることが窺われる。なお、住居跡は斜面下方にはみられず、その粗密も明確には認められない。

第6表 住居跡一覧表

No.	平面形	規模(m)	高さ(m)	北半高	平均傾斜(%)	築	土柱穴	溝	溝	埋戻ピット	溝	貯蔵ピット	貯蔵ピット	部	図録との関係で判明した住居
1	(方形)	15.8×5.5		13.5	13.5		1本								○
2	(方形)	15.7×3.0		13.4	13.4		12本	(南・西)	黒褐色土層有)		○	黒褐色土層	○		
3	隅丸正方形	4.7×4.1	37.6	17.2				東・南・西)					○		○
4	(方形)	15.0×5.0		13.0	13.0	一部埋戻		(北・東・南)		○	黒褐色土層	○	○	中央西寄り	○
5	隅丸正方形	3.4×3.4	33.0	11.0				北・西)	黒褐色土層有						○
6	隅丸正方形	5.4×5.2	36.3	23.1		1本		掘削跡に全周)		○	黒褐色土層	○	○	中央西寄り(東寄り)	○
7	隅丸正方形	5.3×5.0	34.3	26.5		中央埋戻		全周)		○	黒褐色土層	○	○	中央北寄り	○
8	(方形)	14.3×2.7		11.0	11.0			(東・南・西)		○	黒褐色土層	○	○	中央西寄り	
9	(方形)	12.0×1.5		13.0	13.0			(南・西)							
10	隅丸正方形	4.3×3.5	31.4	15.1		中央へ埋戻ピットへ起築				○	黒褐色土層	○	○	中央北寄り	○
11	隅丸正方形	2.9×2.9	19.0	8.4		中央埋戻									○
12	隅丸正方形	4.9×4.1	38.9	23.5		中央埋戻	1本	山は全周)	黒褐色土層	○	黒褐色土層	○	○	中央西寄り	○
13	長方形	5.6×4.6	32.1	25.8				山は全周)					○	東寄り	○
14	長方形	5.2×3.9	25.9	20.3		中央埋戻		山は全周)	黒褐色土層有				○		○
15	(方形)	15.0×4.0		13.0	13.0	中央埋戻	1本	(南・西)							○
16	(方形)	13.7×2.0		13.0	13.0										
17	隅丸正方形	5.9×5.6	36.0	32.5		中央へ埋戻ピットへ起築	4本	全周)	黒褐色土層	○	黒褐色土層	○	○	中央北寄り	○
18	正方形	7.6×6.9	33.3	32.4		一部埋戻	1本	全周)	黒褐色土層	○	黒褐色土層	○	○	中央東寄り	○
19	正方形	7.2×7.0	31.2	30.4		中央へ埋戻ピットへ起築	4本	全周)	黒褐色土層	○	黒褐色土層	○	○	中央北寄り	○
20	隅丸正方形	5.5×5.0	30.9	27.5		中央へ埋戻ピットへ起築	4本	山は全周)	黒褐色土層有	○	黒褐色土層	○	○	中央西寄り	○
21	隅丸正方形	4.1×3.8	32.7	15.4											○
22	正方形	5.9×5.9	100	34.8		中央へ埋戻ピットへ起築	4本	山は全周)	黒褐色土層有	○	黒褐色土層	○	○	中央北寄り	○
23	(方形)	17.1×6.7		14.7	14.7	一部埋戻	4本	(東・北・西)	黒褐色土層有)	○	黒褐色土層	○	○	中央北寄り	○
24	(方形)	13.8×3.0		11.7	11.7	中央埋戻									○
25	(方形)	14.8×4.0		12.1	12.1	中央埋戻									○
26	隅丸正方形	4.9×4.3	37.6	21.1				北・南)	部分的に黒褐色土層有)						○
27	(方形)	15.9×5.7		13.7	13.7		4本	(東・北・西)	黒褐色土層有)	○	黒褐色土層	○	○	中央西寄り	○
28	隅丸正方形	4.7×4.5	35.7	21.2		一部埋戻	1本	全周)	黒褐色土層有	○	黒褐色土層	○	○	中央北寄り	○
29	隅丸正方形	4.0×4.0	300	16.0		全周埋戻		山は全周)		○	黒褐色土層	○	○	中央西寄り	○
30	隅丸正方形	2.5×2.3	32.0	5.8											○
31	(方形)	12.2×2.1		14.0	14.0										○
32	(方形)	12.4×1.0		14.0	14.0										
33	(方形)	13.8×1.0		12.0	12.0			(1本)							

### 【平面形態】

平面形態はすべて方形を基調とし、正方形、長方形とそれぞれの隅丸のものが認められる。ここでは壁が4面とも残存しており、明確にその平面形態が把握できる住居跡19軒（第6表）について分類を行なった。

《平面形態による分類》（長辺の長さに残する短辺の長さの割合が90.0%以下のものを長方形とした。）

1. 正方形.....3軒（15.8%）
2. 長方形.....2軒（10.5%）
3. 隅丸正方形.....12軒（63.2%）
4. 隅丸長方形.....2軒（10.5%）

隅丸正方形を呈するものが多く、全体の63.2%を占めている。傾向としては、平面形態では正方形が多く、角は隅丸になるものが多い。また、長辺の長さに対する短辺の長さの割合の平均は93.1%、標準偏差は6.63である。

長方形もしくは隅丸長方形の住居跡の占める割合は全体の21.0%と少ないが、長辺に対する短辺の割合が他のものに比べて非常に小さな値を示している（10号住居跡：81.4%、13号住居跡：82.1%、14号住居跡：75.0%、26号住居跡：87.8%）。このことから、長方形もしくは隅丸長方形として分類している住居跡は、平面形態において長方形を意識してつくられている可能性が考えられる。

### 【規模】

第77図は住居跡と長辺の長さの関係を棒グラフで表しており、第78図は住居跡と平面積の関係を棒グラフで表している。当然ながら、長辺の長さと同様に平面積はほぼ対応し、以下のように分類できる（ここでは住居跡の壁、床面、掘り方底面などからある程度規模が把握できる住居跡8軒を含め、27軒 第6表 について分類している）。

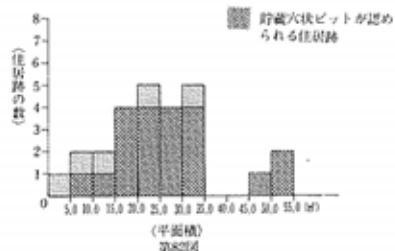
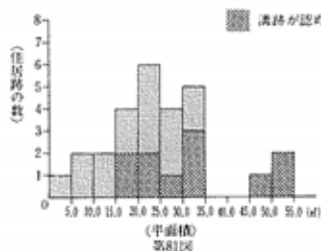
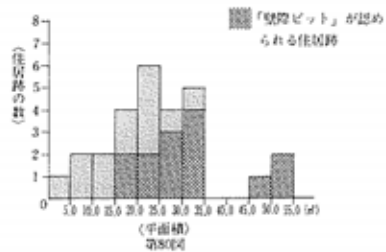
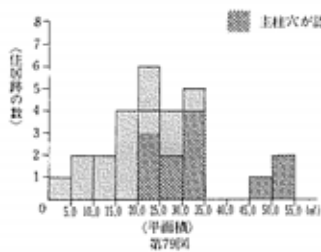
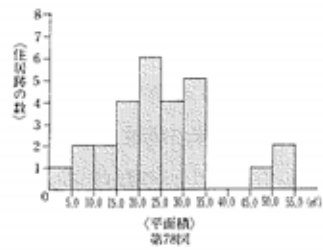
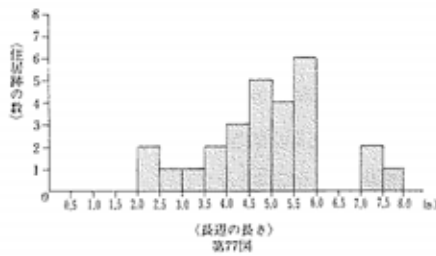
《長辺の長さを基準とする分類》

1. 大.....7.0m以上のもの（11.1%）
2. 中.....4.0~6.0mのもの（66.7%）
3. 小.....4.0m以下のもの（22.2%）

《平面積を基準とする分類》

1. 大.....45.0 m<sup>2</sup>以上のもの（11.1%）
2. 中.....15.0~35.0 m<sup>2</sup>のもの（70.4%）
3. 小.....15.0 m<sup>2</sup>以下のもの（18.5%）

大、小は少なく中のものに集中する傾向がみられる。ただし、長辺の長さ、平面積で住



居跡間を比較してみるといずれも最大は18号住居跡で、いずれも最小の31号住居跡の長さで約3.6倍、平面積で約11.3倍、中規模の12号住居跡の長さで約1.6倍、平面積で約2.2倍となり、ある一定の規模にまとまる傾向はあるものの、大小の差も大きいことがわかる。

### 【床面】

床は、周縁部が掘り方埋土を床面とし、中央部が貼り床を床面とする傾向がみられる。そのなかには「壁際ピット」を起点とし、中央部にかけて貼床を床面としているもの(10・17・19・20・22号住居跡)がかなり認められる。また、全面が貼床のもの(29号住居跡)、周縁部に貼床を床面とした部分が巡るもの(28号住居跡)も認められる。なお、床面の硬化範囲と貼床の範囲はほぼ対応している。

ここで、「壁際ピット」を起点とし、中央部にかけて貼床が認められる住居跡に注目すると、これらの住居にはいずれも壁辺中央から直角に床面中央に向かって延びる溝跡が検出されており、この溝跡を境にして「壁際ピット」側にのみ貼床がみられる傾向がある。このことから、貼床の範囲（床面の硬化範囲が住居内での人の動き、空間利用の在り方を反映していることが窺われる（渡辺：1985 等でも指摘されている））。

#### 【支柱穴】

支柱穴は、住居平面の対角線上に4個認められるものと、まったく認められないものに分けられる。住居跡の残存状態が悪く、支柱穴の数が不明である2・33・36号住居跡についても、その残存部から判断して4個と考えられ、支柱穴のあるものはすべて4本柱であると考えられる。

支柱穴を持つ住居跡とその平面積の関係を棒グラフで表し、住居跡と平面積の関係を表した棒グラフに重ねた第79図をみると、全体の約44%の住居跡に支柱穴が認められる。大規模の住居跡にはすべてに支柱穴が認められる。中規模の住居跡では約47%に支柱穴が認められるが、比較的大型のものに認められる傾向が強い。また、小規模の住居跡には支柱穴が認められない。

#### 【周溝】

周溝の在り方を分類すると以下のようになる。

1. 壁際を全周するもの（ほぼ全周・断続的に全周を含む）……12軒（44.5%）
2. 壁際を「コ」の字状に巡るもの……4軒（14.8%）
3. 壁際を半分ほど巡るもの……3軒（11.1%）
4. 周溝のないもの……8軒（29.6%）

周溝の保有率は高く、約70%である。周溝が認められる場合、全周（ほぼ全周・断続的に全周を含む）しているものが多い。また、周溝を保有する住居跡のうち約63%のもので、周溝内の壁際に沿って黒褐色土帯が確認されている。この黒褐色土帯は壁材の痕跡と考えられているが、今国の調査では実際の材は検出されず、黒褐色土帯の立ち上がりも床面までしか確認できなかった。しかし、周溝の堆積土をみると人為的に埋め戻された土である可能性が強く、周溝に壁材の据え方としての機能がある可能性を指摘しておく（石野：1990 等でも指摘されている）。

#### 【壁際ピット】

支柱穴の他に特徴的なものとして、壁際中央よりも貯蔵穴状ピット寄りに認められるピットがある。このピットについては野田山遺跡（須田地：1992）において「壁際ピット」と仮称されており、本報告書においてもこれに倣っている。この「壁際ピット」が認めら

れる住居は全体の約50%で、主柱穴よりも掘り方が小さく浅い傾向があり、断面形が住居の壁側に向かって開く変形「V」字形を呈するものが多い。また、4・28号住居跡を除き材の痕跡が認められる(28号住居跡の「壁際ピット」には抜き取り痕が認められ、4号住居跡においてもP1が「壁際ピット」の抜き取り穴である可能性が強い)。これらの材の痕跡のうち残存状態が良好な痕跡は全て壁側に傾斜して検出されており、その50.0%が壁と平行する方向に長軸をもつ楕円形を呈している(7・12・17・22・23・27・29号住居跡)。

このような「壁際ピット」の類例は宮城県内では野田山遺跡(2・3・6・9・10・11・19号住居跡)を除くとほとんど確認されていないが、宮前遺跡(丹羽:1983)の第7号住居跡のP4、第16号住居跡のP7、第46・53号住居跡のピットなどもこれにあたると思われる。また、関東地方では山梨県金の尾遺跡16・18・21・25・26・28・30・33・34・35・36号住居跡(弥生時代後期、末木他:1987)、茨城県裏山遺跡第7号住居跡(古墳時代前期、茨城県教育財団:1992)、茨城県北前遺跡第1・3・4・5-B・7・8・11・13・16・19・21・22・23・24・29・32・33・35・36号住居跡(古墳時代前期、大森:1993)、千葉県マミヤク遺跡8・42・44・49・57・86・103・156・164・192・213・229・248号住居跡(古墳時代前期、小沢:1999)などで「壁際ピット」が確認されている。金の尾遺跡の25号住居跡ではピット中に丸木半割材が丸木面を上にして壁側に傾斜した状態で検出されていることから、「壁際ピット」は出入りのための梯子の据え方であり、材は出入りのための一本梯子で壁に立て掛けるように設置されていたことが指摘されている(小宮:1990)。

今回の調査では材は痕跡としてしか確認されていないため断定することはできないが、ほとんどの材の痕跡が壁側に傾斜していること、壁と平行する方向に長軸を持つ楕円形の材の痕跡がかなり見られること、主柱穴に比べ掘り方が小さく浅いこと、掘り方の断面形が住居の壁側に開く変形「V」字形を呈するものが多いこと、貼床の範囲もしくは床面の硬化範囲がこのピットを起点にして認められる住居があることなどから考えると、「壁際ピット」はいわゆる「梯子受穴」であると思われる。少なくとも、住居に出入りするための入口の施設に係るピットである可能性が強い。

「壁際ピット」を持つ住居跡とその平面積の関係を棒グラフで表し、住居跡と平面積の関係を表した棒グラフに重ねた第80図をみると、大規模の住居跡には全てに「壁際ピット」が認められ、中規模の住居跡では約58%に認められる。また、小規模の住居跡には「壁際ピット」が認められない。

#### 【溝跡】

壁辺中央から直角に床面中央に向かって延びる溝跡(区画状の溝跡)が、約44%の住居跡で認められる。このような溝跡は、野田山遺跡2・6・23号住居跡、宮前遺跡第7・10・



28・46号住居跡、須江糠塚第1住居跡（高橋他：1987）などでも確認されているが、今回の調査ではこの溝跡の中央に溝と同方向に延びる黒褐色土帯が50%近くの割合で認められたことが特筆に値する。この黒褐色土帯は材の痕跡と考えられており、福岡県宮原遺跡3号竪穴住居跡（5世紀、武田地：1989）などでも検出されている。

この溝跡の機能については住居内の空間を区画する施設である可能性、「壁際ピット」もしくは貯蔵穴状ピットと関係する施設である可能性などが指摘されている（石野：1990、笹森：1990、宮本：1990）が、今国の調査結果からは具体的に推定することはできなかった。

溝跡を持つ住居跡とその平面積の関係を棒グラフで表し、住居跡と平面積の関係を表した棒グラフに重ねた第81図をみると、大規模の住居跡には全てに溝跡が認められ、中規模の住居跡では約42%に認められる。また、小規模の住居跡には溝跡が認められない。

#### 【貯蔵穴状ピット】

貯蔵穴状ピットは約78%の住居跡で認められる。住居跡床面のコーナー付近にあり、確認された場合は全て一住居跡につき1個である（26号住居跡の北西角にある貯蔵穴状ピットは25号住居跡の貯蔵穴状ピットである可能性がある：第3章-1参照）。平面形態は、隅丸長方形もしくは楕円形を呈するものが比較的多いが、特徴を抽出できるほどのまとまりはない。

貯蔵穴状ピットを持つ住居跡とその平面積の関係を棒グラフで表し、住居跡と平面積の関係を表した棒グラフに重ねた第82図をみても、住居跡の規模と貯蔵穴の有無に特別な関係を見出すことはできない。逆にいうと、どの大きさのものにも平均しであるということになる。

#### 【炉】

炉と考えられる焼け面は、残存状態が良好でない住居跡を除くとほとんどの住居跡で確認されている。焼け面の平面形態は、不整形もしくは楕円形を呈するが特徴を抽出できるほどの傾向性はなく、その範囲は長軸の最大で1.7m、最小で0.3mあり、0.6~1.0mの範囲のものが多い。

炉は床面上で検出され、平坦な焼け面のもの（4・6・8・10・11・13・16・19・20・21・22・23・24・25・27・29・36号住居跡）と、床面を5~8cm程度浅く掘り窪めているもの（7・12・15・17・18・26・28・35号住居跡）とに大別できる。また、焼け面の脇もしくは中央で礫が確認されている例もある（16・23・24・28号住居跡）。

#### 《住居跡の特徴》

これまで住居跡の属性ごとに特徴を述べてきたが、以下ではこの特徴をまとめた結果が

ら注目される、北原遺跡における住居跡の特質3点について考察を加えたい。

### 住居内の施設について

まず、注目されるのは溝跡・「壁際ピット」・貯蔵穴状ピットの配置における関係である。遺構配図（第3図）と、住居の規模と溝跡・「壁際ピット」・貯蔵穴状ピットの位置関係を模式的に表した第83図をみるとわかるように、これらの施設が住居跡の床面で認められる場合、必ず同一の壁際に中央から溝跡・「壁際ピット」・貯蔵穴状ピットの順で並んでいる。溝跡は必ず壁辺のほぼ中央に位置し、溝跡が延びる方向を軸とすると左右対称に「壁際ピット」と貯蔵穴状ピットが並ぶパターンの差はみられるものの、中央から溝跡・「壁際ピット」・貯蔵穴状ピットと並ぶ順番はくずれない。

また、これらの施設が住居跡の床面で認められる割合をみると以下ようになる（ここではこれらの施設が認められる2・8号住居跡も含め、29軒を対象としている）。

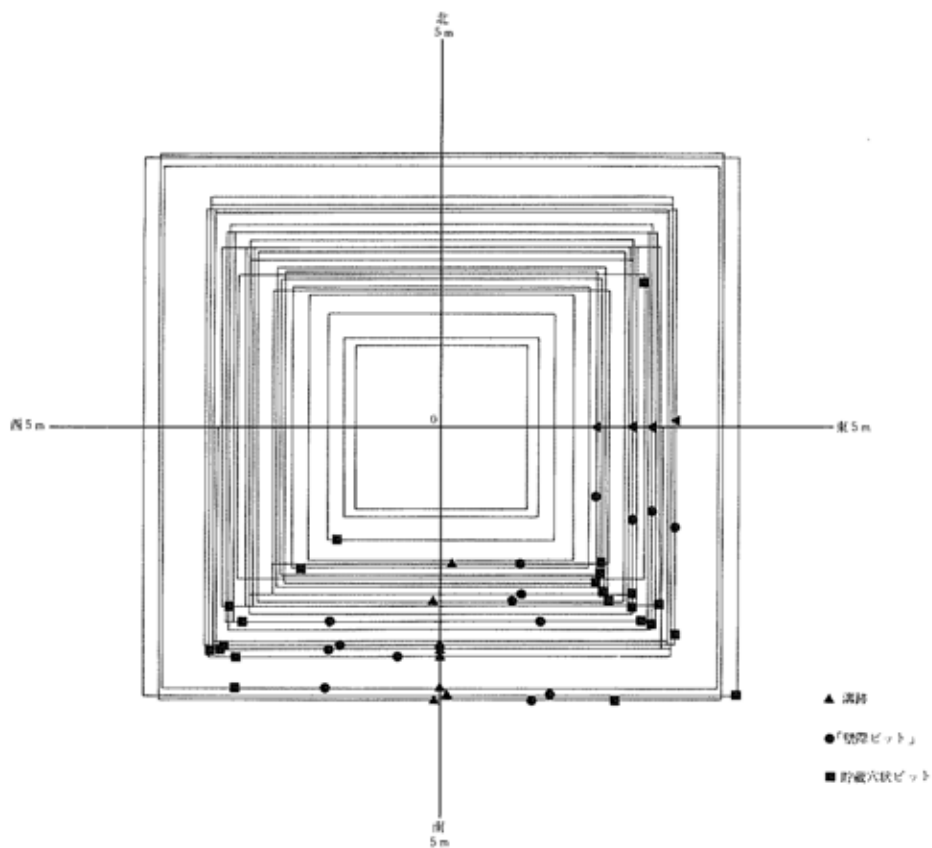
- (A) これらの施設なし.....7軒(24.1%)
- (B) 溝跡のみ.....0軒(0%)
- (C) 「壁際ピット」のみ.....0軒(0%)
- (D) 貯蔵穴状ピットのみ.....6軒(20.7%)
- (E) 溝跡と「壁際ピット」の組合せ.....0軒(0%)
- (F) 溝跡と貯蔵穴状ピットの組合せ.....1軒(3.5%)
- (G) 「壁際ピット」と貯蔵穴状ピットの組合せ.....4軒(13.8%)
- (H) 溝跡と「壁際ピット」と貯蔵穴状ピットの組合せ.....11軒(37.9%)

(F)と(G)の組合せが認められる住居跡(F:2号住居跡、G:6・7・8・27号住居跡)については、掘り方埋土を床面としており床面の状況がつかみにくかったか、床面の残存状態が非常に悪いものであることから、それぞれに欠ける「壁際ピット」、溝跡が実際は存在していた可能性がある。

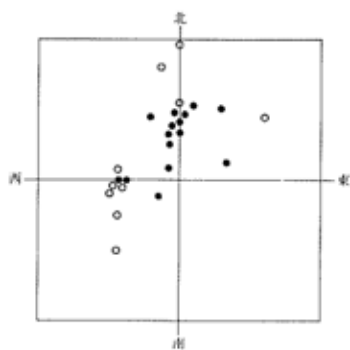
これらのことを考え合わせると、溝跡・「壁際ピット」・貯蔵穴状ピットの施設が存在する場合、単独で認められるのは貯蔵穴状ピットのみで、それ以外は常に3つの施設がセットになって同一の壁際ほぼ中央から溝跡・「壁際ピット」・貯蔵穴状ピットの順に並んで認められることが推定される。

ここで、「壁際ピット」は前述したように住居の入口の施設に関係するピットであることと溝跡・「壁際ピット」・貯蔵穴状ピットがセットで存在することから、これらの施設が認められる壁側を住居の入口側とみなし、炉の位置を検討してみた。

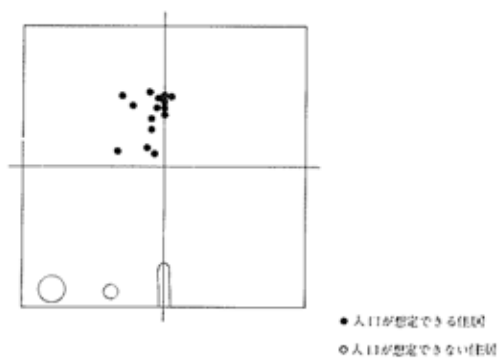
溝跡・「壁際ピット」・貯蔵穴状ピットを基準にした場合の炉の位置を表した第85図をみると、方角を基準にした場合の炉の位置を表した第84図と比較してもわかるよう



第83図 住居跡の規模と溝跡・「壁際ビット」・貯蔵穴状ビットの位置



第84図 方角を基準にした場合の炉の位置



第85図 溝跡・「壁際ビット」・貯蔵穴状ビットを基準にした場合の炉の位置

置が集中している。このことは炉が常に入口側からみてほぼ中央奥寄りであることを示している。また、溝跡が延びる方向を住居跡の中軸線とすると、炉は中軸線よりも「壁際ピット」よりはずれる傾向があり、10・18・23号住居跡では「壁際ピット」の対面に炉が認められる。よって、入口正面の奥寄りに炉が配されていたと解釈することも可能である。

以上のことからわかるように住居内での施設の配置には一定の規則性があり、このことは住居内での「場」の使い分けがある程度遺跡内（同一集団内）で共通性をもって行なわれていたことを示していると思われる（石野：1984、笹森：1990等でも指摘されている）。

また、このような施設の配置の規則性を示す住居跡の類例は、茨城県北前遺跡第3・4・7・8・11・13・16・21・33・36号住居跡、千葉県片山古墳群内D地点遺跡002号跡（古墳時代前期、小久貫：1988）などで検出されており、宮城県内では野田山遺跡2・6号住居跡で認められる。なお、一部の施設を欠くが、野田山遺跡3・9・11号住居跡、宮前遺跡第10・46号住居跡などもこれに含まれると考えられる。しかし、まだまだ類例が少ないためこの規則性を広く同時期（古墳時代前期）の住居のなかで位置付けることは難しく、時期差・地域性などの影響を含めて今後の課題とし、資料の増加を待ちたい。

#### 小規模の住居跡について

住居跡を規模と住居内の施設に着眼してみると、小規模の住居跡には主柱穴、溝跡、「壁際ピット」が全く認められない。また、大規模の住居跡には全ての施設（主柱穴、周溝、溝跡、「壁際ピット」、貯蔵穴状ピット、炉）が認められ、中規模の住居跡には認められる施設に住居間でバラエティがあるものの、比較的全ての施設を持つ住居跡が多い傾向にある。

ここで注目されるのは、小規模の住居跡に主柱穴、溝跡、「壁際ピット」が全く認められないことである。これは構造上において小規模の住居跡が大規模もしくは中規模の住居跡と大きく異なっていることを示しており、この構造上の違いは住居の性格の違い、住居に居住する構成員の違い、住居の時期差などを反映している可能性がある（石野：1990、高橋：1990等でも指摘されている）。

しかし、遺構配図（第3図）からは住居間の位置関係や小規模の住居跡の配置に特別な規則性を抽出することはできなかった。

また、本遺跡で小規模とした住居跡（平面積が15㎡以下のもの）の類例を宮城県内の同時期（塩釜式期）の遺跡であたってみると、野田山遺跡の22号住居跡（7.9㎡）、宮前遺跡の第38号住居跡（14.8㎡）、伊古田遺跡（高橋：1984）の14号住居跡（11.6㎡）、西野田遺跡（丹羽他：1974）の第5・10住居跡（13.4・11.9㎡）などがあり、これらの住居跡にはいずれも主柱穴、溝跡、「壁際ピット」が認められない。このなかで、次山編年

によると伊古田遺跡の14号住居跡出土土器は2段階、西野田遺跡の第5号住居跡出土土器は5段階に位置付けられており、それぞれ丹羽編年(1985)のA段階、段階に対応するとされている(次山:1992)。つまり、構造上他の住居とは異なる小規模の住居跡は塩釜式期の古い段階、新しい段階の両方に認められることになり、構造上の違いが時期差を反映しているとは考えにくい。

このように他の遺跡でも、同時期に他の住居とは構造上異なる小規模の住居跡が存在しているが、その違いが何を意味しているかについては今後の課題としておきたい。

### **住居の向きと地形について**

前述のように溝跡・「壁際ピット」・貯蔵穴状ピットが認められる壁側は住居の入口側にあたると思われる。このことに注目して第83図をみると、住居の入口は南側と東側にのみ存在している。そこで、遺構配図(第3図)で南側が入口にあたる住居跡をみると、2・8号住居跡を除き緩やかに傾斜した丘陵頂部の南斜面に位置している。また、東側が入口にあたる住居跡をみると、全て丘陵頂部の東斜面に位置している。このことは丘陵の斜面下方向にほぼ住居の入口が設けられていることを意味しており、地形を考慮して住居の向きが設定されていた事が窺われる。

また、住居跡が認められるのは1・2号住居跡を除くと緩やかに弧を描く丘陵頂部の南から東にかけての斜面に限られており、この事と丘陵の斜面下方向に住居の入口が設定されていることを考え合わせると、北原遺跡の地に住居していた当時の人々は長岡丘陵を境にして、これよりも南側にあたる地域を主な生活圏にしていたことが推測される。

## 引用参考文献

- 石岡憲雄（1991）：「「Tピット」について（再論）」『埼玉考古学論集』
- 石川長善（1987）：「五庵 遺跡発掘調査報告書」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書  
渡辺洋一 第97集』
- 石野博信（1990）：『日本原始・古代住居の研究』
- 今村啓爾（1983）：「陥穴（おとしあな）」『縄文文化の研究2 - 生業』
- 岩沼市史編纂委員会（1984）：「古墳時代の遺跡と出土品」『岩沼市史』
- 太田昭夫（1980）：「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書第71集』
- 大森雅之（1993）：「北前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第83集』
- 小笠原信彦（1990）：「住居と倉と井戸」『古墳時代の研究2 集落と豪族居館』
- 小久貫隆史（1988）：「片山古墳群内D地点遺跡」
- 小沢洋 他（1989）：「マミヤク遺跡（小浜遺跡群）」『君津郡市文化財センター発掘調査報告書  
44』
- 柿沼幹夫（1985）：「甑に関する覚書」『埼玉県立博物館紀要11』
- 菊地逸夫（1990）：「利府町郷楽遺跡」『宮城県文化財調査報告書第134集』  
庄子敦
- 工藤大（1983）：「鴨平（1）遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第72集』  
北林八州晴他
- 黒坂秀雄（1992）：「裏山遺跡」『宮城県教育財団文化財調査報告73』
- 小宮恒雄（1990）：「住まいの入り口」『季刊考古学32』
- 笹森健一（1990）：「竪穴住居の使い方」『古墳時代の研究2 集落と豪族居館』
- 渋谷孝雄（1988）：「吹浦遺跡第三・四次緊急発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書第  
120黒坂雅人 集』
- 主浜光朗他（1987）：「山田上ノ台遺跡」『仙台市文化財調査報告書第100集』
- 末木健（1987）：「金の尾道跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告35』  
長沢宏昌
- 須田良平（1992）：「野田山遺跡」『宮城県文化財調査報告書第145集』  
吾妻俊典他
- 高橋勝也（1985）：「伊古田遺跡」『仙台市文化財調査報告第82集』
- 高橋守克（1987）：「須江糠塚遺跡」『河南町文化財調査報告第1集』  
阿部恵
- 高橋与右エ門（1983）：「上里遺跡」『岩手県埋文センター文化財調査報告書第55集』

- 武井則道他（1976）：「大塚遺跡発掘調査概報」『調査研究集録1』
- 武田光正（1988）：「甘木市所在宮原遺跡の調査」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告14』
- 次山淳（1989）：「東北地方における古墳時代前期土器群の様相について」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』
- （1992）：「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班 - 埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 - 』
- 手塚均（1980）：「留沼遺跡」『宮城県文化財調査報告書第65集』
- （1981）：「鶴ノ丸遺跡」『宮城県文化財調査報告書第81集』
- 西川修一（1992）：「古墳時代の集落」『神奈川県下における集落変遷の分析』
- 丹羽茂他（1983）：「西野田遺跡」『宮城県文化財調査報告書第35集』
- 柳田俊雄他
- 丹羽茂（1983）：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書第96集』
- （1985）：「今熊野遺跡」『宮城県文化財調査報告書第104集』
- 永瀬福男（1982）：「貯蔵穴」『季刊考古学創刊号』
- 樋口清之（1951）：「宮城県千貫村長岡丘陵遺跡調査豫報（レジュメ）」『上代文化』20輯
- 平間・井上（1985）：「松並平遺跡」
- 古川一明（1983）：「色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書第95集』
- （1993）：「山の神遺跡」『宮城県文化財調査報告書第 集』
- 真山悟（1987）：「小梁川遺跡」『宮城県文化財調査報告書第122集』
- 村田晃一他
- 宮本長次郎（1989）：「古墳時代竪穴住居論」『研究論集 奈良県立文化財研究所学報47』
- 村田文男（1982）：「おとし穴」『季刊考古学創刊号』
- 渡辺修一（1985）：「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間」『研究連絡誌11』

# 写真図版



1. 遺跡遠景  
(西より)



2. 調査区全景



図版 1



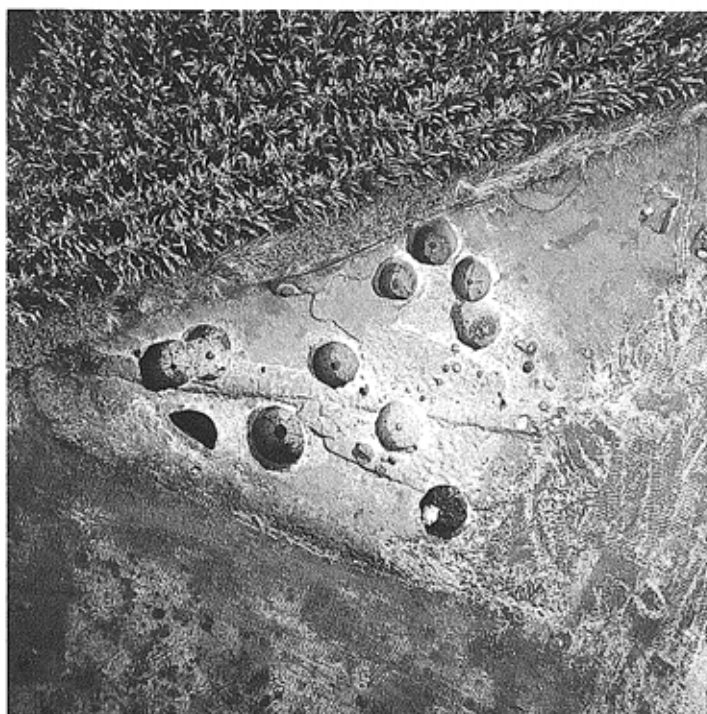
1. 調査区住居跡分布状況



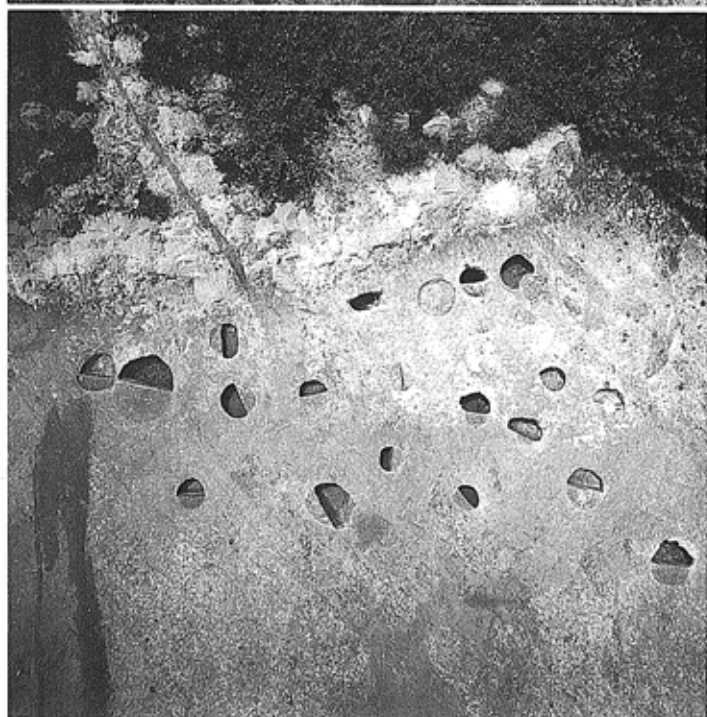
2. 2号円形周溝

図版 2

1. 調査区北西部土壤分布状況



2. 調査区南部土壤分布状況



図版 3



1. 調査区住居跡分布状況  
(北西より)



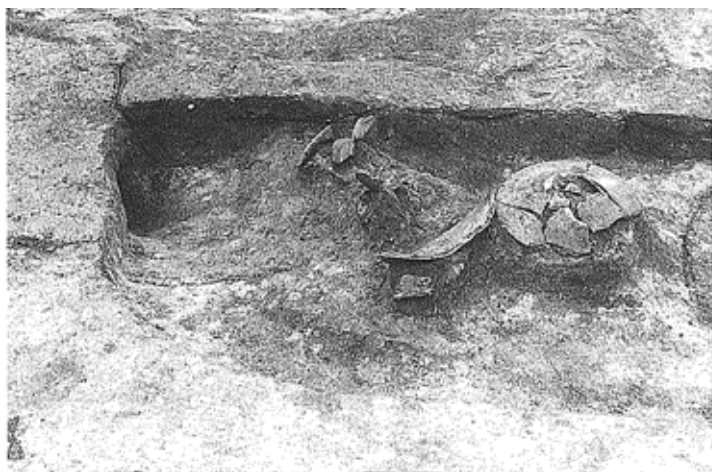
2. 調査区住居跡分布状況  
(南東より)



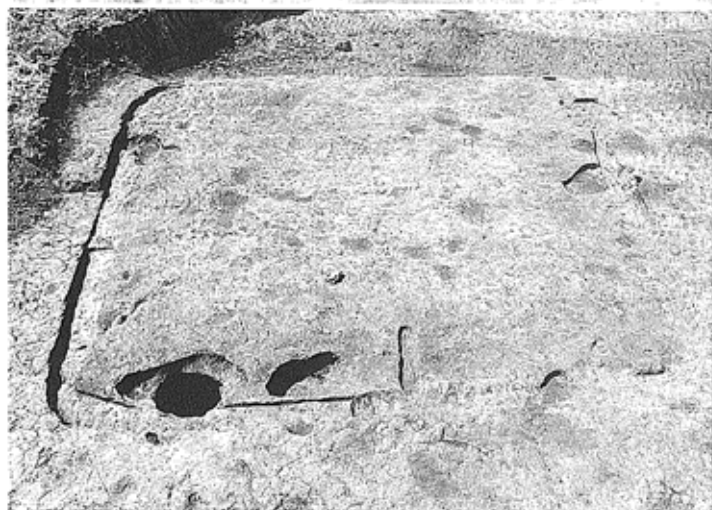
3. 2号住居跡

図版 4

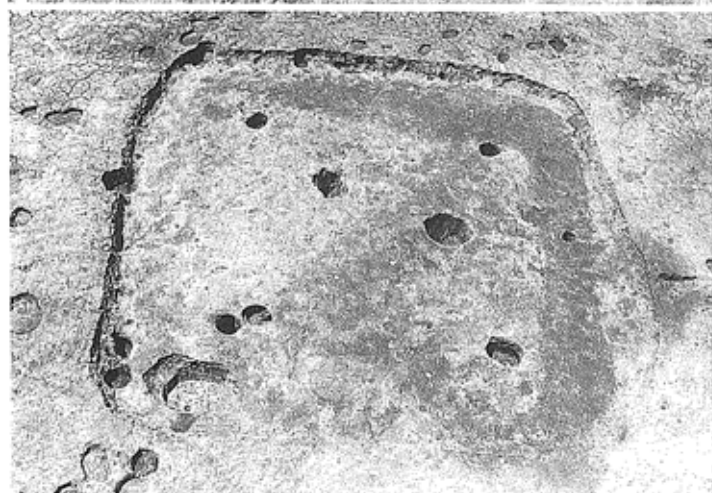
1. 3号住居跡  
遺物出土状況



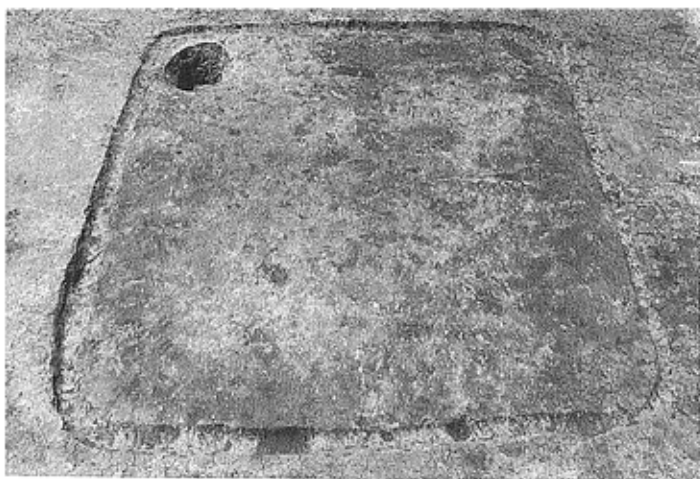
2. 4号住居跡



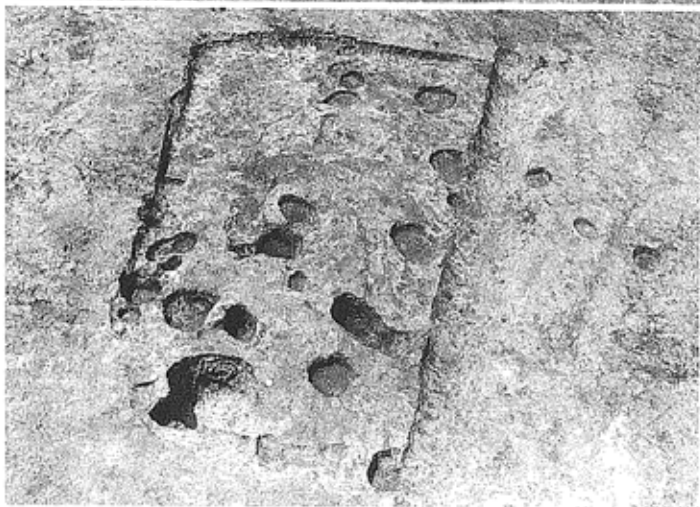
3. 6号住居跡



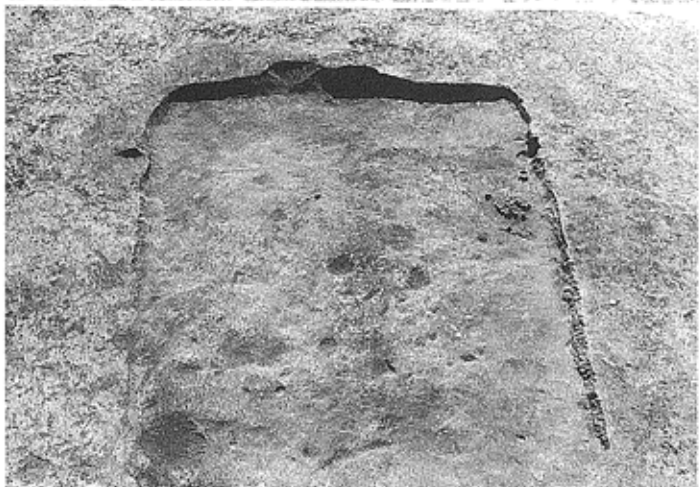
図版 5



1. 7号住居跡



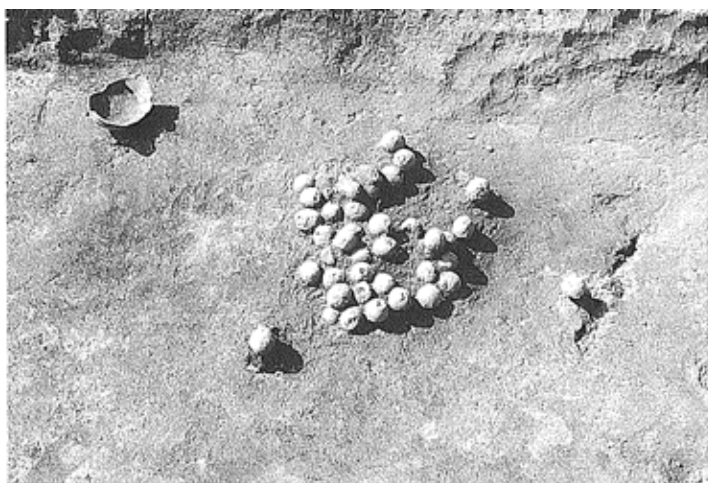
2. 8号住居跡



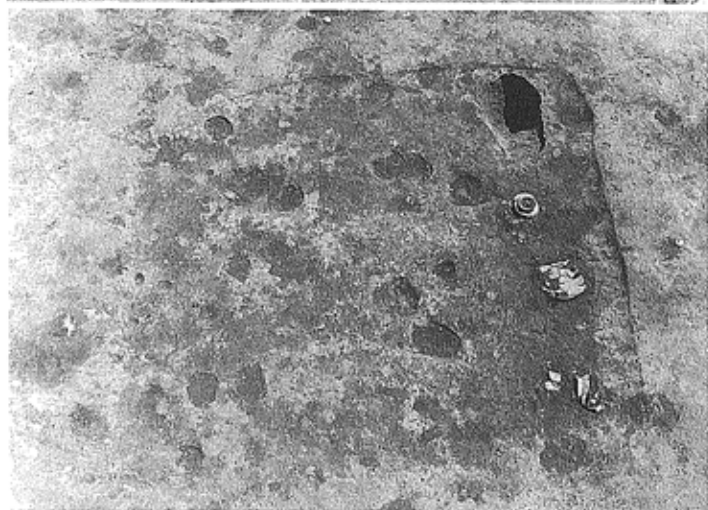
3. 10号住居跡

図版 6

1. 10号住居跡  
遺物出土状況

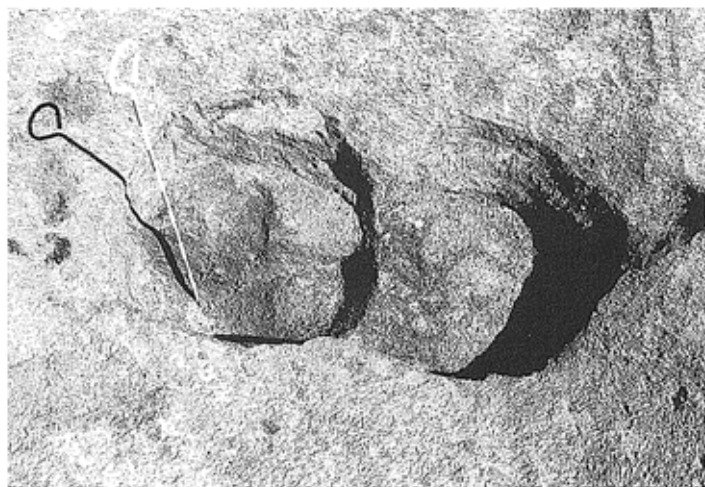


2. 11号住居跡



3. 12号住居跡





1. 12号住居跡  
P 5・P 6



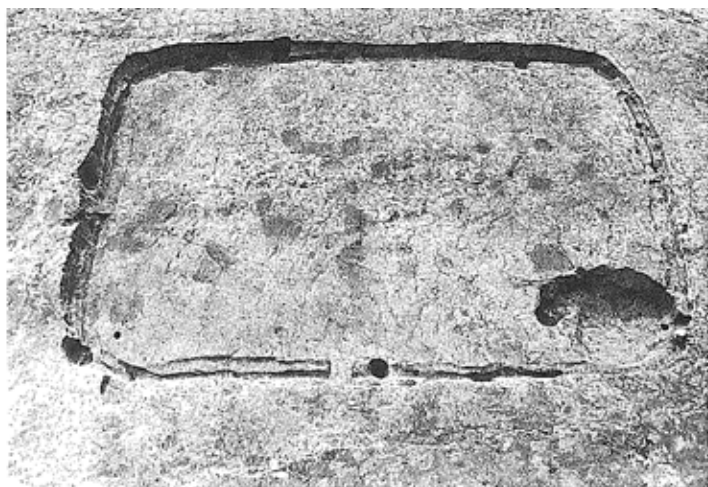
2. 12号住居跡周溝



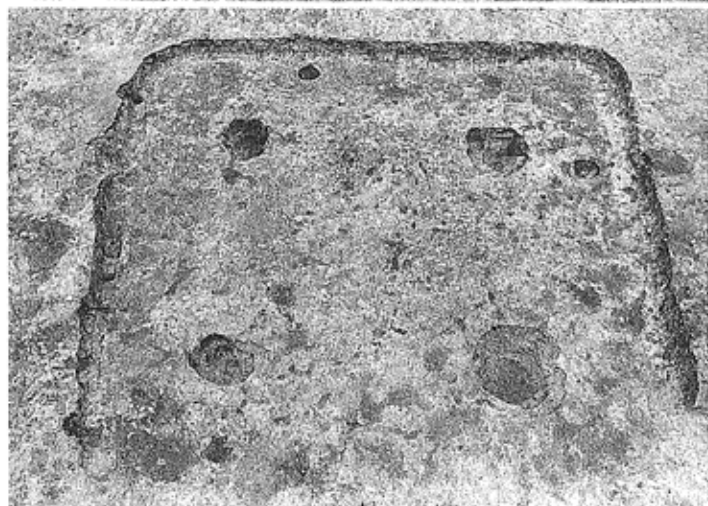
3. 13号住居跡



1. 14号住居跡



2. 15号住居跡



3. 17号住居跡



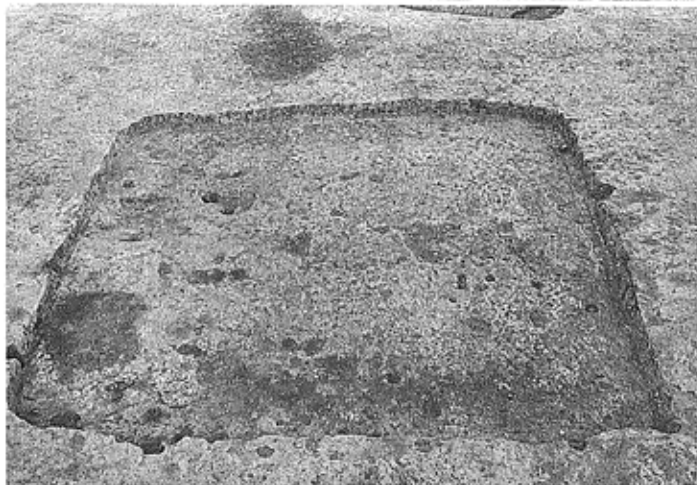
図版 9



1. 17号住居跡  
遺物出土状況

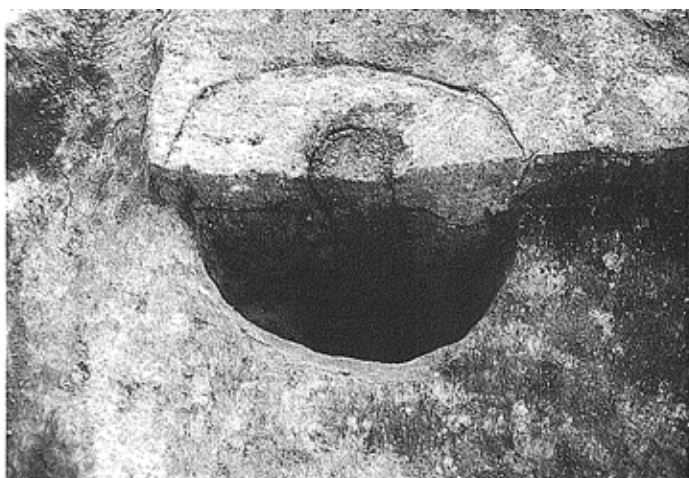


2. 18号住居跡



3. 19号住居跡

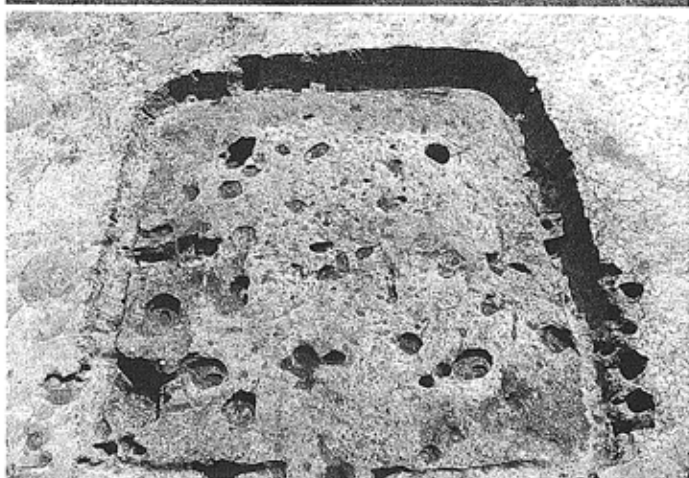
1. 19号住居跡  
P 5



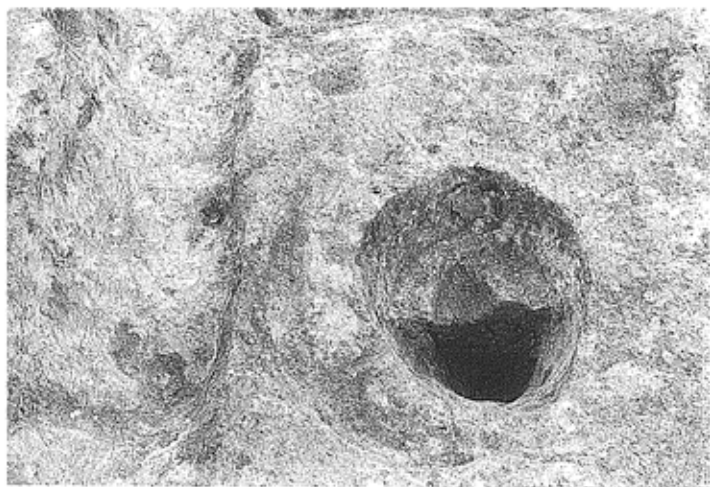
2. 20号住居跡  
堆積土土器集中



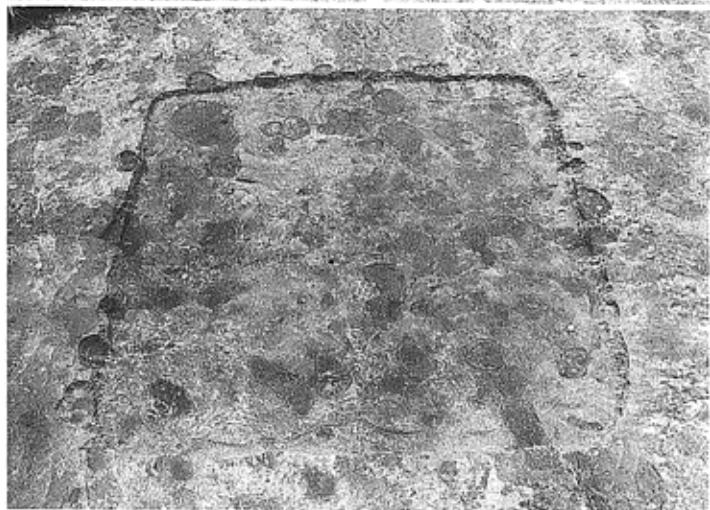
3. 20号住居跡



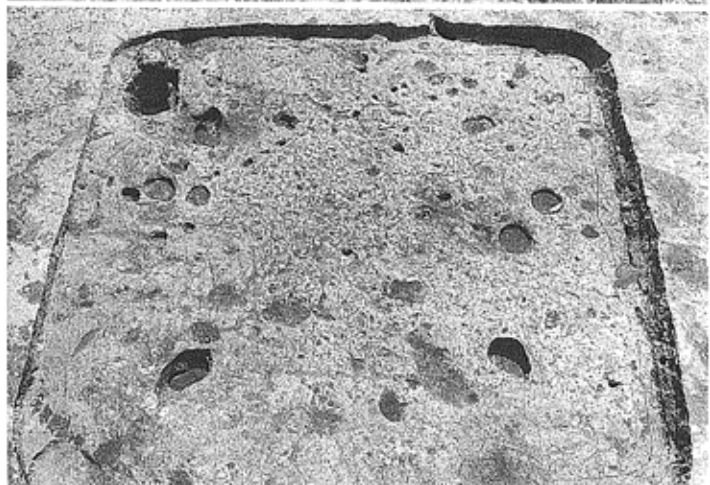
図版11



1. 20号住居跡  
P 5

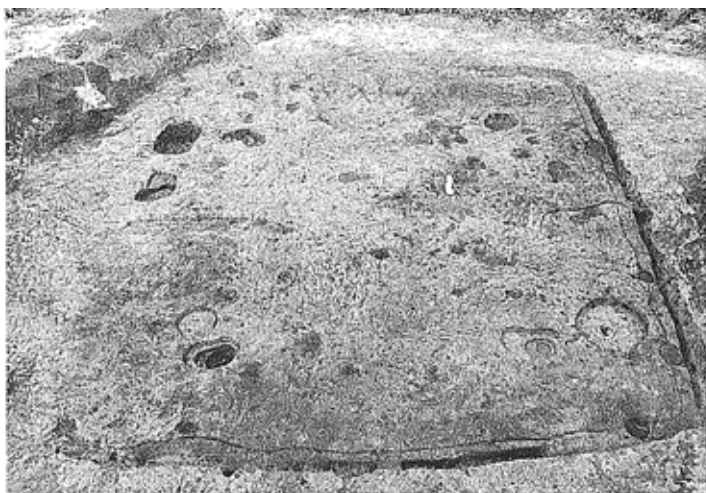


2. 21号住居跡

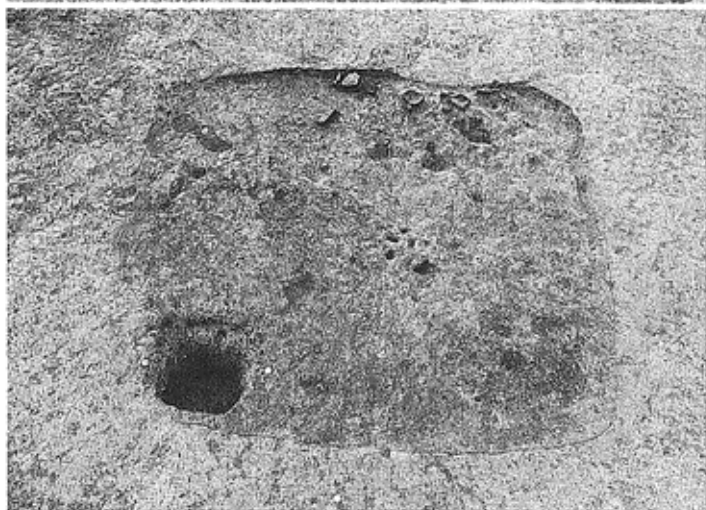


3. 22号住居跡

1. 23号住居跡



2. 24号住居跡



3. 25・26号住居跡



図版13



1. 27号住居跡



2. 28号住居跡



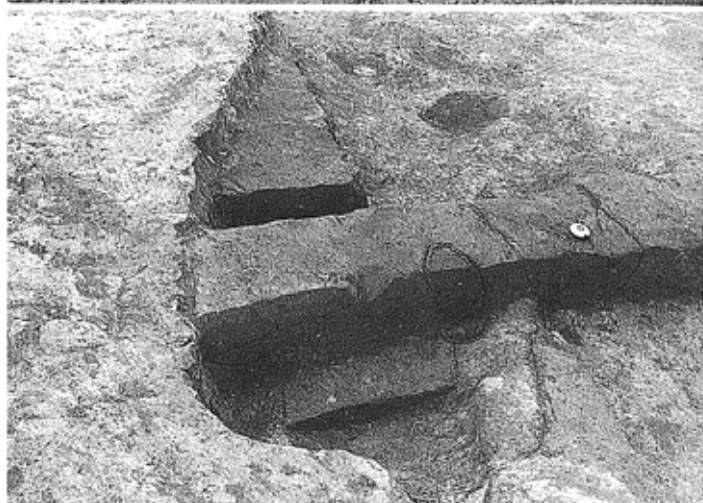
3. 28号住居跡  
溝・P5・貯蔵穴状ピット

図版14

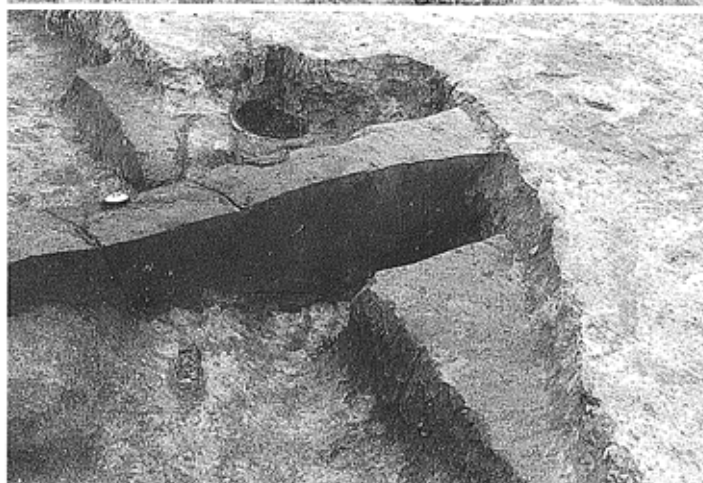
1. 29・30住居跡



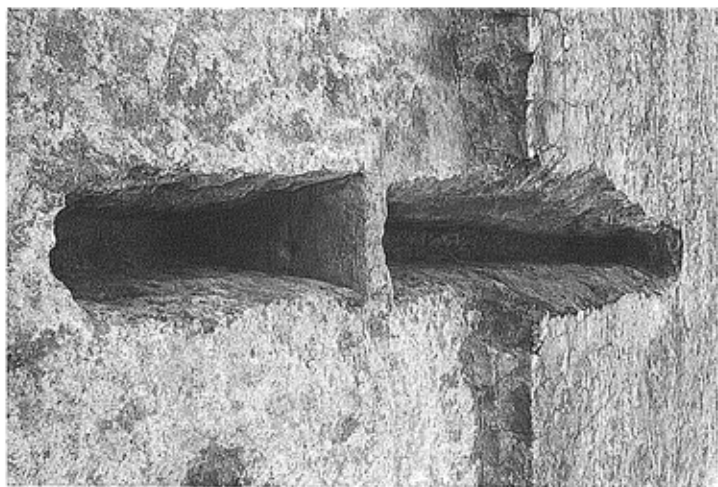
2. 1号土壇  
(北より)



3. 1号土壇  
(南より)



図版15



1. 2号土壇



2. 調査区南  
土壇分布状況



3. 4号土壇

図版16



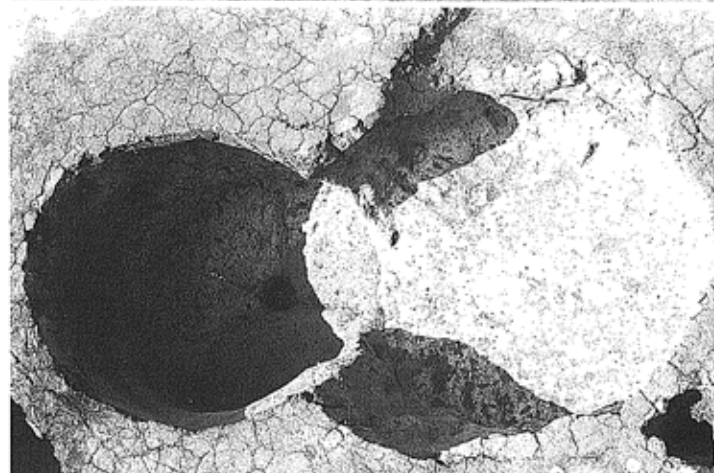
1. 5号土壤



2. 9号土壤



3. 12·13号土壤



图版17



1. 14・15号土壤



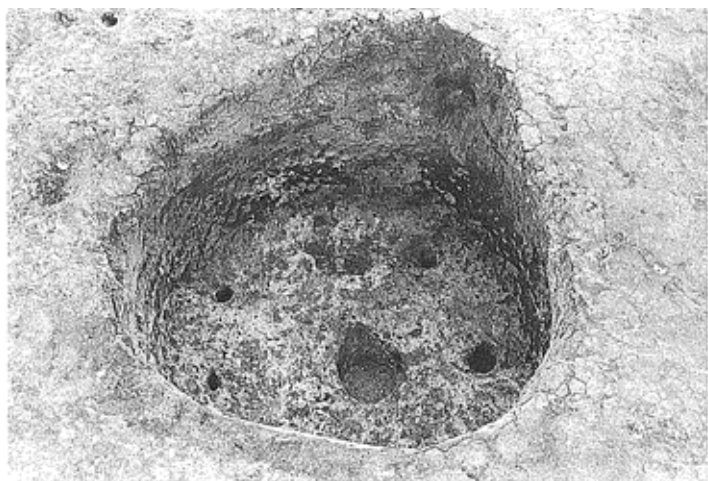
2. 18号土壤



3. 20号土壤

図版18

1. 28号土壤



2. 32号土壤



3. 40号土壤



图版19



1. 1号円形周溝

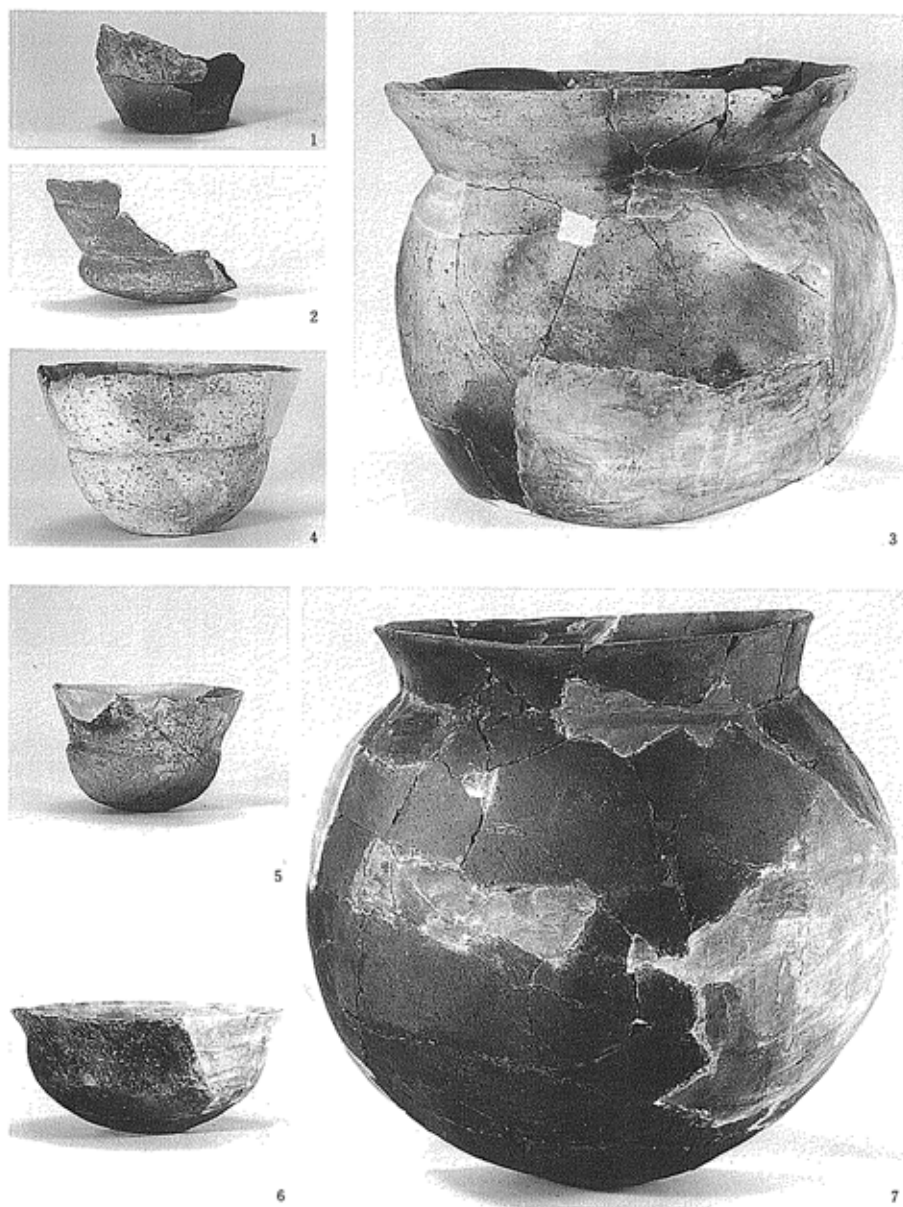


2. 第9トレンチ  
(第3図基本層序)



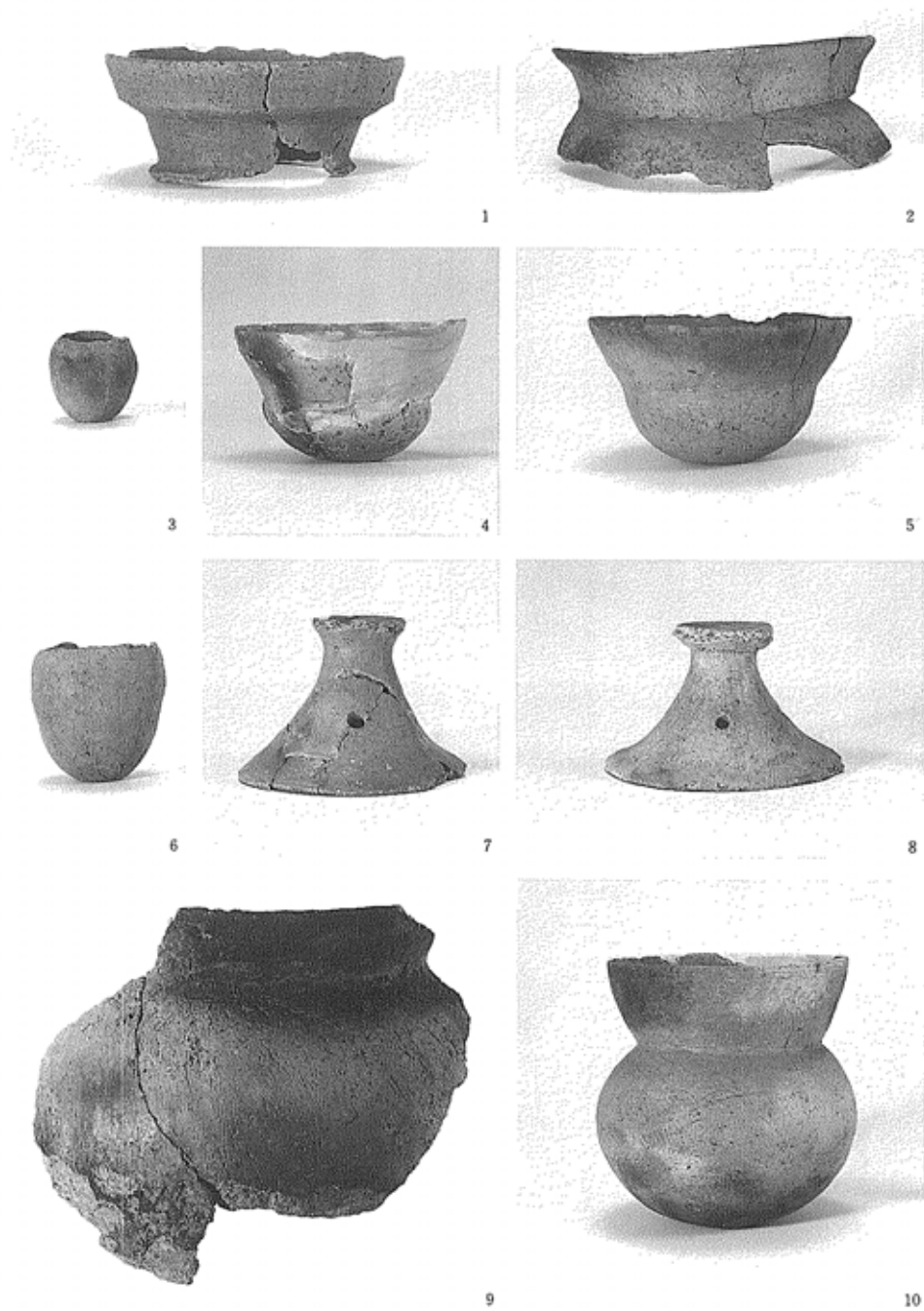
図版21 2・3号住居跡出土遺物

1 2住  
2~6 3住 S=1/3



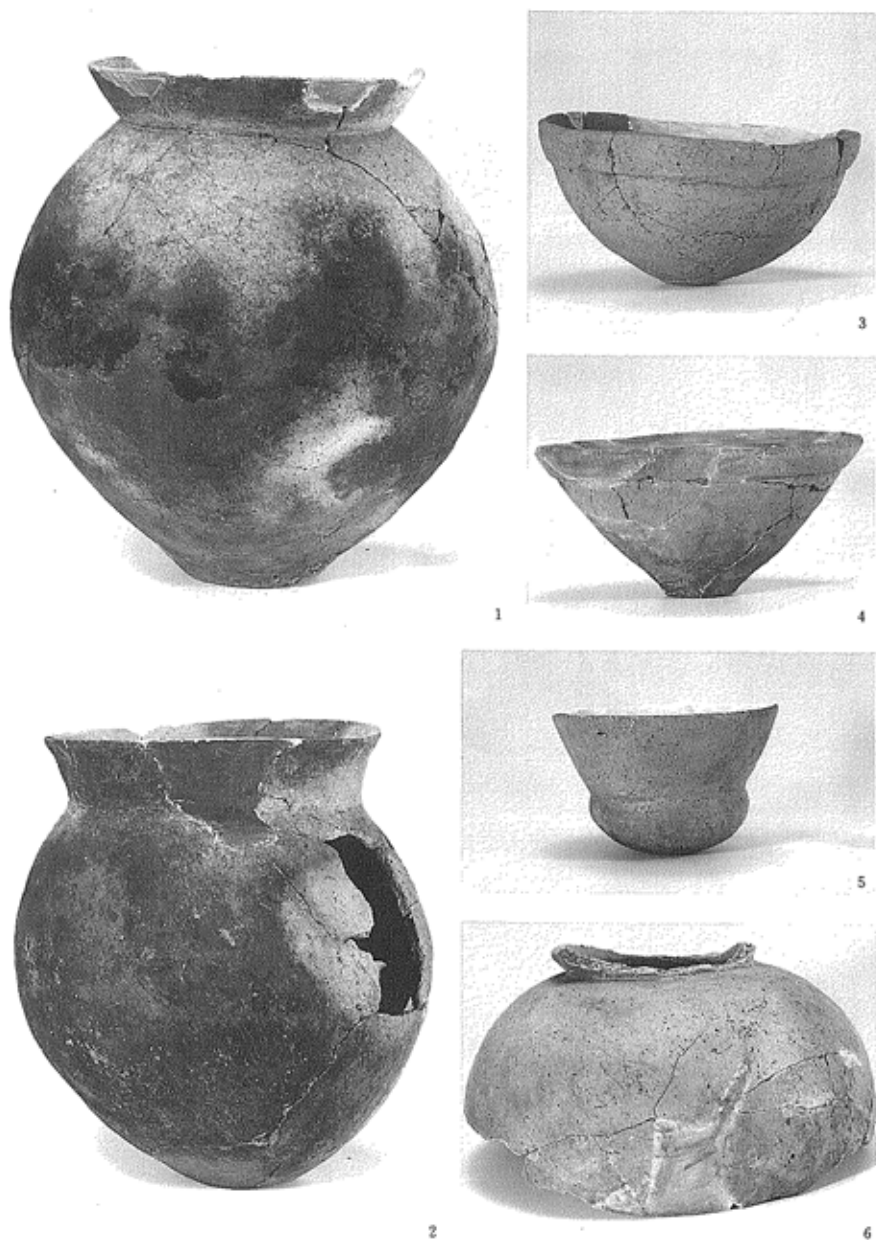
图版22 4·6·7·10·11号住居跡出土遺物

1 4住  
 2~3 6住  
 4 7住  
 5~6 10住  
 7 11住 S=1/3



図版23 11・12号住居跡出土遺物

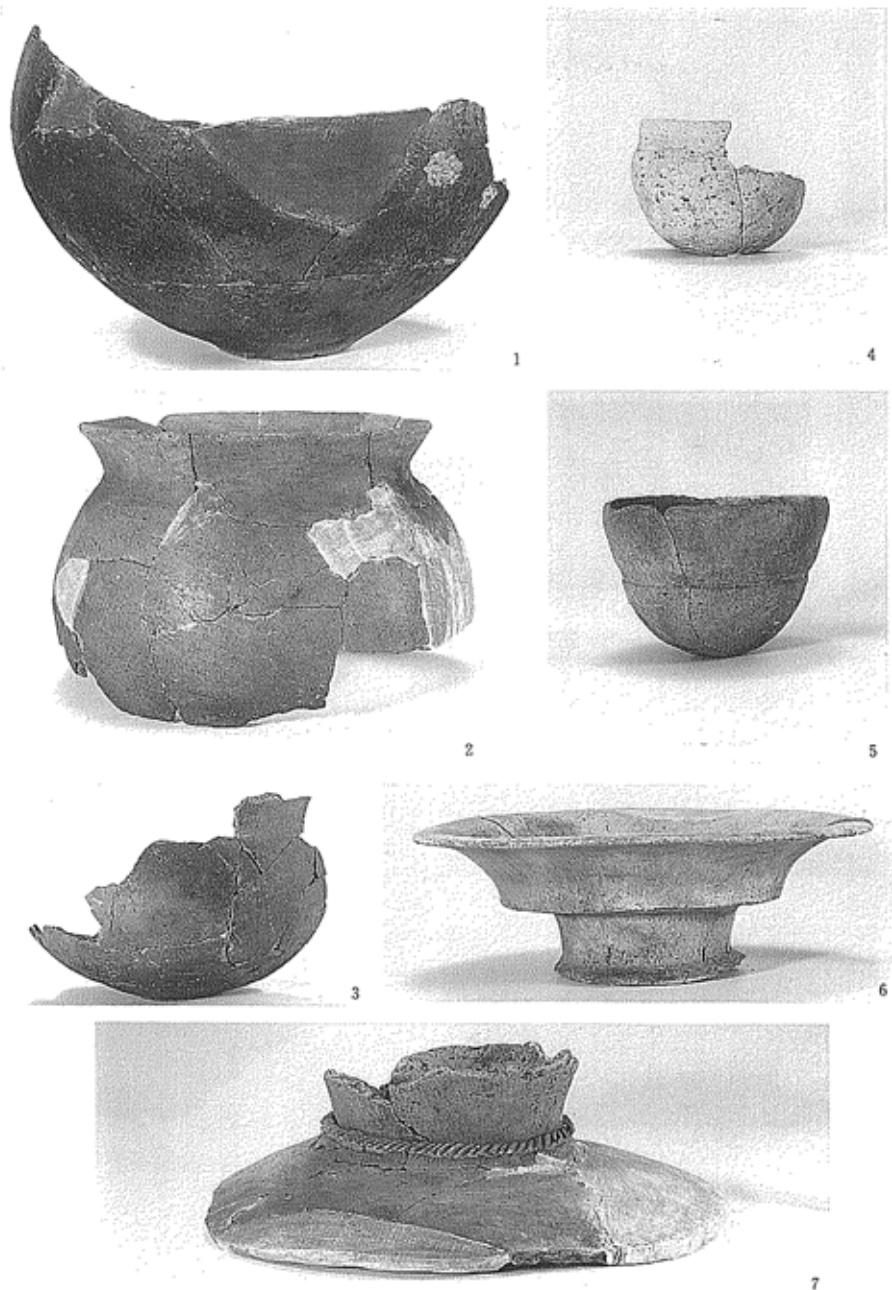
1-2 11住  
3-10 12住 S=1/3



图版24 12・14号住居跡出土遺物

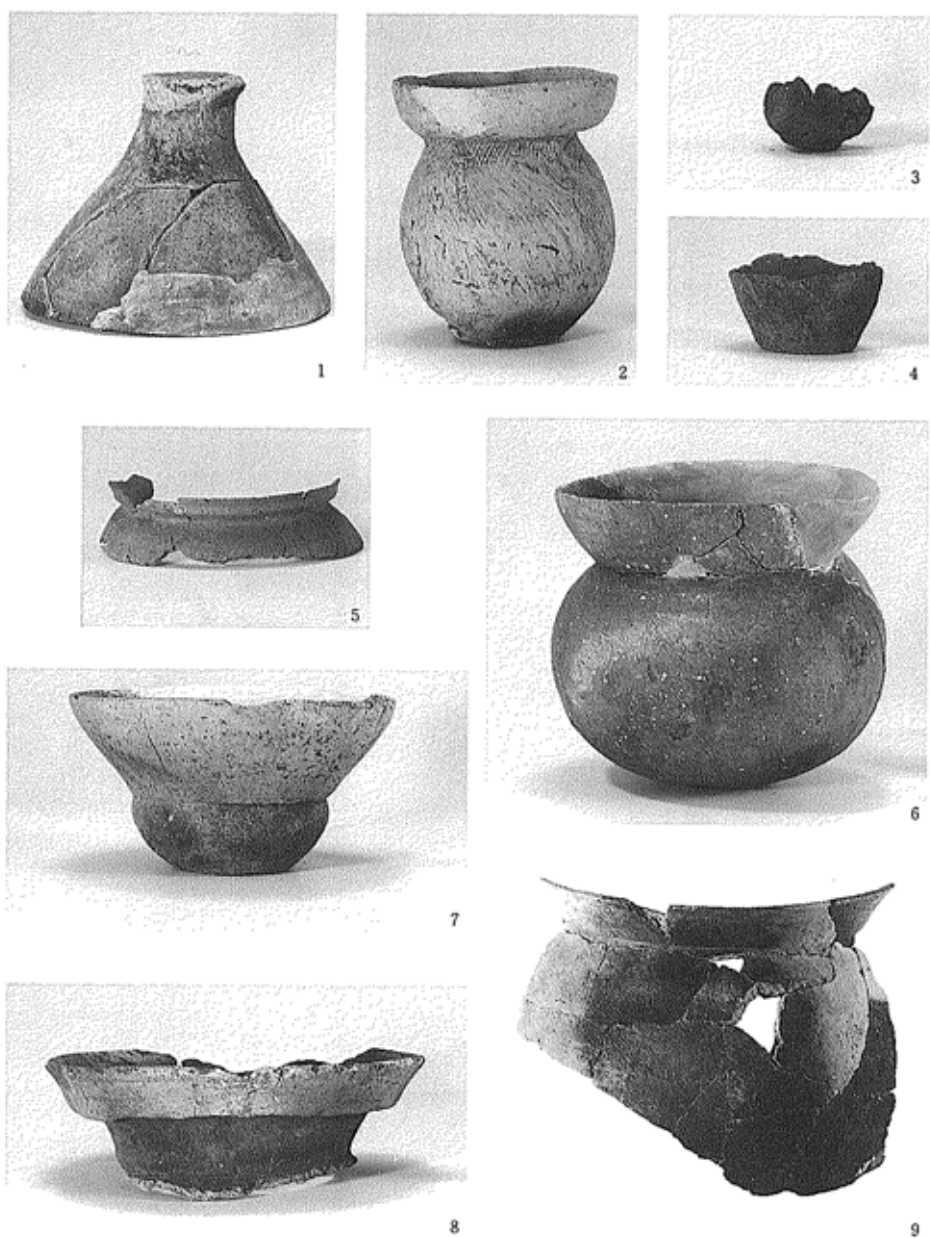
1~2 12住  
3~6 14住 S=1/3





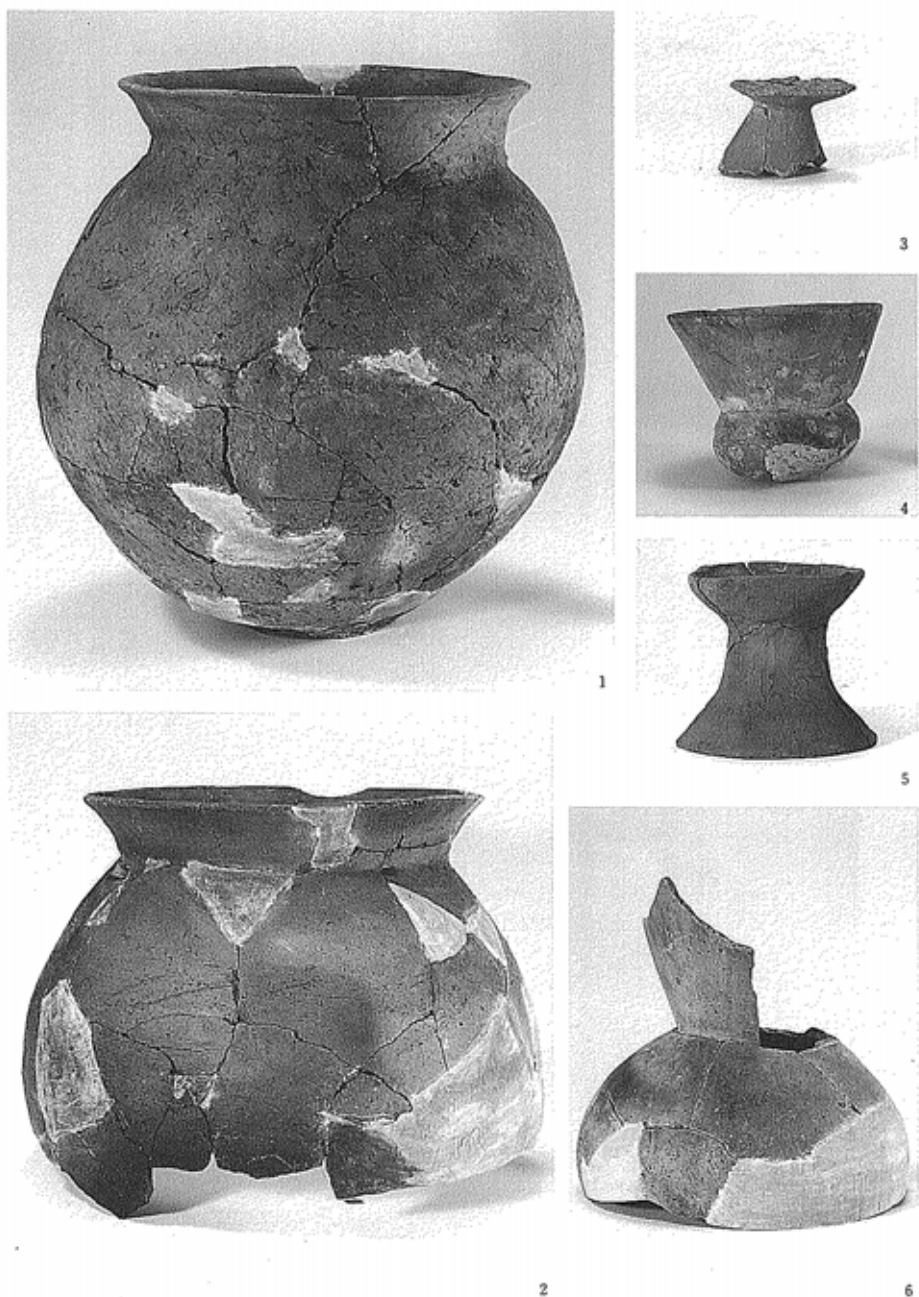
图版25 14·15·17号住居跡出土遺物

1~2 14住  
3 15住  
4~7 17住 S=1/3



図版26 18・19号住居跡出土遺物

1～2・5 18住  
3・4・6～9 19住 S=1/3



図版27 19・20号住居跡出土遺物

1 19住  
2~6 20住 S=1/3



図版28 20号住居跡出土遺物

S=1/5



1



3



4



5



2

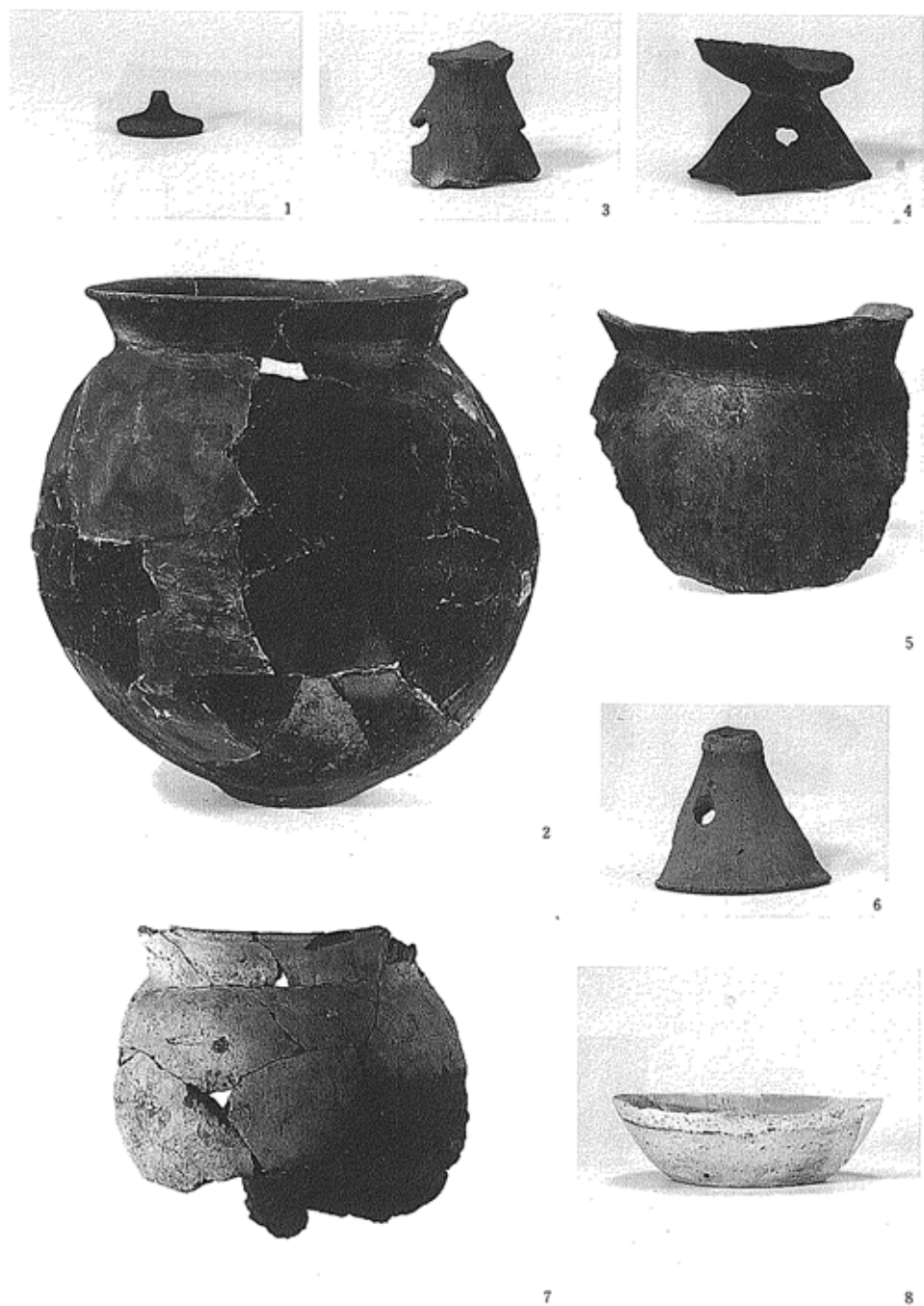
图版29 20・22号住居跡出土遺物

1~2 20住  
3~5 22住 S=1/3



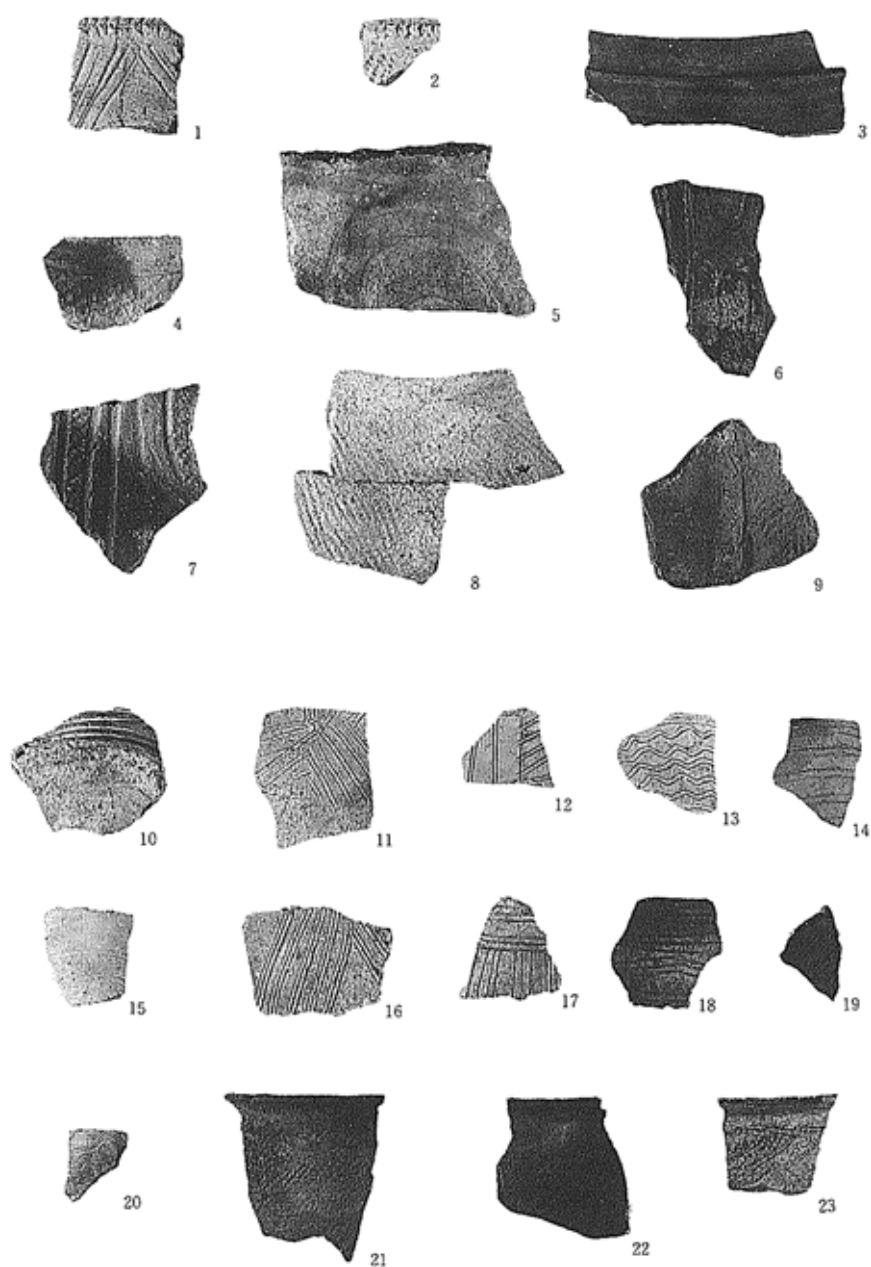
図版30 22・24号住居跡出土遺物

1～3 22住  
4～6 24住 S=1/3



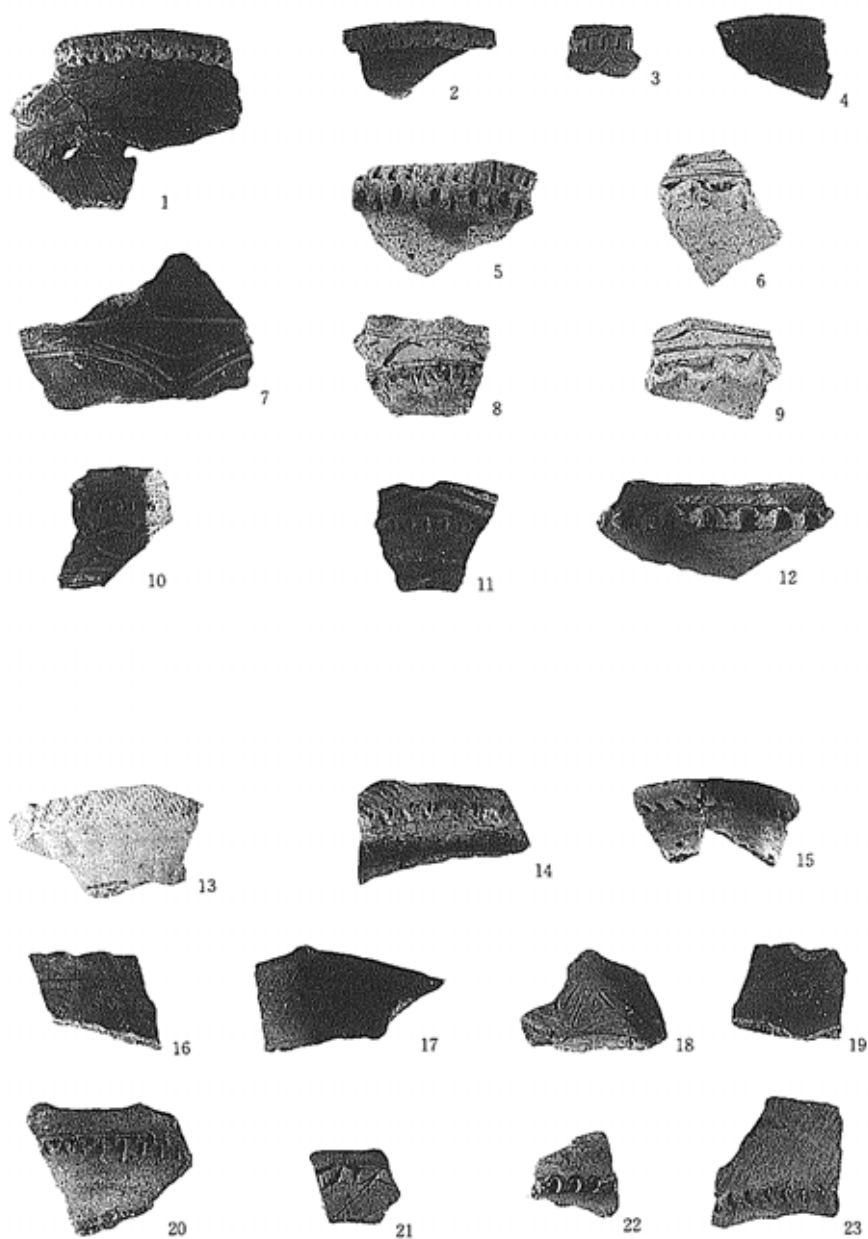
図版31 24・29・33・36号住居跡、  
 その他の出土遺物

1~2	24住	6~7	33住
3~5	29住	8	表土 S=1/3



図版32 その他の出土遺物 S=1/3 3・5～9土横  
1～2, 10～23 表土その他





図版33 その他の出土遺物 S=1/3

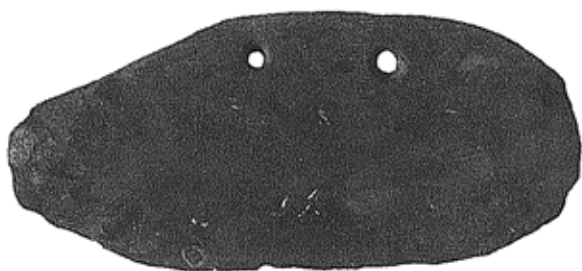
1~23 表土その他



1



2



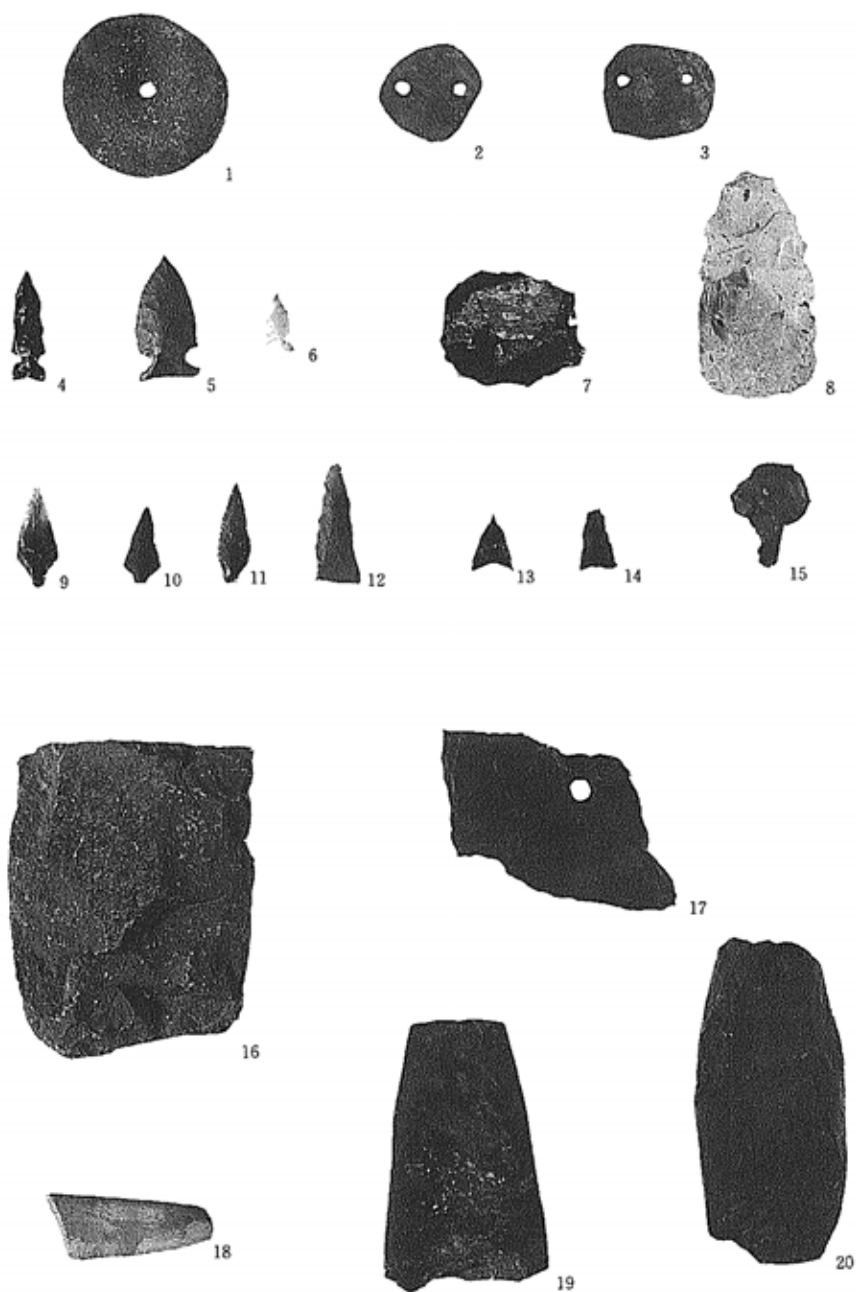
3



4

図版34 その他の出土遺物

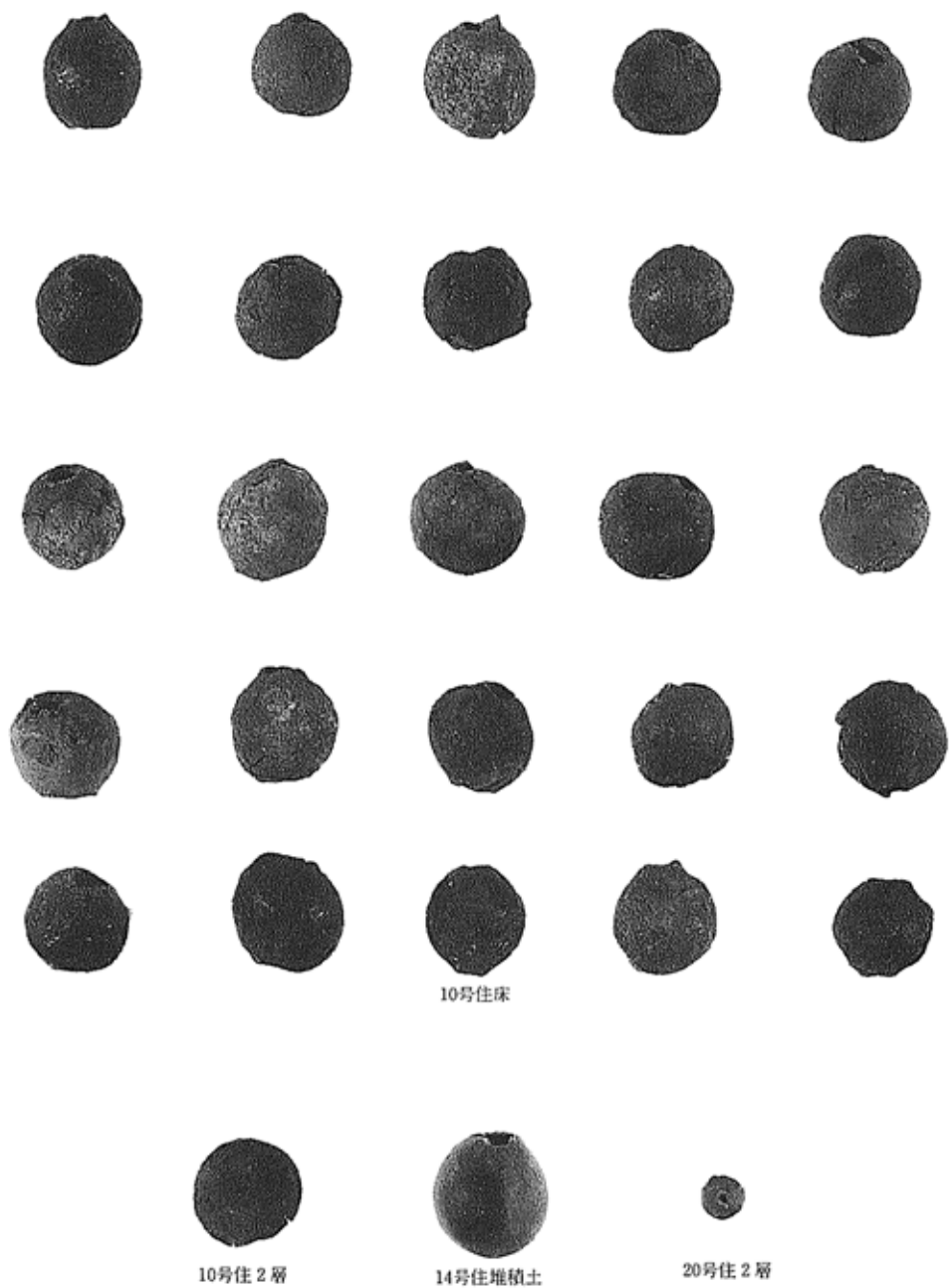
1・2 土城  
3 19号住  
4 23号住  
1・2 S=1/3  
3・4 S=2/3



図版35 その他の出土遺物

S=1/2

2・3 土城  
1・4～20 表土その他



图版36 10·14·20号住居跡出土土玉 S=1/2